
ファンタズマゴリア 交響想歌

白雨 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタズマゴリア 交響想歌

【Nコード】

N5480V

【作者名】

白雨 蒼

【あらすじ】

数多存在する世界と世界を隔てる空間、？時の狭間？。そこにその少女は存在していた。

停滞と孤独のみが存在するその世界で、少女 永遠とわは永遠とも言える歳月を過ごしていた。

狂おしいほどの人恋しさ。狂気ともいえるその空間に彼女は一人存在していた。多くの世界を覗き見れながら、彼女はどの世界にも存在することを許されずにいた。

永遠はある日、一つの世界で一人の青年に出会う。

* 大分昔に書いて、ピクシブにも一応投稿してある作品です。

00：時の狭間の少女

ファンタズマゴリア

それは遙か古の時代に存在したとされる悠久の王国。
しかしてその栄光、一夜にて絶える。

双子の騎士　私欲に走る白き騎士は、暴徒に従え白き魔剣を掲げ
た。

双子の騎士　忠義に篤き黒き騎士は、国兵くにへいに従え黒き神剣を振る
う。

己の国の、秘められし力を鑑みし国主くにぬしは、
愛姫にえを贄として、御国おんを現世うつつよから幽世かくりよへと封ずる。

その国の名はファンタズマゴリア。

永劫の時を彷徨い続ける、幻の都なり

エンドリスムⅡイヴⅡノクターナルス

『交響想歌』　第七章十九節より

長い長い時の中。それこそ時間という概念を忘れてしまっほどの長い時を、私は此処で過ごしている。

此処に来ていたいどれ程の時間が流れただろうか？

それすらもう覚えていない。自分が何故こんなところにいるのかさえ、すでに私は忘れていた。

永劫とも言える時間が過ぎた。

私という存在さえうる覚えになる中、何もすることなくこの不確かな世界を漂い、孤独のまま生き続ける。

何故こんな場所にいるのか？ そんな考えはとうの昔に消えていた。

ただこの場所がどの世界にも属さない、幾億満も存在する世界の狭間だということだけは知っている。

？時の狭間？

それが私のいる世界の名。
永遠。^{とわ}

それが私の名前。

覚えているのはそれだけだった。

後は全てがおぼろげで。知っている人の名前だって指折りほどで。音のない世界。そんな世界で鳴る音は、私の首から下げられた時

計の針の音^ねだけ。

孤独にはとうの昔に慣れていた。

何も望まず、何も考えず、何も思わず……。

そうすれば何も感じなくなるから。

喜びも悲しみも怒りも孤独感も何も感じず、ただ人形のように静かにこの空間に漂っていればそれでいい。

それこそが私。

それでも私は寂しさを感じ、哀しさを感じ、そして孤独を思い知る。

そうなった時、私はこの世界の窓を開く。

？時の狭間？は数多の世界に繋がる世界と世界の境界線に存在する世界ゆえ、この？時の狭間？からは幾つもの世界を見ることができる。

時折人恋しくなった時、私はこうして世界を覗く。

時に暖かく、時に冷たく、時に優しく、時にはつらい光景が世界の窓から見える。

戦争をする世界。死に絶えた世界。人々が楽しそうに笑う世界。

賑わう世界。哀しい世界。時には人の幸せな姿を。時には人の嘆き悲しむ姿を。

色々なものがその窓からは見えた。

私はそれを見ることだけが、この世界での唯一の娯楽となっていた。

時折この窓から外に出て、世界に出ることがある。

確かに世界に行くことはできる。でも、誰一人として私の姿を見ることができなかった。それはつまり、私という存在をその世界が認識していないということだ。

それを思い知らされても、別段哀しくはなかった。

ただ、少しだけ寂しかった。

ふとある日、私は再び世界の窓を開いて世界を覗いた。

その日除いた光景は、何の変哲もない小高い丘。季節は春らしく、一面が花で覆われていた。

綺麗な景色だった。そう思って私はその世界をしばらく見続けた。自然と笑みがこぼれ、そのことに気づいて自分自身に驚いた。

笑い方などつくの昔に忘れていたものだとかばかり思っていたから、自然と笑みをこぼせたことが嬉しかった。

そうしている内に、見ている丘に一人の男の子が現われた。

年は十七から十八程度の男子。

黒く肩まで伸びている真っ直ぐな髪がやけに印象的だった。私は思わずその男の子を凝視した。

整った顔立ち。背丈は一七〇センチより少し高いくらいだろう。

その男の子は息を切らして丘の上まで駆け上ってきた。つまり、今世界の窓からこの世界を覗いている私のほうへ、彼は駆け寄ってきたのだ。

手には木製の剣を持っている。どうやら稽古か何かから逃げてきたのだろう。その男の子が、額を伝う汗を手で拭う。その仕草一つが自然体であり、他者の目を奪うものだと思つた。現に私はそんな彼の仕草に見入ってしまった。

いや、見惚れていたというべきだと思う。

「まったく、爺さんは手加減つてものを知らないのかな？」

どうやら彼は祖父と稽古をしていて逃げてきたらしい。

彼はもう一度汗を拭ってから空を仰ぎ、丘の花の中に倒れ込んだ。「こんなにいい天気なんだし、稽古ばかりはさすがにいやだなよなあ」

うーんと背伸びをして、彼は大の字になって寝転がった。此処に至つて私は始めて彼の呼び方がいつの間にか『男の子』から『彼』に変わっていることに気づき、困惑した。

「イサっ！ 見つけたぞおー！」

遠くから誰かの叫ぶ声が聞こえた。老人の声だ。窓から声のした

方に目を向けると。白髪の混じった黒髪の、体格のいい老人が木剣を片手にものすごい勢いで丘を駆け上ってくるのが見えた。

「うえっ！？ もう見つかった！」

どうやら彼の先ほど呟いた爺さんとはあの老人のことらしい。では、先ほど老人の呟いたイサというのが彼の名前だろうか？

しかしそんなことを気にする間もなく、彼は立ち上がって駆け出して、あっと言う間に姿が見えなくなった。ものすごく速かった。

しかしそんな彼などよりも遥かに速い速度で老人が目の前を疾駆して行き、彼などよりも遥かに早く姿が掻き消えてしまった。

しばらくそのまま世界を覗いていると、彼が老人に引きずられて戻ってきた。

頭に大きなこぶができていて、彼は気を失っているのかピクリとも動かなかった。そんな彼の襟首を？んで、老人がのっしのっしと熊のように行進して丘を登り、そして下っていつて姿を消した。

その様子を見て、私はまた笑った。

楽しい人だな。

そう思って。

彼の名前は『伊爽』と言うらしい。変わった言葉で書かれた名前だった。

どうやら遥か昔の言葉で書かれた名前らしい。彼もその名前を書くことはできるが、面倒臭いらしく普段は『イサ』と書いている。

あれから私は彼のいる世界を幾度もものぞき見ていた。

と言うよりも、彼を見ていた。

無論節度はある。お風呂の時やトイレの時、着替えの時は覗かない。ただ、『たまたま』タイミングが悪く着替えの場面や『不可抗力』でお風呂の場面に出くわすこともあったけど、それは『たまたま』であり、『不可抗力』でしかないのだから仕方がない。

寝ている姿も一度だけ見たことがある。

一番多いのは家の手伝いをしている時と、稽古をしている時だった。

彼は祖父から剣を、村長から魔法を教わっていた。一生懸命に剣を振り、集中して魔法の詠唱を唱えていたり、その時の彼を、伊爽を見るのが好きだった。

気がつけば、私は彼に恋をしていた。

いけないと分かっているながら、この想いを抑えることはできなかった。

日に日に強くなる彼への想いは、自分でも信じられないものだった。

無理だということは分かっていた。住む世界から何から、全てが私と彼では異なるのだから、

世界に降り立っても、彼には私の姿など見えないのだから。

分かっているながら想いを消化することはできなかった。それどころか、それを理解してなお、私は彼を恋していた。

彼は見ての通り容姿もよく、気が効いて気さくで優しい。

当然といえば当然だが、彼の住む村の同世代の女の子の多くは彼に少なからず焦がれていた。その中でも彼の幼馴染みらしい少女は、一見ただけで分かるくらい彼を好いていた。

その子が彼といるのを見るだけで、言葉を交わしているのを見るだけで、私はむっとした。

嫉妬していた。

同時に憧れてもいた。

羨ましかった。

彼と普通に顔を合わせられることが。彼と言葉を交わせることが。彼と触れ合えることが。彼と、一緒にいられることが……。

私は言葉を交わすことも、顔を合わすこともできないから。

そう思うと、哀しくて仕方がなく、涙が止まらなかった。

それほどまでに、私は彼を愛していた。

彼を見つけ、彼に恋してから彼の住む世界で一年が過ぎた。

周期は一周して再び春。

私はすでに、伊爽のいる世界に降りるのが日課になっていた。

始めて出会ったあの丘に、彼は一人座っていた。

私は彼のすぐ側に降り立ち、彼を見つめる。そしてふとあることに気付いた。

彼の手に握られている一輪の花。

白い花弁の綺麗な花だ。

その花は私が世界に降り立った時、私の立ったところに必ず咲く、私がそこにいるという証の花だった。

どうして伊爽がその花を持っているのか私には分からず、困惑したままその場でオロオロしてしまう。

すると伊爽が何かに気付いたようにして急に私のほうを見た。

何かを探すように。誰かを探すように。

私は突然のことに驚いて目を向いて彼を見た。驚きのあまり身体が硬直してしまった。相手に見えているはずがないことは分かっているけど、それでも彼と目が合ってしまうと体が言うことを聞かなくなっていた。

「誰かいるのかい？」

今度こそ、私は絶句した。今彼は、間違いなく誰かいるのかと問いた。誰に彼が問いているのか？ 私は振り返って他の人間の姿を探すが、そこには誰もいない。

やはり、彼に問われたのは私なのだろう。

しかし彼に私の声は届かない。それはずいぶん前から分かっていることだ。では、何故彼は私の存在に気づいているのだろうか？

「イサ」

そこに新たな声が割り込んでくる。この声は知っている。彼の幼

馴染とかいう少女だ。確か名前はアイナ。

？綺麗？よりも？可愛い？の定義が合う少女だ。

彼のいるところに向かって彼女は丘を登ってくるのが見えた。手を振りながら伊爽の元へ駆けてくる姿は、なんとなく絵になる気がした。私よりも。

彼の元に辿り着いてから、アイナは小首を傾げて彼の手の中に握られる花を見て顔を顰めた。

「その花……」

「ああこれ？　綺麗だと思ってさ。それがどうかしたの？」

彼は手にしている花を見てから、険しい表情をしているアイナを見る。

「その花……村のみんなが気味悪がってる花だよ」

「どうしてさ？　こんなに綺麗なのに」

「だってその花。どの季節にも咲くもの。それに咲くのは決まってイサの近く。変だと思わないの？」

話を聞いていた私は、どうしようもなく悲しくなった。

私が世界に下りたということを証明できる唯一の証。それを拒まれ、忌まれるということは、それこそ私が世界にほんの一時降りることさえ拒まれるのと同じだからだ。

「そうかい？　ボクはこの花、好きだけど」

伏せていた顔が自然と上がり、視線は自然と伊爽に向けた。たつたその一言が、これほど嬉しいことだとは思わなかった。

そんな伊爽の言葉に、アイナは非難がましくむつとして言う。

「何でさ？　もしかしたら呪いの花かもしれないじゃん？」

「むしろ何で呪いの花になるのかボクには分からない」

「でも」

「でももへつたくれもあるもんか」

すでに彼の視線はアイナには向いておらず、向いているのは私の立っているほうだった。正確には、私の立っている足元に咲いている、私がこの世界に降りたという証の花を見ていた。

彼の視線を追ってアイナが同じく花を見つけ、顔を顰める。

「また咲いてる。気味悪いなあ」

そんな彼女の声など、すでに彼には聞こえていないらしい。彼は私の足元に咲く花を見て深刻な顔をし、更に視線を私に向けた。

見えているの？ そう問いたくなってしまうほど、彼の相貌はしつかりと私の目を捉えていた。

だけど私は何も言わず、ただ彼の相貌を見て返すだけ。

やがて彼はゆっくりと視線を逸らし、自らの頤おとがに指を添えて考えるような仕草をしてみせる。

「イサ？ どうしたのよ」

彼の様子に明らかかな不信感を覚え、アイナが彼の顔を覗き込むようにして屈むが、彼は完全に無視していた。

むくと唸って彼女はその場で仁王立ちする。その間もイサは何かを考えるようにしてその場から動かない。

何を考えているの？ 問うことは出来ないが、気にはなる。この人が今何を考え、何を思っているのか……。

「アイナ。師匠せんせい ゲイルさんに、後で会いに行くって伝えておいて」

「え、ええ？ 何で何で？」

「頼んだよ。ボクはこれから爺さんと父さんに話をしなきゃいけないから」

「ちよっ、イサ」

「それじゃあ」

取り付く島もなく、伊爽は自分の要件だけを告げるとその場から風のように去っていった。残されたのは、私とアイナだけ。二人して呆然としたまま彼の走り去ったほうに目を向けている。

先に我に返った私は今なわけの分からないまま呆然としているアイナに目を向けた。彼女は身を小刻みに震わせている。

そして次の瞬間、何を思ったのか声を上げて飛び上がった。

「これってもしかしてプロポーズ？ 親御さんの承諾を貰うとかそ

ういうやつなの!？」

なにやら自分に都合のいい解釈をしている。思わず私はむっとしてしまふ。

「きゃあーどうしようどうしようー……はっ！ おじいちゃんに後でイサが会いに来るって伝えなきゃ」

何か一人で勝手に騒いで自己完結し、イサに頼まれた用ことを済ませるべく、彼女もまた村のほうに向かって駆けていった。

一人取り残された私は、しばらくその場でひとり考え込んだ。

先ほどのイサの表情を思い出す。あれは求愛とかそういうのとは違う、何かを真剣に考え、そして決意した表情ではないかと、私は予測した。

だけど、まさか彼があんなことを言い出すということを、この時の私は予想だにしていなかった。

日が傾く頃、彼は祖父のエッジと父の天先あまさきを連れて、村長宅を訪れていた。もちろん、私もその後ろに同行していた。

しかしこうしてみると、伊爽の家系は、どうも変わった名前の人間が多いみたい（と言っても、伊爽にしても天先さんにしても、兄弟はいないようだ）だった。

「師匠。お話があつて参りました」

「……うむ」

何処か威圧感のある、うめきのような返ことが返ってきた。

白髪の混じり始めた、翠色の髪をした老齢の男　この村の村長、ゲイルさんだ。

伊爽を初めとした、この村の若者たちに魔法を教えている人物。かつて伊爽の祖父であるエッジと共に世界に名をはせたほど高名な魔法使いらしいけど、真偽は良く分からない。

分かるのは、この人の魔法の実力は相当なものだということだけ。そんな人物が、先ほどの重圧的声音を一転させ、口元に微笑を浮

かべて伊爽を見た。

「私に、話があるらしいな……イサ」

老人の問いに、彼は静かに頷いて見せた。そして視線を一瞬だけゲイルの隣に立つ少女に向ける。

彼の言いたいことを理解したのか、老人は頷いて見せ、視線を自身の孫であるアイナに向けた。

「アイナ。退室しなさい」

「え！？　で、でも……」

「すぐに済むだろうから、お前は下がっていなさい」

祖父に言われ、アイナは渋々ながら客間から出て行った。でも、多分部屋の扉の前で聞き耳を立てているのだらうと、私はなんとなく思った。

多分、私も同じ立場なら同じことをしただらうからだ。

とりあえずアイナが部屋を出たのを見届けたゲイルさんは、視線を扉から彼へと移した。

「で……話とは、何だ？」

しかし、ゲイルの問いに答えたのは彼ではなく、彼の父である天先さんだった。しかも返答ではなく、自分の意見の主張だった。

「村長からも言ってやってください。こいつときたら」

「待たぬかアマサキ。私はお前ではなく、イサに聞いたのだ。イサの口から、こやつのお話を聞きたい」

「は、はあ……」

ゲイルさんの言葉に、天先さんは渋々ながら言葉を収めた。

一体彼が家で何を話したのか、私は知らない。あの後私は一度？時の狭間？に戻ったので、彼が二人に何を話したのかは一切知らないまま、私はここに來たのだから。

私は息を呑み、彼の言葉を待つ。

彼は父と祖父、そして村長の視線を一身に受けながら、静かに深呼吸した後口を開き、告げた。

「ボクに、村から出る許可をください」

ゲイルさんの顔に険しい何かが走ったのが、私には分かった。そして、エッジさんと天先さんが硬唾を飲んだのも……。

彼の目を見据え、ゲイルさんは彼を威圧しながら言葉を口にした。

「イサよ。自分の言っていることの意味が分かっているのか？」

「無論です」

「この村では、成人を迎え独り立ちできるようになるまで、村から出ることは禁じているのを知った上での発言だというのは？」

「その通りです」

私は驚いた。この村にそんな掟があったなんて露にも思っていなかったということ、彼がそれを破ろうとしているということの両方に、私は驚愕を隠せなかった。

扉の向こうでガタンツという音がした。おそらく聞き耳を立てていたアイナのものだろう。彼女も自分と同じように驚愕したのだろう。老練の魔法使いは彼を見据える。彼の相貌をしっかりと覗き込んでいる。

彼の真意を探るように。彼の考えを読み解こうとするかのように。

「……理由を聞いて、良いかな？ イサよ」

その問いに、彼は頷いて口を開いた。

「村長は、この一年でどこでも咲く花のことをご存知ですか？」

「知っている。村のあちらこちらに季節を無視して咲く白い花……あれを何とかできないかと相談に来る村人もおるくらいだからな」

一瞬だけ、彼の表情が曇った。

私も少しだけ気が重くなった。

どうにかする方法があるとすれば、それは私がもう此処に来なければいいのだ。そうすれば花が咲くことなどなくなる。

でも同時に、私はそんなことは出来ないと思った。

あの停滞と孤独のみしか存在しない世界。

私はいつもそこに孤独に存在する。

気がつけば私はそこにいた。

狂い惜しいほどの人恋しさ。それは今も変わることはない。
世界に降りたところで、誰も私を認識してくれない。

それはあの世界にいるのと同じことだから。

それが彼という時だけは、少しだけ弱まることを私は覚えてしまった。

少しでもこの狂気を忘れたい。そう思うたびに、気がつけば私は彼の側に行くようになっていた。

それを止めることは、恐らく出来ない。

そう心の中で呟いていると、彼が言葉を発した。

「あの花は、ボクの居る場所に咲きます」

彼の言葉に、ゲイルさんが顔を顰めた。彼は構わず言葉を続ける。

「それと、あの花が咲く前に、ボクはいつも誰かの気配を感じます」
私は言葉を失った。

今、彼が何を言ったのか、一瞬理解できなかった。

その間も、彼は言葉を続ける。周りが不審な顔をして、気にすることなく言葉を続ける。

「誰かがボクの側に立って、ボクを見ているのが分かります。姿こそ見えないけど、確かに誰かがそこにいます。そしてその場所に、あの花が咲く」

そう言って、彼は私のほうに顔を向けた。

私が驚いて目を剥く中、全員が彼に習って私のほうを見た。

「現に今も、あの気配はそこにいます」

彼は断言した。

私は震えた。

驚愕と戸惑い、そして嬉しさと喜び、それとほんの少しの哀しさに震えた。

手で顔を覆い、溢れそうになる涙を必死に堪える。

「暖かくて、優しく、それでもって、とても寂しそうな、誰かの気配」

彼は愛おしげに私のほうを向いたまま言葉を続ける。

三人の大人は、今なお何もない空間を見つめる彼に、ただ黙って視線を向けて。続きを促す。

「だからボクは知りたいんです。この一年の間、ずっと傍にいたこの気配は誰のものなのかを。どうして姿が見えないのかを。どうして、傍にいたのかを……」

そう告げられた彼の言葉。

それが私にとって、それほど嬉しいことなのか。

それを彼に伝えたくて仕方がなかった。

想いが胸の内で溢れる。

彼は私からゲイルさんに向き直り、頭を下げた。

「お願いします師匠。二年後の成人の儀なんて待ってられません。ボクは今すぐにでも此処から旅立って、この気配と花の正体を知りたい。そのために、世界へ出たい」

そう告げて、彼は頭を上げ、ゲイルさんの目をじっと見つめて、

「無理を承知でお願いします、師匠」

彼はそう言った。

場の空気がしんと静まる。

誰もが彼の言葉に反論できないでいるようだった。

彼の言葉には、それだけの重みがあったのかもしれない。

誰もが険しい表情で彼を見据えているが、彼は微塵も臆することなくゲイルさんを見据えていた。

どれだけの時間がたったか分からないほど静寂は続き、それはゲイルさんの吐き出したため息によって終わりを告げた。

ゲイルさんは目を閉じ、開くのと同時に苦笑を浮かべ、肩を竦めた。

「……負けたよ、イサ。わしの負けだ」

「村長！」

天先さんが声を上げるが、その隣でエッジさんが苦笑して彼を諫めた。

「アマサキよ、村長であるゲイルが良しと言ったんだ。もう取り消しは出来んよ」

「父上まで！」

「父さん」

どうにかして老人二人を説得しようとしている天先さんを、彼が呼び止めた。呼ばれて息子を見る父に、彼は告げる。

「ボクは何があつても村を出るよ。村長からの許可も出た。ならもう、誰もボクを止められやしない」

揺るがぬ意思を告げる彼の言葉に、天先さんは一瞬たじろく。その隙を彼は見逃さず、更に言葉でまくし立てる。

「ボクは村を出ると決めた。この気配が何なのかを知るために。いや……知らないといけないんだ。そして会わなきゃいけないと思う。この気配の主に、ボクは会わなきゃいけないんだ」

彼はそう言つて、父を見据えた。天先さんはいかに言いたげに必死に言葉を搜しているみたいだけど、言葉が見つからず、ついには諦めたように肩を落とし、

「……好きにしろ」

そう言つて、屋敷を早々に出て行つた。

彼は父の背を見送つた後、祖父を見た。

エッジさんは何も言わず、にやつと笑んで見せた。

肯定の意だ。

彼は頷き、ゲイルさんに視線を戻す。

「今年の成人の儀に出るといい。皆にはわしから伝えておく。お前は来週の成人の儀に備えて準備するといい。よいなイサ」

「はい、師匠」

頷いて、彼は再び私に視線を向けた。正確には、私の立っている場所に咲いている花に。彼は私を証明する花を見て、微笑して呟いた。

「必ず……辿り着いてみせる」

先ほどから堪えていたものが、とうとう堪え切れなくない、私は

小さく嗚咽を漏らしながら涙した。

嬉しくて嬉しくて、仕方がなくて、私は涙した。

だから私は、嗚咽を漏らしながら、彼に聞こえないことを承知で、部屋から出て行こうとする彼の背に呟いた。

「……ありがとう」

一瞬、彼が立ち止まって振り返った気がしたけど、それは歓喜のあまり私が勝手に見た幻だったのかもしれないと思った。

01：半年後

遙か古の時代、文明は今より遙かに栄えていたとされていて、世界各地にそれを証明するかのように今の文明技術では到底創り上げることが不可能な遺跡がいくつも存在している。

人はそれを古代遺跡と総称した。

多くの冒険者や考古学者たちがこの古代遺跡に眠る財宝といえる古代遺産を求め、日夜その遺跡に潜り込む。

しかし多くの罨や住み着いた魔物に阻まれ、時に諦め、時には死ぬ冒険者は後を絶たない。

そんな危険を顧みず、その障害を乗り越えて遺跡の古代遺産を得られる冒険者も存在する。

そして彼らはそんな障害を乗り越えて遺跡の最深部に辿り着いた人間だった。

五人の風変わりな冒険者。

包帯であちらこちらを覆った、まだ子供としか言いようのない容姿の白い簡易なドレスを着た少女もいれば、冒険者と言うより学者と呼ぶほうがあっている、冷徹な瞳をしたメガネの男もいる。

これ見よがしに魔女特有のとんがり帽子を被った、露出度の微妙に高い出る所は見事に出ていて、引っ込んでいるべきところは見こに引っ込んでいるグラマーな銀髪の女性もいる。

そして大人と少年の狭間にいる、茶色の長い髪を一房にまとめた腕などに独特の紋様を刻み込んだ盗賊風の少年と、黒い髪が特徴的な、冒険者が好んで着る裾の長い外套コートと長い襟巻マフラーをした剣士らしい少年もいる。

五人は揃って遺跡の最深部らしい大広間で、眼前の台座を凝視していた。

正確には、その台座の真ん中で浮いている、真紅の宝玉をだ。

黒髪の少年が、頬を掻きながらその玉石を指差して、隣に立つメ
ガネを掛けた長身の男に問う。

「これで良いんでしょうか？ どう思います、ジルさん」

ジルと呼ばれた男　ジルバーンは、問いかけてきた青年の
問いに答えるでもなく首を傾げ、

「そう言うお前は思うんだ？ イサ」

イサ　即ち伊爽と呼ばれた少年は、苦笑しながら首を傾げた。

「分からないから、ボクはジルさんに訊いたんですけど……」

「まあ、そうだろうな。ではニツク、お前の意見はどうだ？」

ニツクことジントニツクは、髪を掻き耄りながらため息一つをつ
いてジルバーンを見た。

「俺に分かるわけないだろう。おれたちは組合ギルドからこの遺跡の最奥
にあるものをもってこいつて依頼受けただけだし……どんなものか
なんて聞いてないぜ」

にべもない意見だった。

彼らはこの遺跡に近い街にある組合という世界各地にある冒険者
支援組織　通称『組合ギルド』の依頼を受け、この遺跡の奥にある物品
を取ってきて欲しいという依頼を受け、この遺跡に入った。

だが、遺跡の奥にあるものが一体どんなものなのかは一切聞いて
いなかった。先ほど確認した依頼書にも、取ってくるものに関して
はほとんど何もかかれていなかった。

だからこそ彼らは、今なお眼前で上下運動を繰り返している浮遊
物を胡散臭げに見ていたわけだが、

「別にいいんじゃないかしら？　この広間から更に奥に続く道は見
つからなかった以上、私たちの探している品はこれってことでしょ
う？」

長い銀髪と蒼氷色の瞳をした魔女の出で立ちをした女性　ルナ
フィレフは妖艶な表情をして、妖艶な仕草で自身の唇をなぞりなが
ら悩む男三人に率直に意見を告げた。

「イサ、私もそう思う。多分、これでいい」

伊爽の隣に立っている、身体のあちらこちらに包帯をした少女
レイラは伊爽を見上げて呟いた。包帯によって隠されている左目
とは異なる、眠たげに開かれた右の瞳が黒髪の青年を見上げる。

伊爽は苦笑し、肩を上下させてから頷いた。

「とりあえず、取ってくる物を指定されていない以上、ボクたちの
判断で良いと解釈していいんじゃないでしょうか？」

「そうだな……他にそれらしいものがない以上、これを持っていく
しかないだろう」

伊爽の言葉にジルバーンも頷いた。その隣に立つジントニツク
も同意を示すように肩を竦め、頷いた。

微笑し、伊爽は「それじゃあ……」と呟いて玉石に手を伸ばした。
特に結界らしきものもなく、伊爽の手は赤い玉石をやすやすと手に
取った。

瞬間、玉石に掛けられていたらしい魔法が解け、伊爽の手に見た
目通りの重さが伝わる。

それを片手でひょいと持ち、伊爽は側に立っているレイラに目配
せする。

レイラは頷いて、抱えている熊のぬいぐるみを伊爽に差し出す。

伊爽はしゃがみ込んでそのぬいぐるみと向き合い、ぬいぐるみの口
に手をそれで、口を開くようにして持ち上げる。

そしてそこに、今手にしていた玉石をほいっと放り込んだ。明らか
にぬいぐるみの口より遥かに大きい玉石が、「ごきゅ」という音と
共にぬいぐるみの中に消え去る。

それを目で確認した伊爽は、引き攣った表情で乾いた笑い声を上げ
る。

「いつ見ても、不思議だよね……このぬいぐるみ」

「一体どういう仕組みになっているんだ？ 我々の旅の用具品をし
まってなおまだ物を入れられるとは……」

「クスクス……不思議よねえ。レイラちゃんのぬいぐるみ」

「てか明らかにぬいぐるみの許容量超えてるって。その中にどうや

りや野宿時用のテントとかは入るんだよ？」

レイラの持つぬいぐるみはレイラ特製の代物で、何故かその中には色々な物がしまいこめる。小なら飴玉、大なら果たしてどれほどのものまで収容できるのか？ 明らかにぬいぐるみの大きさよりも遥かに大きい代物までしまい込めるこのぬいぐるみ。

誰もが一度はその疑問に辿り着き、持ち主にして製作者であるこの少女に問うのだが、答えはいつも決まっていた。

「秘密」

今回もまた、そう返されてしまった。

どうやら教えたくないらしい。無理にでも聞こうとすれば涙ぐむため、無理やり聞き出すと言うことも出来ない。

故、皆は仕方なくその謎を解くことを諦めざるを得ないのだ。

レイラの普段と変わらぬ回答に伊爽は肩を竦め、苦笑するしかなかった。

「まあ、やることは終わったんですし、街に戻りましょうか？」

ぬいぐるみから話を変え、伊爽は確認するように皆に話をふった。

「そうだな。これ以上此処にいても仕方がない」

「私も帰ってお酒の見たいわ」

「酒はともかく、俺も腹が減ったし、賛成で」

三者三様の答えが返ってきたのを確認した後、伊爽はレイラに確認を取る。

「レイラもそれでいいかい？」

「うん」

レイラも頷いた。

全員の意見が揃い、皆が台座から離れ出口に向かって歩き出したその時だった。

ガコンッ

そんな音が、彼らの耳に届いたのは。

全員が揃って音の出所に目を向ける。出所は、ジントニクの足元の階段。

彼の片足の置かれた位置が、不自然に地面に沈んでいるのを見て、一堂揃って言葉を失った。

誰ともなく、全員が揃って顔を見合わせた。

同時に背後から聞こえる、何かが転がってくるような音。今度は上からその音が聞こえたため、全員が上を見上げた。

この広間は螺旋状に渦を巻いた何らかの溝が存在していて、音の出所はどうやらその螺旋状の溝にあるらしい。

全員がおのずとその螺旋をしたから順に見上げていく。

そして見た。

少しずつ速度を上げて転がり落ちてくる、巨大な鉄球を

それは徐々に加速し、速度を上げてどんどん下に転がってくる。

そしてその行き着く先は、今し方伊爽たちが回収した玉石の備えられていた台座の、丁度伊爽たちの立つ位置から見て反対側の、何らかの排出口。

全員がほぼ同時に答えに辿り着く。あの鉄球が辿り着く先にいるのは、自分たちだということに。

『に、逃げるお

っ！ー！』

全員が揃って叫び、一斉に走り出す。

ジントニクが、ルナファイルが、ジルバーンが、伊爽が、広間の出口に向かって走り出す。

レイラは全員が駆け出す瞬間、少しだけ背を屈めた伊爽の背中に飛びつきその首に腕を巻き付けて振り落とされないようにしがみ付いている。

「ニク！ アレほどの部分はトラップがあるから踏まないでって言ったのに！」

「だあーっ！ 今はんなこと言っている暇ねえだろうがっ！」

「今は、逃げるの、先決」

「かもしれないが……ニツク！ お前は後で説教だからなっ！？」

「火傷程度ではすまさないからねえ？ ボ・ウ・ヤっ」

などと叫びながら全力では知る彼らの後ろで何かが床に落ちた轟音と、更に後を追ってくる走行音が遺跡内で反響し、彼らの耳朵を叩く。

「ジルさんっ！」

「何だ、伊爽っ！？」

走りながら伊爽はジルバーンにある疑問をぶつけた。

「この遺跡って確か、入り口からずっと溝がありましたよね？ 何かを転がすのに丁度よさそうな溝が」

「ああ……あつたな……」

「それって、つまり……」

「……おそらく……あれのためだろう」

「やっぱり……ですね」

伊爽たちがこの遺跡の入り口に立った時、入り口には奇妙な溝があった。かなりの大きさの、何かを転がすためにあるような溝だった。

それは入り口からずっと存在し、この部屋の台座の手前までずっと続いていたのだ。

その時はそれが何のための物なのか伊爽もジルバーンも気には留めなかったが、この状況に至れば、あの溝がある理由は一目として瞭然だった。

あの鉄球のたどる道。それがあの溝の正体だ。そしてその溝を道として歩かなければならない以上、後ろから迫ってくる物は勿論あの巨大な鉄球だ。

必然的に、伊爽たちはあの鉄球に追われることになる。

「イサ、イサ」

「何レイラっ！？」

背中に乗っているレイラが伊爽の肩をちょんちょん叩き、気付い

た伊爽に向けて後ろを指差して、一言。

「すぐ後ろまで来てる」

「ウソッ!？」

言われて驚き、伊爽は走りながら慌てて振り返り、声を発することも忘れて目を剥いた。

すでに転がっていた鉄球は伊爽たちのすぐ真後ろまで迫って来ていたのだ。

「くそっ！ こんなところで死んでたまるかつ」

そう言葉を吐き捨てながら、ジントニックが腰に帯びていた二本の小剣を手に取った。そしてそれを指先で器用に回転させ、小さく言葉を呟く。

すると彼の手にしていた小剣は突如高速で回転し始め、その速度は一瞬にして亜音速にまで到達する。

「よっ、と」

回転速度を確認したジントニックは、その小剣を自身の両足脇に投げ、同時に軽く跳躍する。

するとジントニックのブーツの両脇に高速で回転した小剣が定住し、刃が車輪の代わりとなってジントニックが駆ける。

彼の持つ小剣は魔法によって造られた業物で、造られた際に掛けられた魔法の力を行使用することにより小剣が高速で回転する仕組みになっている。

それを利用し、ジントニックは魔法で回転した小剣を車輪代わりにして高速で疾走することが出来る。

「お先に失礼！」

そう言ってジントニックは颯爽と走り出す。小剣の車輪によって繰り出される速度は軽く人外を超えていて、伊爽たちと、そして鉄球との距離が徐々に開けていき、遙か先を颯爽と駆けていく後姿を伊爽たちはしばらく走りながら見送り、やがて叫んだ。

「待たんか貴様あ！」

「元凶が真っ先に逃げるな！」

ジルバーンと伊爽が怒りを露にして叫ぶが、ジントニックは気にした様子を微塵も見せず、更に速度を上げて突き進む。

伊爽は怒りを通り越して呆れ、小さく言葉を漏らした。

「覚えてろよ……ニックめ」

そんな伊爽の呟きに便乗するように、ルナフィレフがにっこりと笑みを浮かべて言った。

「後で絶対消し炭になるまで愛してあげなきゃ」

その宣告に、伊爽は沈黙せざるを得なかった。

ルナフィレフの言う『愛する』と言う単語は、即ち『炎で燃やす』と同意義であることを伊爽は知っていた。

即ち彼女は、後でジントニックを炎で消し炭になるまで焼くと告げたのだ。妖艶な笑みとともに。

「ほどほどに、ね」

「分かっているわよレイラちゃん……彼の態度次第だけ……」

最後に呟かれた言葉を、伊爽は聞かなかったことにした。

「喋っている暇があったら走れ、馬鹿者共っ！潰されたいのか！？」

無駄な会話を繰り返している三人に、ジルバーンは必死の形相で叫んだ。

「状況を考えてから会話をしろっ！断じてそんなことを論議している場合ではないっ！！」

「それもそうね」

ジルバーンの叫びに頷きながら、ルナフィレフはクスクスと笑う。命の瀬戸際に入るというのに、まるで緊張感が見当たらない。

そんなルナフィレフに伊爽は問う。

「ルナさん、鉄球^{アレ}って魔法で燃やせんせんか？」

「無理よ」

躊躇なく断言された。そのあまりの潔い返答に伊爽が思わず目を剥いているのを見て、ルナフィレフはまたもクスクスと笑い、単直に説明をし始めた。

「確かに私の魔力を持つてすれば燃やせないこともないけど……その場合どうしても長い詠唱を用いた魔法でないと駄目なのよ。無詠唱魔法じゃあさすがにあれほどの質量を持つ鉄球は瞬間的に燃やすなんて無理よ」

言われてから伊爽はそれもそうだと納得した。

魔法とは、この世に存在する精霊と呼ばれる存在の力を借りることで行使することが出来る術の総称。魔力とは、大気中に存在する魔素を魔法使いがその身に取り込むことで魔法を使うのに使用する力。そして大気中から取り込んだ魔素を魔法使いが練り、それを精霊に代償として渡すことにより練り上げた魔素の量に応じて精霊が力を貸す。

また、魔法には詠唱と言うものが存在し、それは魔法使いが一体どの力を司る精霊の力を借りたいのか、どのような魔法を使いたいのか、どれほどの規模の術を望んでいるのかを現す一種の方式とされる物だ。そして詠唱の規模に応じてその魔法の威力も変わる。

魔法は原則上階位というものが存在し、最も低い第七階位を最下級と指定し、第一上位を最上級魔法と定められている。

短い詠唱ならそれだけ階位の低い下位の魔法を、長い詠唱ならそれだけ階位が上位の魔法を行使することが出来る。熟練の魔法使いなら下位の魔法なら詠唱をせずともただ魔力を練ることで行使することも可能だ。

だがそれは結局下位の魔法でしかなく、上位の魔法に比べれば攻撃系の魔法なら威力が劣り、治癒系の魔法なら治癒できる傷の深さも減り、補助系統の魔法なら魔法が補助する時間が減少する。

つまり、今伊爽たちの後方から迫ってくる巨大な鉄球を炎熱魔法で燃やそうとするなら、その鉄球自体の質量は勿論、今転がることに加わっている運動エネルギーなどもまとめて瞬時に焼き払うため、どうしても階位上位……少なくとも階位第二位上位以上とされている魔法を行使しなければならず、それほど上位の魔法ともなれば無詠唱で魔法を発言させることはまず不可能で、詠唱が必須となる。

詠唱も魔力を練るもの集中力が必要不可欠。さすがにそれ走りながらやれというのは不可能だということに、同じ魔法使いである伊爽は理解した。

ならば今自分が取るべき行動は唯一つだと、伊爽は瞬間的に理解する。

走りながら瞬間的に魔法の術式を^{イマジネーション}想造構築し、体内に込めた魔素を瞬間的に魔力変換する。練り上げた魔力を瞬時に右手の平に集結させ、想造構築した魔法の詠唱を綴る。

「《吾^わが身に疾風^{はやて}の加護を》」

伊爽の呟いた短縮詠唱により魔法が発動し、その力を行使する。練り上げた魔力が爆ぜ、伊爽の周囲に風が渦巻く。同瞬、伊爽が地を蹴り疾走する。すると先ほどとは比べ物にならないほどの速度で伊爽は遺跡内の廊下を駆け出す。

風の魔法による、術の対象の疾走速度を向上させる補助呪文が発動し、伊爽の走る速度を一時的に上昇させたのだ。

見る見るうちに伊爽はレイラを背負ったままジルバーンたちとの距離を開き、先に走っていたジントニツクの背に追いつく。

「イサアアアアアアアア、貴様卑怯だぞおお！」

背後から聞こえる呪詛に、伊爽は前を走るジントニツクを追いながら叫ぶ。

「すみませえええん！　今ので魔力が打ち止めで、複数に対して同時に掛けられなかったんです！」

自己弁護を叫ぶ間も伊爽はどんどん先に進み、ジントニツクに追いつき並んだ。後から追いついてきた伊爽に気づき、ジントニツクはきょとんとしたように目を見開いた。

「あれ？　イサ一人か？」

「うん、魔力が打ち止めでね。二人にまで行使できなかった」

「ありやま、可哀想に」

言葉を交わしながら二人は疾走を続ける。続けた先で突き当たりにぶつかり、走っていた二人はそこで一旦停止し、背後を振り返っ

た。

遙か遠くで、今なお背後から迫る鉄球から逃げている二人の姿が見えた。

それを見て、伊爽は申し訳なさそうに呟く。

「悪いことしたなあ……でもしばらくの間は魔素を集められない以上、魔力は打ち止めだし……どうすればいいんだろう？」

「ほっとけばいいんじゃないの？」

「そう言うわけにはいかないだろうっ！」

ジントニツクの何気ない呟きに対して、伊爽は激昂して叫ぶ。しかしどうしようもないことには変わりはなく、ただその場で二人の無事を祈ることしか出来ず、伊爽はその場で頭を抱えた。

「イサイサ」

突然背中中のレイラに呼ばれ、伊爽は一旦悩むのを放棄して首だけを後ろに向ける。

「どうしたんだ？ レイラ」

「あっち」

そう言っただけでレイラが無感動な顔を横に向けて指差したのは、この後の進行方向である下り坂とは逆の上り坂のほう。彼女の指差すほうに何気なく伊爽とジントニツクは目を向けて、次の瞬間両者の顔が蒼白になった。

ジルバーンたちの背後の鉄球のせいで気づけなかった。しかしレイラの指差した方向に存在するものを見て、伊爽は改めて遺跡の罠という物がどういうものか再認識する。

『罠がひとつだけとは限らない』

以前誰かがそんなことを言っていたのを伊爽は思い出した。そう、罠はひとつとは限らない。むしろ一つのスイッチで発動する罠は複数あると考えるのが自然だ。特にこういった古代遺跡ならなお更である。

レイラの指差した方向からは、今ジルバーンたちの背後から迫ってくるものと同じものが、ゴロゴロと音を立てながら伊爽たちの立つ場所目掛けて転がってきているではないか。

そのもう一つの罫を見て、ジントニツクが心底嫌そうな顔をして、「もう一つあったのかよ、クソがつ！」

「不味いな。このままいくとあの二つの鉄球が此処で合流するようになる。そうなると今あっちの鉄球のすぐ前にいる二人は、鉄球の合流に巻き込まれて終わりになるかも……」

「マジかよっ！？ どうにかならねえのかイサっ！？」

「どうにかしたいけど、魔力が切れてる状態じゃあどうしようもないよ！」

「だあああ、クソッ！ どうにかならねえのか！？」

「なる」

「……え？」

男二人が混乱していた最中、伊爽の背に乗っていたレイラが、不意にそんなことを呟いた。二人が目を向いて呆然とする中、レイラは平然とした顔でぬいぐるみを取り出し、その口に手を入れて、ひょいっと何かのビンを取り出しそれを伊爽に差し出した。

「コレで、良し」

そう言われて差し出された物を、伊爽は黙って受け取った。そして訝しげにそのビンを見て、次の瞬間目を剥いて声を上げた。

「コレってもしかして魔力促進薬！？ しかも階位第一下位道具（マナ・ポーション）Aランクアイテム）のヤツだ！？ どうしたのさこんな高級品？」

冒険者などが使用する道具と言うのは大半が魔法付属系統のものが多かったため、それらは全ては魔法と同じく階位ランク分けされている。魔法と同じく道具も階位が十段階に分けられていて、階位第一上位

ダブルエス 通称SSランクを最高位に階位第一位中位 通称Sランクとほとんど下がつていき、最下位の階位第七位をHランクとしている。

今レイラの取り出した魔力促進薬は階位第一位 つまりAランクの魔法道具で、魔法道具内でも上位に位置する高級品。それほど

高価な代物を、何故この少女のぬいぐるみ内にしまわれているのか
大きな疑問が浮かぶのだが、その疑問を口にするよりも早くレイラ
が言葉を発した。

「時間、ない。早く」

「あ、ああ……うん」

レイラに促され、伊爽は仕方なく疑問を問うのを止めて魔力促進
薬の栓を抜き、中身を口にする。複数の薬草や薬品、そして魔力物
質が含まれた薬が喉を通して体の中に嚥下する。

薬品独特の刺激臭が口の中一杯に広がるのを感じながら、伊爽は
それを一気に飲み込んだ。

飲み終えたのと同時に、伊爽の体内に魔力が満ちる。全快には遙
かに遠いが、魔法を行使するには十分すぎるほどの魔素が体内で渦
巻くのを伊爽は感じ取る。

体内で渦巻く魔素を、伊爽は集中して魔力として練り上げる。伊
爽の周囲が彼の練り上げる魔力に呼応し、大気中の魔素が渦を巻く。
想造構築を瞬時に済ませ、伊爽は祝詞を詠唱する。

「《我が呼び掛け応えし颯々（さつさつ）の声よ

汝は風に跨りし旋風の神駆る駿馬

その身の力をもつてして 彼の者たちに 汝の駆けし早足の加護を
》」

伊爽の翳していた手の内の魔力が爆ぜ、同時に突風が巻き起こる。
吹き荒れた風は閉鎖空間である通路を駆け、今なお走り続けるジイ
ルバーンとルナファレフを包む。

「むっ」

「あら〜？」

風が彼らを包んだ瞬間、彼らの走る速度が著しく上昇し、先まで
の走速とは比較にならないほどの速度で廊下を疾走する。

「急いでジルさん！ ルナさん！」

「もう一つがもうこつちに来てやがる！ 急げ！」

走るジルバーンたちに声をかけつつ、伊爽たちは別のほうから

迫り来る鉄球に目を向ける。

伊爽がそちらに目を向け、練り上げた魔力を開放して再び風を巻き起こし、迫り来る鉄球目掛けて風撃呪文を行使し進行を遅らせようと試みるが、ほんの一瞬だけ速度が衰えただけでほとんど効果が見られない。

伊爽は小さく舌打ちをしながら、再び魔力を練ろうとする。それを見たジルバーンが、走りながら叫んだ。

「イサ！ 無駄に魔力を消費するな！ この先まだ何があるか分からないのだから、力は温存しろ！」

ジルバーンの言葉に伊爽は一瞬だけ躊躇ったが、すぐに同意して振り返り、走り出す。

追いついたジルバーンとルナファレフと共に、いつの間にか先行し出していたジントニツクの後を追うように走る。

背後で二つの鉄球が衝突したような鈍い金属音が響く。が、すぐに転がる音が再発するのを耳にして、伊爽は振り返るのを止めて全力で走った。

走りながら、ルナファレフがふと思い出したように疑問を口にした。

「この先って、確か広間になってたわよね？ そこに辿り着けば何とかなるかしら？」

彼女の言葉にジルバーンが頷く。

「道を間違っていないければ、間違いなく広間になっている。だが、そこに辿り着いても安全かどうかは保障でんな」

神妙な顔つきで告げられる言葉に、ルナファレフは不思議そうに首を傾いだ。

「あら、どうして？」

「一難去ってまた一難……ってことですよ。一応、何があってもいように心構えをしておくことをお勧めします」

「イサの言う通りだな。少なくとも、何かあると思っておいたほうがいいだろう」

ジルバーンの言葉に、イサとルナファレフは黙って頷き、イサの背に乗っているレイラも、

「分かった」

と小さく呟いた。

坂を下り、風に乗って疾走する三人の背後を追うように迫る二つの鉄球。坂による加速で速度が上がる鉄球に対して、下りであるために転ばぬよう慎重に走る三人の距離は徐々に縮まってきている。

「お前ら急げ！ もうすぐだぞ！」

先に広間に到着していたジントニックが広間の入り口で叫んでいる。そうならばもう下り坂だからとって遠慮するつもりが三人にはなくなった。

伊爽は走る速度を更に上げ、地を蹴り砲弾のように跳躍し、一気にジントニックの立つ側まで飛んだ。それに続くかのように、ジルバーン、ルナファレフも同じように跳躍する。

伊爽の行使した風の補助呪文の力も借り、二人も幾度か壁を蹴って広間の入り口に辿り着く。

全員が一斉に広間の中に飛び込み、更に横に飛んで鉄球の進行方向から回避する。

全員が脇に退けたのとほぼ同時に、二つの鉄球が広間に飛び込んで来た。鉄球はそのまま勢いを失わずに広間の中を猛進し、壁に衝突して停止する。

それを見送り、全員が大きく肩を上下させてため息を漏らした。

命の危機を脱し、皆がそろって脱力する。

伊爽は背負っていたレイラを下ろし、その場で一息をつこうとしたが、レイラが目を剥いて何かを見ているのに気づき、彼女に習ってその視線の先に目を向け、安堵していた表情を再び険しいものに変えた。

何かが動いている。それも結構な大きさの何かが。遺跡ということもあり暗くてよく見えないが、伊爽は何となくそれが不味いモノだと確信した。

自然と左手が外套の裾を払い、右手が腰に帯びている剣の柄に伸びる。

「皆、何かいる。気をつけて」

伊爽が告げた警告の言葉に、一息ついていたジルバーンたちが瞬時に反応し、各々がそれぞれ警戒の構えを取った。

まるでそれを待っていたかのように、闇に紛れていたモノが次々と姿を現す。

そしてそれを見たレイラが、表情を顰めながら誰もが同時に気づいたそのモノの正体を口にした。

「……魔物」

遺跡や人里はなれた森や山に住む、人を餌とする人害の存在それが魔物。

伊爽たちの前に姿を現したのは、正にその魔物だった。

魔物にも種別こそ存在するが、それは生息圈によって大きく変化する。

そして今回の場合、遺跡などに多く存在する昔遺跡に入った冒険者の屍から生まれる不死人系と、遺跡などの無機物に魔力や魔物の発する瘴気に当てられ生まれる無機物系ゴーレムだった。

その二種の魔物がそれぞれ約二十。それ見て、ジントニックが表情を引き攣らせる。

「ちょ、待て待て。不死人系はまあよしとしよう。なんたつてレイラの光属性がある……だけど、無機物系つてのはキツくないか？」

「そうだな。あれは魔法による弱点が殆どない上、物理攻撃も効き辛い。少々厄介な相手だな」

ジントニックの誰に向けたわけでもない問いに、ジルバーンがメガネの位置を直しながら槍を構え、淡々と答えるのに対して、ルナファレフは疲れたようにため息を漏らして鉄爪の長子を確認している。

「別にどうでもいいじゃないの。つまりはズタズタに愛してあげればいいんでしょう？」

妖艶ながら冷酷な笑みを浮かべ、ルナファレフは魔力を練り上げ始める。

「私はまだ死ぬ気なんてないの。だから殺されて餌になる前に、この子たちの命を、この煉獄の炎で包んであげるわ」

そして練り上げた魔力を見せ付けるように悠然と構え、その口元に冷笑を浮かべながらルナファレフの口が魔法を発動さすべく、すべらかに呪文言語を用いて詠唱を始める。

「《我が身に宿りし紅蓮の炎よ

灼熱の大地を総べし荒ぶる鬼神よ

汝の壮絶なる怒りを露にし 我は焼滅^{しょうめつ}の狼煙を掲げ

この身脅かしし悪鬼を 無へと帰す力を具現させん》」

微笑み、ルナファレフは右手を頭上に掲げ、練り上げた魔力を開放した。

火属性魔法階位第二位下位 《激昂^{イグニート・ウラーニア}の燃炎》。

開放された魔力が解き放たれ、迫り来る二種の魔物目掛けて熱波が荒れ狂う。紅蓮の炎が渦を巻き、天に昇るように煌々と闇を照らしながら魔物の身体を焼き払う。

それを合図に、両者が動いた。

魔物たちが一斉に地を蹴り、獲物である伊爽たち目掛けて走り出す。

対する伊爽たちも、それぞれが武器を構えて迎え撃つ構えを取る。

ジントニックが手に持つ二刀の小剣を回転させ、それを円月輪^{チャクラム}のように投擲し、炎を飛び越えて来た二体の不死人の頭頂を切り裂く。

「調子に乗るなよ魔物！」

威勢よく吼え、ジントニックは迫る魔物に向けて次々と小剣を投擲する。

間合いに入り込んできた魔物に対しては反射神経と動体視力に物を言わせて回避し、同時に拳打や蹴りなどといった迎撃方法を取って距離を離し、戻ってきた小剣を投擲して仕留めるといった方法を繰り返す。

「まったく……一々叫ばねば戦うことも出来ないのか？ あの男は」「あらあら、良いじゃないの？ 格好良くて」

手にする古代遺産の槍を振るい、ルナファレフに迫る魔物を迎撃するジルバーンの呟きに、ルナファレフはクスクスと笑いながら魔力を開放し、炎熱呪文を次々と撃ち出して魔物を焼き払う。

基本的に前衛型であるジルバーンが前に出て、魔法使いである後衛のルナファレフに魔物が近づかぬようにする。その間にルナファレフが魔法の詠唱をし、攻撃呪文を放って止めを刺す。

それを二人はひたすら繰り返し、効率よく魔物の数を減らしていく。

伊爽は黒一色の剣を手に魔物の群れを次々と薙ぎ払う。近づいてきた魔物に対しては鍛え上げた剣腕で一刀の元に斬り伏せる。

また、剣の間合いよりも外にいる魔物に対しては魔法を行使して攻撃、または威嚇をし、出来るだけに注意を自分に向くように仕向ける。

四人は不死人系の魔物を出来るだけ突き放し、無機物系の魔物を優先的に斃していた。

というのも、不死人系はその名の通り不死である。

どれだけ斬ろうと突こうと焼こうと、彼らは不死である以上倒れることはない。不死人の魔物というのは斃せない魔物と言う認識が強い。特に魔法を使えない完全な剣士などからすれば、彼ら不死人系の魔物は天敵といえる。

そんな不死人の唯一の弱点が、光を司る魔法である。

そしてその光を司る魔法を行使することが出来るのが、この五人の中で最年少であるレイラだった。

彼女は敵から最も離れた位置で静かに目を閉じ、大質量の魔力を練り上げる。

空気が震え、彼女の周囲は練り上げる魔力に反応して淡く光を放ち出す。魔力は彼女の頭上で具現し、陽光にも似た光を発しながら周囲を照らし出していた。

その光の下で、レイラが静かに口を開き、言葉を紡ぐ。

「あめつち《天地照らす煌々の日明かり

万象を輝かす暖かき温もり

神々の使わす白翼はくよくの使徒が謳う

その声音に導かれ舞い降りる精霊

我乞うは貴公の御手 一握りの祝福

願わくばその身に纏う神々（こうこう）の光の加護と

我らの前に君臨する悪しき闇へ 絶大なる光の洗礼を》

魔力の塊が放っていた光が増し、太陽の光と見まごう程にその輝きを増し、闇に包まれていた広間を明るみにし、曝け出す。

渦巻く魔力の流動が広がり、広間全体を包み込むようにして包み込む。同時に掲げられるレイラの手を合図に、練り上げられていた魔力が膨張し、爆発する。

光属性魔法階位第一位下位 《破邪聖光の流輝》。クリア・フロウレント

膨張した魔力がそのまま光の精霊を従え、魔物の発する瘴気を、死者の肉体に宿る魔力を瞬時に浄化し、不死人たちの身を焼き払う。炎熱とはまた異なる光の聖火が、対峙する魔物の身を次々と焼き払う。

猛威を振るっていた不死人たちは、レイラの放った浄化の呪文により次々と焼き払われて、瞬時に世界から消滅させる。

仲間の魔物たちがいきなり姿を消したため、残された無機物たちが慌てだす。

その好機を逃すことなく、伊爽たちは一斉に動いた。

ジルバーンとジントニックが地を蹴り疾走し、無機物たちに獲物を振るう。

薙がれる槍が、投擲される小剣が、その強固な無機物たちの身体を強打し、少しずつダメージを与える。

その間にルナファレフとレイラが魔力を練り、攻撃呪文を唱える。ルナファレフの炎弾呪文と、レイラの氷槍呪文が無機物たちを次々と飲み込む。

伊爽も二人に続き、魔力を練り上げ、祝詞を唱える。

「《暗き深闇しんあんよりなお暗き漆黒の雷帝

我乞うは汝の片鱗

絶大なる力の具現

願わくばこの手に 黒き魔の祝福を》」

虚空に描いた魔法円が、伊爽の練り上げた魔力に呼応し、漆黒の雷光を放つ。

闇属性魔法階位第四位 《深闇の黒雷》シャドウ・ボルト。

空間に闇色の雷が駆け巡り、無機物たちを襲う。黒い雷光が魔物の全身を襲い、瞬時にその身体から力を奪う。

そこに再びレイラとルナファレフが魔力を開放し、高位の魔法を炸裂させる。

水属性魔法階位第三位 《凍結の水螺旋》フリーズン・トートネード。

火属性魔法階位第二位下位 《紅蓮の（・）直撃星》バーン ストライク。

魔物の足元から螺旋を描きながら立ち上る氷水の渦と、頭上から降り注ぐ紅蓮の火流星が同時に魔物に叩き込まれる。

岩や鉱石で形成された魔物の身体が、二人の放った魔法を受けて崩れ始める。身体のうちらが崩れ、欠け、瓦解してその強固な防御力を削る。

そこに伊爽たちが飛び込む。

「う……おらあっ！」

ジントニツクが遠方から小剣を投げ、魔法の効果範囲から抜け出そうとする魔物を高速回転する刃で押し戻し、一秒でも長く魔物たちに魔法を浴びせようと翻弄する。

打ち出された魔力が切れ、行使されていた魔法が消えるのを見計らい、伊爽とジルバーンが魔物の群れ目掛けて地を蹴り疾駆する。伊爽の手にする黒一色の剣が弧を描く。剣身に乘せられた闘気が刃の周囲で揺らめき、斬撃の範囲を広げて剣の間合いより遠くから魔物の身体を切り裂く。

ジルバーンの槍の穂先が輝き、同瞬穂先から流水が溢れ出す。

槍の一撃と同時に魔物の群れをその流水の一撃で吹き飛ばす。

吹き飛ばされた先に目掛け、伊爽が魔力を纏わせ同時に闘気も纏わせていた刃を全力で振り下ろす。

纏っていた魔力が爆ぜて風刃呪文が発動し、一緒に纏わせていた闘気が合わせ乗り、その風刃を本来の風刃より遥かに巨大な刃に変えて真空を切り裂く。

ジルバーンの突きと流水によって吹き飛ばされた魔物たちが、伊爽の放った渾身の真空刃によって両断される。

そこに再びルナファレフの追撃が見舞われた。

「これで、お・わ・り！」

彼女の左腕に備えられていた鉄爪が、伊爽によって両断された魔物たちに向けられていた。

その鉄爪の手の平に、シュンツという機械音と共にガラス球程度の大きさの真紅の石が姿を現した。

そこにルナファレフの有り余る魔力が注がれ、ルナファレフが妖艶な笑みを浮かべたのとはほぼ同時。彼女の手の平が周囲を揺るがす震動と共に朱色の光を放ち、一条の光の帯を撃ち出した。

そのルナファレフの唐突な行動に、伊爽たちが目を剥いて一斉に散開する。

特に魔物の群れのすぐ側にいた伊爽は飛び退きながら条件反射の要領で魔力を練り、自分の背後に魔法障壁を展開する。

それとほぼ同時にルナファレフの放った閃光が魔物の群れを直撃し、次の瞬間目を覆いたくなるほどの光源と共に閃光の直撃した床が轟音と共に爆発を起こした。

発せられた大質量の爆炎が、伊爽たちの連携によって瀕死間近にまで追いやられていた魔物を瞬時に焼き払う。爆心地を中心に立っていたのだから魔物たちは生じた爆熱炎と衝撃波から逃れることも出来ず、全てを焼き払うかのような炎に包まれ一瞬にして炭化し、その場で崩れ落ちた。

「うわっ！」

「わわあ」

「ぬおっ！」

「げっ！」

同時にルナファレフを除いた四人がそれぞれ小さく悲鳴を上げた。爆発によって生じた衝撃波が部屋全体を襲い、伊爽たちがその衝撃波に巻き込まれて吹き飛ばされる。

伊爽とレイラはそれぞれ魔法障壁を展開したが、それでも衝撃波が彼らをその場から後退させた。

「……あんの魔女おおおはあ！俺たちまで吹き飛ばすなのかよ！？」

「私に訊くなこの馬鹿者！本人に訊けば良いだろう！？」

魔法を行使することが出来ないジントニックとジルバーンが地面にへばりつくように伏せながら叫ぶ。

そんな二人の様子を離れた位置で見ていた伊爽は、呆れたようにため息をついた。

「何であんな状況でも喧嘩するかなあ……あの二人は？」

「……知らない」

伊爽の何気ない呟きに、レイラは小首を傾げるだけだった。

「あゝん、スッキリしたわね」

一人何こともなかったかのように歓喜の声を上げて背伸びをするルナファレフの呟き。その言葉に悪びれた様子など微塵もなく、心から魔物を一掃できたことを喜んでいるというのが目に見えた。

当然、怒る人間がいる。

やっと収まった衝撃波から開放されたジントニックが、我先にとルナファレフに詰め寄り、声を張り上げて叫んだ。

「ちよっ、くうおうら姐さん！アンタ今明らかに俺たちのことお構いなしにその古代遺産（鉄爪）使いやがったろ！」

「ええ勿論よ、ボ・ウ・ヤっ」

につこりと妖艶に笑んで、ルナファレフはまったく誤魔化すことなく答えた。

その言葉に、ジントニツクが水から打ち上げられた魚のように口をパクパクと開閉して何か言おうと言葉を模索するが、あまりにシヨッキングだったのか言葉にならないらしい。

そんなジントニツクに、ルナファレフは更なる追い討ちの一言を放った。

「だつてえゝ、そうすれば人数が減つて分け前が増えるじゃない。そうすれば今よりおいしいお酒が飲めると思つたのよ」

(……悪党)

ルナファレフの言葉に、伊爽は心の中で賞賛の意を込めてそう言つた。無論口には出さなかつた。

更にそこにジルバーンが乱入し、ルナファレフに説教をし始める。ついでと言わんばかりにジントニツクの襟首を？み、「貴様は何故こうも戦い方が杜撰なんだ！」とも叫んでいる。

「しばらく、続く……」

「続くね、多分……」

レイラの呟きに伊爽は同意を示しながら剣を鞘に納める。

「もうしばらくジルさんの小言は続きそうだから……今の内に周囲の安全でも確かめようかな？」

伊爽はそう呟きながら周囲を見回す。

特に以上は見られなく、新たな魔物の気配も特にはしない。

視界だけに頼るのではなく、魔力を練り上げ風の魔法を行使することで遺跡内の通路などにも探りを入れるが、今のところ安全は確保されているようだ。

だが、すぐに別の問題点に気づき、伊爽はこの広い広間を見回した。レイラは小首を傾げながらそれに習って部屋を見回す。

伊爽は視覚では補え切れない部分は風を行使して調べる。伊爽にとって、風はもう一つの触覚。風で触れたものはそれこそ手で、足で、肌で触れたのと同じような感覚でその感触を確かめることが出来る。

そうすることで部屋の状態を確かめ、伊爽は急いでレイラに駆け

寄った。

「レイラ、乗って!」

何故? と問いたくはなかったが、伊爽の声音がやけに焦りの色が濃いを感じ、同時に彼を信頼しているからこそ、彼が無意味に他人へ行動を起こすように促がすことがないと知っているから、レイラは黙って伊爽に従ってその背に飛びついた。

伊爽が声を張り上げて叫んだことに疑問を感じたジルバーンは、首を傾げる。

「どうしたイサ? 何をそんなに慌てている? もう魔物はいないぞ」

「そうよイサくん。今さっき全部斃したじゃない」

「そう、今し方この凶暴な魔女が一掃しただろうよ」

ジルバーンの言葉に便乗し、ルナファレフとジントニックも微笑しながら言うと、伊爽は今にも駆け出しそうな足踏みをしながら声を張り上げた。

「違っんです!?! いいから急いで脱出しますよ!」

伊爽はそう叫び、更に言葉を続けた。

「今の戦闘で諸々の柱とかがやられたみたいで、そのせいでこの遺跡全体のバランスが可笑しくなって、だから、その……ああっ!」

「落ち着けイサ。何が起きているのか簡潔に説明しろ」

伊爽の落ち着きのなさを指摘しながら、ジルバーンは頬を掻く。

「これが落ち着いてられますか! 急がないと大変なことに」

「だから、何がどう大変になんだよ!」

伊爽のはっきりとしない言い回しに痺れを切らし、ジントニックは舌打ちをしながら叫んだ。

対する伊爽は、その場で地団駄を踏みながら吼えた。

「だから、さっきの戦闘でこの部屋にあった遺跡の重要な部分の柱を壊したんです! そのせいでこの遺跡全体のバランスが崩れて、今にも崩壊しそうになってるんです!」

伊爽を除いた全員が、伊爽の言葉の意味をすぐに理解できずぱかんとした表情でその場に突っ立っている。
そんな彼らに、伊爽はとどめの一撃を与えた。

「つまり、直にこの遺跡は崩れて、急いで脱出しないと全員が生き埋めになるんですよ！」

同瞬、まるで伊爽のその言葉が合図だったかのように、部屋全体が地鳴りと共に震動し始めた。

天井を形成していたものがぱらぱらと彼らの上から降ってくる。
全員が一斉に顔を見合わせ、

『に、逃げろおおお』

『!!』

最初とまったく同じ台詞を吐きながら、一斉に遺跡の出口目掛けて駆け出した。

「ゼエ……ゼエ……」

「ぜえ……はあ……ぜえ……はあ……」

「ハアー……ハアー……」

「……っは……っは」

伊爽を始めとしたジルバーン、ルナファレフ、ジントニツクの四人は、十数分の全力疾走を経て何とか崩壊する遺跡から脱出し、次第に地鳴りが収まり出すのを感じながら遺跡の入り口で呼吸を整えていた。

「お疲れ」

『はい……お疲れ様……』

一人だけ走っていないレイラが、今なお荒い息を吐いている四人を労い、四人が揃って答えた。

逸早く息を整え終えた伊爽が立ち上がりつつ服についた埃を落とす。

「とりあえず……これで目的のものは手に入ったわけだし、街に戻って報告を済ませられますね」

「ハア……そうだな」

苦笑交じりの伊爽の言葉に、ジイルバーンがため息を吐きながら頷く。しかしその瞳が一瞬にして据わり、未だ寝転がったまま息を整えているジントニツクをキッと睨んだ。

「だがその前に、一人説教せねばならない奴がいるな」

「あゝ、そういえばいたわね。酷い目に合わないといけない坊やが」
便乗するルナファレフ。

そして二人の発言にビクンと痙攣するように反応したジントニツクががばつと立ち上がって駆け出そうとした……が、それよりも早く、ジイルバーンの槍が彼の喉元を捉えた。

その場で全身を強張らせるジントニツクに、メガネをキラリと光らせ見下すジイルバーン。

「うむ。いい反応だなニツク。あと一步動いていれば私の槍が貴様の喉を串刺しにしていたところだ」

「凄いわねニツクは。でもちよゝつと残念な気もするわね。少しくらい痛い思いをしてくれればよかったのに」

その隣でにつこりと笑うルナファレフ。ただし、その目は微塵も笑っていない。

引き攣ったジントニツクの頬を、嫌な汗が一筋垂れる。

「ま、まあ待ってくれよ、お二人さん。べ、別に俺は皆を見捨てようとしたわけではなくて……ほ、ほら！ 何処かにあの鉄球止められるものないか探そうとしただけ」

『問答無用！』

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああー！」

二人の叫び声と同時に火柱と水の濁流が生じ、ジントニツクがそ

れに飲み込まれて悲鳴を上げる。

その様子を少し離れた場所から伊爽とレイラが見守る。

しばらくの間二人はジルバールとルナファレフによって折檻されているジントニツクを見ていたが、やがて伊爽が苦笑しながら小さくと息を吐いて立ち上がった。

「しばらく続くだろうから、ボクは此処を発つ前の腹ごしらえ用のご飯でも作るうかな。レイラ道具と食材出して」

伊爽の言葉にレイラは無言で頷き、手にするぬいぐるみから次々と調理器具やら固形燃料、卵や野菜、そして干し肉に干し飯^いなどを取り出す。

背後から聞こえる爆発音や悲鳴はとりあえず無視しながら、伊爽はいそいそと幾つかの食材を選んで調理し始める。

「レイラ」

「ん？」

伊爽の呼びかけにレイラが首を傾げると、伊爽はにこりと微笑した後、

「治癒魔法の準備、忘れないでね」

「分かった」

伊爽の言葉にレイラは小さく頷いて見せた。

固形燃料に火打石で火をつけ、鍋に入れた水を沸かす横で肉を炒める伊爽。

止めどなく轟く爆発音や濁流の音。そしてその間から微かに聞こえる悲鳴に耳を傾けながら、伊爽は手際よく手を動かし、ふと脇に目を向けて微笑する。

荒野のような岩だらけの山肌。その場所に咲くはずないだろう白い花を見つけ、伊爽は小さく笑んで見せた。

姿なき、そこにいる誰かに向けて……。

姿なき誰かさん。

ボクは貴方に会うために、
こうして仲間と旅をしている。

02：同行者

元々伊爽の住む村　　ビリゼは、成人として認められる二十歳を迎える年齢になって初めて村を一人で出ることを許される風習があった。

成人の儀を終えた若者たちはそこで始めて大人として認められ、村を出て見識を広めることを許される。

といつても、ただ成人を迎えれば良い訳ではなく、村に住む老剣士エツジと、村長であるゲイルに認められた者だけが成人を迎えられるのだ。

無論コレは村の男児限定で、女子にその制約は特になく、その大半は村仕事のいろはを覚えていればいいとされている。

村から出たいと考えている者は皆昔からエツジの元で武術を教わり、また魔法の才能がある者は皆村長ゲイルの元で魔法の技術を教わる。そして一定の技量を習熟し、そうすることで成人の儀を受けることが認められるのだ。

成人の儀とは村から出て外の世界を見たいと望む者は皆通らねばならない道とされていた。

そんな中、伊爽だけは一人皆より二年早く成人の儀を受け、旅立つことを許された。

無論これは伊爽の技量が他の者たちより卓越し、その上で伊爽自身が過信しておらず、常に精進し続けているという理由があるが、それ以上に彼の決意が物を言わせたのだ。

村の人間の中でも秀でた才能を持った伊爽。だが、彼は特に村から出て世界を知ろうとはしていなかった。

むしろ伊爽は生涯をこの村で終えるつもりでいた程だ。どれだけ実力があるうと、伊爽にとってそれは持て余すしかない才能でしかなかった。

村の人間も皆伊爽が旅に出るなどと言い出すとは思っていないかつ

た。

そんな彼が突如村を出たいと言い出したことは、村一つを震撼させるほどのものだったのだ。

誰もが皆驚き混乱した。

十八年間一度だって村の外に興味を示さなかった少年が、いきなり旅に出たいと言い出したのだ。それも成人の儀を迎えるより前に。誰もが一度は伊爽を止めようとしたが、伊爽の決意は固く、誰一人として伊爽を説得することはできなかった。村長やエッジが認めたとあればなお更だった。

この村で大半の政は村長であるゲイルと、この村一の剣士であるエッジが取り仕切っている。その二人が反対しない以上、村人が彼らの決定に意見することはできなかった。

それに何より、村人が伊爽を説得する度に、彼は申し訳なさそうに、

「ごめん」

と言い、その次には決まって、

「それでも行かなきゃいけないんだ」

と真剣な表情で啖呵を切るのだ。誰にもそんな彼を止めることが出来ず、結局伊爽の旅立つ日、村の人間は笑顔で彼を見送った。

そして見送られた伊爽は一人一緒に旅立った他の村から出た皆と別れて一人旅をしていた。

そして世界を知った。その広大さを目にした。

幾つかの村や街を渡り歩き、見識を広めながら旅をしていた。

組合や酒場、情報屋を尋ね、何かと情報を集めた。

その間に組合で仕事を請け負い、幾つかの遺跡探索や魔物討伐を行って旅費を稼いだりもした。

剣の腕にも魔法の技術力にも自信があった伊爽は、それらの依頼を難なくこなした。だが同時に己の未熟さも痛感した。

いくら稽古を積んでも、やはり稽古と本当の戦闘は違う。それを思い知った。

稽古で一本取られた所で、結局それは木剣で叩かれただけであり、次がある。

だが実戦はそうはいかない。

魔物の爪、盗賊や夜盗の剣が当たれば怪我をするし、下手をすれば死ぬ。

一瞬の判断。それを誤れば即座に死に繋がる。

伊爽は旅をして初めてそれを知った。

自身の住んでいた村は豊かで特に食べるものに困ることはなかった。

だが、そうでない村や街もある。

飢えた人間が街の片隅に転がり、嫌でも目を背けたくなくなるような情景もあった。

飢えに大人も子供も関係なく、飢えた彼らは旅人である伊爽に物乞いした。しかしそんな飢えた人たち皆に物を与えることができるわけもなく、それらを見過ごさざるを得なかった。

悪人や罪人が当たり前に蔓延る街がある。

飢えた老若男女がいる村がある。

生きるために子供でさえ人を殺して金品をせしめようとする。

伊爽はそれらを時に退け、時に逃げて、時には殺すこともあった。そうしなければ自分が殺されていたかもしれないのだと分かっている、割り切れることではなかった。たとえそれが、旅をする者にとって必要な行動であつてもだ。

だから伊爽はできるだけ殺さず、逃げることを選んでそれらの難を逃れつつ旅をした。

地位の高い者が地位の低い者を見下すのが当たり前の街があれば、どちらも手を取り合つて支えあう街もあった。

時折獣の姿をした人や、背に翼を持つ人にも出会った。彼らが獣人、有翼人と呼ばれる種だということを知り、伊爽は初めてそれらの種族を見て知った。

町や村を渡り歩き、色々な人に出会い、組合で仕ことを請け負い

報酬を貰い、時に村人から依頼されて魔物を討伐したり、キャラバンの護衛をしたりもした。

そうやって色々な人や街を、伊爽は見た。

そうやって多くを知りながら、伊爽は白い花の真実を求めて旅を続けた。

伊爽が故郷の村であるビリゼを旅立ってから二ヶ月が過ぎた。

旅にも慣れ始め、組合や他の旅人と情報交換をして各地を歩き回っていた伊爽。

そしてたまたま立ち寄った村の宿で、伊爽はレイラと出会った。

その日伊爽は、前日村人から受けた依頼で魔物を斃して宿に一泊していた。その日は他の旅人もおらず、伊爽一人で貸し切りだった。この村で唯一存在する温泉宿で、伊爽は宿の主に勧められるままその温泉に浸かっていた。貸し切りの上露天風呂。空を上げばそこには晴れているおかげで満天の星空が存在し、疲れた伊爽の身体を存分に癒してくれた。

その星空を仰ぎ見ながら、伊爽は一人こちて小さく呟いた。

「もう二ヶ月になるんだな……それとも、まだ二ヶ月なのかなあ」
ビリゼの村からだいぶ遠くまで来た気もするが、まだそう遠くない気もする。

たった二ヶ月の間に、伊爽はあの村での生活と今を見比べ、自分がどれほど裕福な生活をしていたかを知った。

特に食べるものに困ることもなく、魔物の脅威に怯えることもなかったあの頃と比べれば、どれほどの差があるか計り知れない。

ビリゼと他の村や街を比べて見ても同じだった。

あの村がどれほど平和で豊かだったのか、伊爽は村を出て初めて知った。

「爺さんが言うからどれ程のものかと思ってたけど……まさかこれほどだとは思ってなかったなあ」

伊爽は祖父であるエッジから多くのことを教わっていた。

言葉や歴史、薬草学や地層学、天候の予想術や幾つもの古代文字や古代語。普通に生きるにはまったく言って良いほど必要のない知識ばかりだと村にいた頃は思っていたが、村を出て初めてその知識がどれほど重要なのかを知った。

『知識はあつて困るものでない。あればあるほど良いし、いつか役に立つ時が来る。忘れるな伊爽。知識は多いほど良い。無駄な知識など何一つない。そのことを忘れるな』

今になってやっと昔祖父に言われた言葉の意味を理解した。

まったくその通りだ。知識は多いほど良い。特に旅をする人間にとつての知識はいわば最大の武器だ。

ものの売買の際の交渉にしても、野宿の際の食料の調達にしても、遺跡の古代文字解読にしても、結局知識がものを言う。

それを祖父はしっかりと熟知していた上で自分に教えてくれたいたのなら、村に戻ってまず先に祖父に礼を言いたい。

そう思わざるを得ないほど、伊爽は祖父に感謝した。

気がつけば結構長い間風呂に浸かっていたらしく、身体が火照っていた。このままではのぼせてしまうと思ひ湯船から出ようとした伊爽の視界の隅にふと影が過ぎり、伊爽はその方向に視線を戻す。

宿の二階。その一室のベランダ。

そこに一人の少女が立っていて、空を見上げていた。

身体のうちらこちらが包帯で覆われた少女は、先ほどの伊爽と同じように空を仰いでいた。

薄い茶とも金とも見分けのつかない色をした髪が夜風に吹かれて揺れる様はとても人間のものとは思えず、伊爽は森か、または月の妖精か何かでないかと我が目を疑った。

目を擦ってもう一度ベランダを見ると、そこには誰の姿もなかった。

伊爽は小首を傾げ、見間違いだっただろうかと首を捻った。

「あ！」

温泉から出て廊下を歩いていた伊爽は、唐突にそんな声を上げた。端から見たら変人と見間違えられても可笑しくないほどに伊爽は目を剥いて口を開いたままその場に突っ立っているのだ。変人でなければ変質者だ。

だが幸いにもこの宿には伊爽以外の客はいないため、そのような目で見られることはなかった。

しかし伊爽にはそんなことはどうでもよいことだった。いや、変質者として見られるのは心外なのだが、それ以上に伊爽は目の前に佇む少女を見て驚いていた。

先ほどベランダにいた、歳は十二歳前後のあの少女が、今は伊爽の目の前にいるのだ。

だが、伊爽が驚いたのは少女が目の前にいるからではなかった。

その少女は先ほどとは異なっていて、身体のうちをこちらを包んでいた包帯がない。その代わり包帯のあった部分の肌が剥き出しになり、その剥き出しの部分がまるで腐っているかのようにどす黒く変色していたのを見て、伊爽は思わず息を呑んだ。

左目周囲の皮膚や右腕の肩からひじ辺りまでの皮膚。他にも左手からひじまで皮膚。右足首付近の皮膚。恐らく服の下の何処かも同じような状態なのだろう。

伊爽はその有様に驚愕し、同時に畏怖してその場で全身を強張らせた。

しかし少女のじつと見つめる視線と視線があったため、伊爽は我に返るや否やその少女に駆け寄った。

「ちよつ、君、大丈夫か！」

しゃがみ込んで少女に詰め寄り、その腐敗したかのような部分部分に目を向けた。

そして伊爽の困惑していた表情が突如厳しいものに変化したのを、少女は見た。

「……これは……呪術か……何か？」

その腐敗しているらしい部位から微かに嗅ぎ取れる、呪術でのみ発生する独特の魔力臭を感じ、伊爽は眉間にしわを寄せた。

どうしてこんな幼い少女がこれほどの呪術を受けているのか？

呪術にはあまり詳しくないが、闇の属性魔法を得意とする伊爽は他の属性魔法使いより呪術には詳しい。その持ち得る知識の中に、この少女が受けている呪術によく似た術が幾つか伊爽の記憶にはあった。

【腐敗の手】と呼ばれる強力な呪術。

その呪いを受けた人間は体の表面から徐々に腐り、やがてその呪いが全身を蝕み死に至らせる高位の呪術だ。

どうしてそんな呪いをこの少女が受けているのか。その疑問は少女を探して現われた、この宿の経営者である彼女の両親によって打ち明けられた。

少女の姿を見て脅えるでもなければ畏怖するわけでもなく、その身を案じた伊爽の姿を通りかかった彼女の両親が伊爽の部屋に尋ねてきたのだ。

廊下で別れた少女を連れて現われた彼女の両親は、苦渋の表情で伊爽に語った。

「元々の原因は、娘ではなく私たちにありました」

そう切り出した少女の両親。

二人は昔名の知れた魔法使いと剣士のコンビだったらしい。

そんな二人がまだ婚礼もせず、冒険者として世界各地を転々としたいたある時、二人は組合の依頼とある魔法使いの率いる盗賊団の討伐に当たったのだが、魔法使いだけあと一步のところを取り逃したのだそうだ。

その時魔法使いは呪詛を吐くように叫んだという。

『必ず貴様らに報いを受けてもらうっ！』

なんともまあありきたりといえぱありきたりな捨て台詞を吐いてその魔法使いは姿を消した。

その後二人の身に何か不幸があつたわけでもなく、肩透かしの気分だつたそうだ。

やがて歳月が過ぎて二人は結婚し、この村で宿を経営し始めた矢先のことだつたらしい。

生まれてきた少女の身体の一部が、黒く変色していた。魔法使いであつた男のほうはそれがすぐに呪術であることを見抜き、そこで始めてあの魔法使いの言葉の意味を理解したとのことだ。

だが時すでに遅く、その魔法使いの行方は杳として知れなかつた。色々な治癒術士や解呪術士ヒラー
デイスベラーの下を駆けずり回つたが、誰もが皆同じ回答を出した。その呪いは掛けた本人でなければ解呪することができず、結局放置するしかなかつた。

すでに二人には世界を歩き回るほどの力もなく、ただ奇跡を祈るしかなかつた。

結局そのまま十二年の歳月が過ぎ、呪いが進行したまま今に至る。そこまで話し終えた夫婦が顔を伏せる。伊爽は黙つてその話に耳を傾けるしかなかつた。

伊爽は内心で嘆息した。

伊爽自身、決して自惚れるわけではない。

自分で言つのもなんだが、天才なのだ。

武術においてだけではなく、魔法に関しても伊爽は天才だつた。

他の人間は皆魔素を扱う段階から誰かを師こととして教わるものだが、伊爽は物心ついた頃からそんな領域を凌駕していた。

それほどの才気がある。そんな伊爽だからこそ、この呪術は彼らが言う通り他の術者が解けるものではないと理解している。無論この夫婦だつて理解しているだろう。

なら、何故この夫婦は自分にこんな話をするのか？　それが伊爽の疑問だつた。

そしてその答えはすぐに出た。

「頼みと言つのは他でもなく、この子を……貴方の旅に同行させてはもらえないでしょうか？」

予想外の言葉に、伊爽は目を丸くして夫婦を凝視した。無論その表情に上段なんてものは微塵も垣間見えず、明らかに本気であることが見て取れた。

だからこそ伊爽は本気で困惑した。

「ちよつ、ちよつと待つてください！ 何を突前やぶから棒に……第一、何でボクなんですか！？ いままでだって他にも旅人がいたでしょう？」

そう。何故自分なのか分からなかった。

明らかに弱そうで頼りなさそうな瘦躯の自分にそんなことを頼むのか？

自分などよりももつと頼りになりそうな屈強な旅人だつてきつと今まで訪れていたいはずだ。この村は都市と年の間にある中継地点で、唯一宿のある村なのだ。多くの旅人が今まで利用してきたに違いない。

それなのに、何故よりによつて自分なのか。

「貴方は娘のあの姿を見て逃げなかった。それどころか駆け寄つて娘の安否を問いていた。他の旅人は皆娘の姿を見るなり畏怖して宿を逃げ出して、誰一人として娘を心配してくれなかった」

（……とりあえず納得のいく理由ではあった）

「もしかして、今まで来た旅人皆で試してたんですか？」

当然思い浮かぶ疑問に対しても、夫婦は偽ることなく答えた。

「はい。ただしいかにも危なそうな人や怪しい人などは避け、ぱつと見て預けて安心そうな印象を受けた人限定でしたが……」

悪徳商法さながらだった。性質が悪いとしか言いようがない。

思い返せば前の街で他の旅人が、

『あの村の宿にはやばいから近づくな！』

と組合の酒場で誰かが言っていたのを思い出す。

（あれはこういうことだったのか……）

確かにやばい宿だった。常用の『やばい』とはまた異なる意味ではあったが……。

伊爽は宿主夫婦の図太さに呆れながら大きくため息をついた。

「ですけど、旅は危険だということは元々冒険者であった貴方たちが一番理解しているでしょう？ 第一こんな小さな女の子連れ歩けるほど、ボクには余裕がないですよ」

それは旅費や食費などだけではなく、旅に付き物である魔物や盗賊などのことも意味していった言葉なのだが、

「それなら大丈夫ですよ」

「そうですよ。レイラ、見せてあげなさい」

男性のほう在意気揚々と言い、女性のほうは娘に何かを促がした。少女は無言で首肯した後、手を眼前に翳す。

瞬間、伊爽は我が目を疑った。

伊爽の目が捉えた、少女の収縮する膨大な量の魔素。一介の魔法使いだって、これほどの量の魔素を扱い制御するのに何十年もの修行が必要だろうというのに、この十二歳そこの少女はいとも容易く制御しているではないか。

天才……という言葉で括れるものじゃない……よなあ。

伊爽は無意識のうちにかた唾を飲んで、いつでも反撃できるよう身構えるほどに……。

少女の天性の才覚を目の当たりにし、全身が戦慄で震えているのを理解した。

「理解していただけたでしょうか？ この子は生まれながら魔法の才能がある。それも並大抵では成しえないほどの才能を」

夫婦の、かつて魔法使いであった男性のほうが告げる。

「この子には私の知りえる限りの魔法を伝授しています。ですが、やはり幼い子供一人旅に出たいと言われても心配でして」

「……って、この子が言っただんですか!？」

伊爽が色々な意味で驚く。それと同時に、この夫婦が育児放棄しているわけではないことを知れて安心もする。

「はい。私たちがどれだけ反対しても、この子は頑として旅に出るの一点張りです……ですからせめて誰かと一緒にと思っていたところに……」

「ボクが現われた……というわけですか」

伊爽は苦笑しながら言葉を継ぎ、夫婦が鷹揚に頷いた。

伊爽は少女を見る。

少女もまた伊爽を見ていた。

数瞬の沈黙が部屋を包んだ。

その虚ろそうな瞳は真剣そのもので、伊爽に何かを訴えかけるような瞳だった。だからこそ、伊爽には彼女の決意を拒むことも、夫婦の願いを無碍にすることもできなかった。

何より伊爽も人のことは言えない立場だ。親の反対を押し切ってまでして成人の儀を早め、旅に出た自分が、この少女の決意を否定することなどできるはずがない。

伊爽は少女に歩み寄り、しゃがみ込んで視線の高さを合わせる。

「名前は？」

「……レイラ」

名を答えた少女に、伊爽は厳しい表情で問い掛ける。

「レイラ。ボクはある目的があつて旅をしている。一緒に行くのは構わないけど、もしかしたら君の旅が終わるより早くボクの旅が終わることも有り得る。」

それはボクが目的を達成してかもしれないし、途中で死んでしまいかもしれないし、どういった形で終わるか分からない。そのせいでレイラが怪我することだってあるかもしれないし、もしかしたら死ぬかもしれない。

それでも、いいのかい？」

伊爽のその問い掛けに、レイラは吸う瞬ためらいを見せた後目を閉じ、そしてゆっくりと開いて伊爽を見つめ、

「……それでも、いい。」

自分の身体、自分で治す。パパたちだけに頼れない。自分の身体

のこと、自分で何とかする。ちゃんと直して、帰ってくる。

今度はちゃんとした姿で、パパたちに会うから」

決意の言葉が、その口から紡がれた。

死ぬ気はない。

生きて帰る。

その決意も、同時にその口から連ねられた。

その言葉に伊爽はにこりと笑んで見せ、頷いた。

「分かった」

そう言っただけで立ち上がり、伊爽は振り返って夫婦を見た。

男性のほうは驚きのあまり目を丸くしてレイラを凝視し、女性のほうはレイラの言葉で目尻に涙を浮かべながら、震えながら必死に落涙を堪えていた。

そんな二人に、伊爽は微笑を浮かべて言う。

「そちらでよろしいのであれば、ボクの旅に同行しても構いません。無論、安全は保障しません……」

「行く」

答えたのは、他でもない旅に行くと言っていたレイラだった。夫婦に聞いたつもりが、保護者より先に答えるとは、それだけこの少女の決意が強いものだと言うことを啓示していた。

夫婦は幾度も頭を下げて礼を言う。

こうして伊爽の旅に、一人の、その上で魔法に長けた幼い少女という同行者ができた。

そこまで思い出して、伊爽は小さく苦笑した。

思えば、アレが最初の仲間との出会いだったのだ。

読んでいた本を閉じながら、伊爽はすでにベッドで眠っている少女に目を向けた。

すでに夜は更け始めており、レイラはすでにご就寝。幾度か寝返りを打つたらしく、毛布が肌蹴ているのを見て伊爽はそれを直して

おく。

この少女が、伊爽自身の最初の仲間なのだ。

何処の冒険譚に、このような押さない少女を連れた旅人がいるのだろうか？

そう疑問に思わざるを得ないほど、自分は変わり者の旅人だと自覚する。

その後幾つかの町や村を通過したが、その都度誰もが子供をつれて歩く自分を訝しんで見ていた。

何故子供を連れているのか？　そう尋ねてくる人も少なくはなかった。

誰もが伊爽を奇妙なものを見る目で見た。そしてそんな伊爽について歩くレイラもまた、奇妙なものとして見られていた。

「……まあ、ボク自身は気にしないけどね」

そう呟きながら、伊爽は眠るレイラの頭を一撫でして再び椅子に腰掛けて本を開き、項をめくる。

詩のような短い文章で綴られる叙こと詩。

幼い頃から気に入り、このたびに出ると決めた時もこの本だけは持って出たほどの品。

年季が入っている上、何百何千と読んだせいでボロボロになったその本に綴られる文面を、伊爽は静かに目を通してながら、自身の記憶を掘り起こし、そして思い出す……。

レイラと出会ってから一月が過ぎた頃だろうか。

伊爽は組合の依頼を受け、レイラを連れて森の中にあるという遺跡の調査を行っていた。

その時だっただろう。伊爽とレイラがジルバーンと出会い、そしてその遺跡奥でルナファレフに出会ったのは。

「ああ……多分此処だろうね。組合から受けた調査依頼の遺跡は」
「多分、そ、だよ」

生い茂る木の枝と葉を払いながら、眼前に現われたこの樹林に満ちた森に分不相応な建造物を見て眩いた伊爽の言葉に、レイラは小さく肯定の意を称えた。

外郭こそ岩を削って作ったものを偽造しているが、年月の風化のせいでそれらが所々欠けていて、そこから覗く機械器質の外装がその建造物の正体を示していた。

「これが、調査依頼の古代遺跡、か……」

感慨深く、伊爽は誰に言うでもなく言葉を口にした。

アレほど木々で覆われていたこの深い森のど真ん中。密集していた木々が嘘のようになくなっており、一つの別空間であるかのようにそこは切り開かれていた。

まるで此処は隠された聖地であるかのように、木々の侵蝕を免れてその遺跡はその空間に鎮座していた。

そこは広場のように開けており、水が張っている。見慣れた草食動物たちがその水に口をつけているのが見えた。どうやら此処は動物たちの憩いの場のようなのだ。

この巨大な遺跡さえなければ、動物たち以外誰も近づかないだろう。開けた泉の真ん中に鎮座する古代の遺跡は、今なおその原形を留めたまま、嘗ての文明の栄光で近づく者たちを威圧する。

どう見ても場違いな建造物であるはずなのに、伊爽はなんとも言いがたい神々しさをその情景から感じた。

踏み入れてはいけない聖域。

そんな錯覚を覚えるほどに……。

「なにもこんな場所にこんなでかい建物創らんでもいいと思うんだけどなあ。昔の人の考えることって、ホント分らないなあ」

そんな感覚からわざと逃れるように思ってもいないことを口にしながら、伊爽は乗っていた樹の根から降りて足首程度までしかない泉に踏み入る。それに続いてレイラも木の根から降りて泉に足を入

れる。

その泉の水をバシャバシャと音を立てながら進み、伊爽はぼつかりと口を開ける遺跡の入り口を目指す。

その後ろをレイラが続く。

やがて辿り着いた遺跡の入り口。その入り口に続く階段を前にして、不意に伊爽が歩みを止めた。

「レイラ、ストップだ」

「??」

いきなりの伊爽の言葉に首を傾げながらも、レイラは伊爽の言葉に従って立ち止まる。それを気配だけで確認した伊爽は、片手を振り翳して小さく呪文を詠唱し、即座にその手を振り払う。

伊爽の練り上げた魔力によって放たれた風刃呪文が疾走し、伊爽とレイラの前に存在する階段を駆け上る。

ブチンという音が数度聞こえ、それと同時に階段と遺跡の入り口付近が爆音と共に炎を生む。

それを見て驚くレイラを他所に、伊爽は小さく嘆息した。

「どうやら先客がいるみたいだね。ご丁寧に罫まで張ってる」

口をへの字にし、ムスツとした表情で伊爽が言った。しかしすぐに気を取り直したように表情を和らげ、

「気を付けていこう」

そうレイラに言って歩き出し、遺跡の中に足を運ぶ。

上下左右、目に映る物すべてが機械仕掛けで出来た古代遺跡の中は暗い。どうやら照明機能さえも含んで、遺跡の機能は死んでいるようだ。

そのことを伊爽がレイラに伝えたと、レイラは小さく呪文詠唱をして見せた後、虚空に光を発する魔力の玉を生み出した。

照明の代わりとなる光属性魔法の初級魔法だ。

本来なら松明を要する所だが、光属性の魔法を得意とするレイラがいればそれも不要となる。

「ありがとう」と礼を述べながら、伊爽はレイラを先導して遺跡の

中を進む。

見渡す限り、そこは何処をどう見ても変哲のない古代遺跡だった。しかし調査がまだ進んでいないらしく、遺跡の中は放置されていた年代に比例する量の埃で塗れていた。

静寂の中、伊爽とレイラの足音だけが反響する。

居心地が悪いことこの上ない。まるで牢獄の中のような嫌な静寂だった。そんな中で足音を響かせる伊爽とレイラはさながら囚人を監視する牢番か。それともこれから牢屋に運ばれる新たな囚人か。そんなことを考え出してしまった伊爽が、不意に足を止めて腰の剣に手を伸ばした。

それを見て、レイラの表情の険しいものに変わった。伊爽が剣に手を伸ばしたということは、何らかの気配を感じたのだろう。そしてその何らかを要因に警戒していることを意味している。

剣の柄を握りながら、伊爽が口を開いた。

「姿を見せてもらえませんか？ いるのは分かっていますから」
返事はない。しかし伊爽は警戒を解かず、更に言葉を続けた。

「ボクは風の魔法が得意ですから、常に空気の変化を読んでいるんですよ。だから人型の障害物があればそこに誰がいるというのが嫌でも分かります。気配を消すだけじゃあ、風の魔法使いは誤魔化せませよ」

「……なるほどな」

今度は声が返ってきた。

伊爽たちが立っている場所から少し先に行った所にある柱の影から現われる人影。

奇妙な形をした槍を携えた、長身でメガネを掛けた男性。旅人や冒険者、トレジャーハンターなどと言うよりは、学者と言う言葉のほうがしっくりくる雰囲気をした男だった。

その男が槍を構えつつ口を開く。

「貴様らは何者だ？ 何故この遺跡に来た」

「人にモノを尋ねる場合は、まず自分から名乗るべきだと思います」

よ」

伊爽は剣から手を放さず、そう言葉を返した。

伊爽の言葉に男は暫し思案するように伊爽を見据えた後、構えを解くことなく答えた。

「私はジルバーン。職は考古学者だ。此処には遺跡調査で訪れている。次は貴様らの番だぞ」

律儀に答えてくれた男に、伊爽は苦笑しながら頷いた。

「ボクは伊爽。この子はレイラと言います。此処には組合の依頼で調査に来たんですよ。依頼書もありますよ。見ますか？」

最後のは冗談だった。無論嘘はついていない。依頼書もちやんとレイラのぬいぐるみの中にしまっておりある。

それでもなお疑わしげな表情をするジルバーンを見て、伊爽は小さくため息をついた後剣から手を離し、敵意がないことを示す。

それを見て信用したのか、ジルバーンと名乗った男はやつと警戒を解いて槍の構えも解いた。

「済まない。てっきり遺跡荒らしの賊か何かと思ってな」

「子供と若造の二人がですか？」

「先ほど私の仕掛けた罠が発動した。それによって仲間がやられたと考えれば、否めんと思うぞ」

「なるほど」

ジルバーンの言葉にあっさりと納得する伊爽。その横ではレイラが感心したように頷いていた。

そんな二人を見て、ジルバーンはメガネを外して拭きながら問い掛けた。

「先ほど組合からの依頼で来たと言っていたが……それはつまり、この遺跡はまだ組合が調査していなかった、ということか？」

レイラに光源の範囲を広めるように指示していた伊爽が、ジルバーンの問いに頷いた。

「そうらしいです。ですからこうしてボクたちが調査に来たんですよ。依頼内容は『遺跡の最深部までの安全性の調査と、危険要因の

排除』となってます」

「……そんな依頼を……たった二人でか？」

「はい。これまで色々な依頼をこなしてきましたからね。組合側も信用してくれたいでしょう。指名で依頼されましたよ」

組合の依頼にも色々あり、危険性の高い依頼というのは時折組合側から指名されることがあるというのはジルバーンも聞き及んでいたが、まさかこのようなまだ若い……というかどうか見ても少年と子供の二人組に指名依頼があるというのには、ジルバーンも驚愕した。

「一応受けた依頼は完璧にこなすようにしてますしね。腕にもそれなりの覚えはありますから。ボクも、それにレイラも」

「その少女も……なのか？」

それは『依頼は二人名指しの指名なのか？』という意味で言ったジルバーンの意図を伊爽は正確に受け取り頷いた。

「この依頼は、ボクとレイラの二人名指しのものですよ。彼女はあえて天才級の魔法使いですから。それでもなければ、ボクだって旅の同行なんてさせませんよ」

ジルバーンは疑わしげにレイラを見る。すると視線に気づいたらしいレイラは、無言で片手を翳し、魔素を収縮して魔力を練り上げて見せた。

「ぬ……！」

その練り上げられた魔力を見て、ジルバーンは息を呑んだ。その横で伊爽が「ボクもアレを見た時は驚きました」と言う。ジルバーンはレイラの魔法の腕を見て納得したらしく、恐縮したようにただ頷くだけだった。

「レイラ、行くよ」

その後数回言葉を交わした後、不意に伊爽がその辺りを忙しなく興味深げに歩き回っていたレイラに声を掛けた。レイラの足が止まり、即座に歩き出した伊爽の後に続く。

「……って、何処に行く気だ？」

歩き出した伊爽の足は止まることなく歩き続け、顔だけを振り返らせて伊爽は言う。

「何処つて、奥です、奥。ボクらは組合の依頼でこの遺跡の最深部まで行つて、そこまでの安全調査と危険な何かがあつた場合排除するために此処に来たんですから」

にべもなく言う伊爽。そこで更に伊爽は、

「何ならジルバーンさんも来ますか？ 手伝ってくれるのでしたら後でボクが組合に掛け合つて、特別報酬出してもらえるように交渉しますし」

にこやかに言いながら、伊爽はレイラを引き連れどんどん奥に向かう。

暫しの間ジルバーンは逡巡したが、大きくため息をついた後伊爽たちの後を追つた。

そしてジルバーンは、全てが終わつた後で自分が伊爽のペースに飲まれていたことに気づくのだが、それはまた別の話である。

遺跡に入ってから数時間が過ぎた頃、伊爽たちは遺跡の最奥に辿り着いた。

そこは今まで歩いていた通路の数倍の広さがある大きな部屋だった。

そして辿り着いたその部屋で、伊爽たちが見つけたもの。それは

……

「女の人……ですよね」

「うん」

「……そのようだな」

伊爽たちの目の前に存在する、ガラスで出来た棺。その中で眠る、銀髪の女性。歳は二十代前半程度の成人女性だ。何処か妖艶な雰囲気纏つた女性が、透明なガラスの棺の中で眠っていた。

「何でこんな所に？ それも……その……裸で」

伊爽は視線を逸らしながら呟いた。

そう。妙齡の女性が、しかもスタイル抜群の美女が、何故か裸で棺の中に眠っていたのだ。

伊爽は羞恥で視線を逸らしていた。

レイラは気にも留めずその女性を見ていた。

ジルバーンは訝しげに女性を観察していた。

そして不意にジルバーンが声を上げた。

「そうか！ この女性は恐らく人工生命体だ！」
ホームクルス

ジルバーンの口から出てきた単語に、レイラは首を傾げたが、伊爽は出来るだけ女性を見ないようにして棺をはさんで向かい側にいるジルバーンに訊ねた。

「人工生命体って……『フラスコの中の命』とか『小さい人』とか呼ばれてる、あの人工生命体のことですか？ 錬金術で有名な」

「そうだ。恐らく彼女はその人工生命体だろう……この遺跡は調べた結果かつて想造の魔女と云われた魔法使いの実験施設だというのが分かってる。恐らくその魔女が創り上げた人工生命体だろう」

「でもこの人……明らかに成人女性ですよ」

ジルバーンの言葉に、伊爽はにべもなく答えた。

人工生命体とは手の平に乗る程度の小人サイズだと言われている。しかし目の前で眠っている人工生命体の女性は、どう見ても成人女性の体格をしている。

それに対するジルバーンの見解は、

「伝説の魔女の一人が創ったものだぞ。完全な人型を創っていても可笑しくはない」

「ホント？」

「本当だ！ そんなに疑問に思うのなら本人に訊いてみればいいだろう？」

「どうやってですか？」

伊爽のその問いは最もな意見だった。眠っている女性に何を訊けと言っのだろう。

「起こせばいいじゃないか？」

「どう、やって？」

レイラの問いもまた、最もな意見だった。

するとジルバーンの表情が険しくなった。顎に手を当て、考えるようにして首を傾げる。

「うむ。棺を開けてみるべきだろうか？」

「どうやってですか？」

「うむ。近くに制御装置らしきものがない以上、普通の棺と同じようにして……だろうか？」

言いながらもその場で考え込むジルバーン。伊爽は呆れてため息をつき、肩をガックリと落とした。

ギイイイ……

それと同時に棺を開くような音がして、伊爽とジルバーンがギョツとして棺を見た。

そこには何でもないようにして棺を開けていたレイラがいた。驚いている二人を見上げ、「どうかしたの？」と言いたげに首を傾いでる。

「レイラ!？」

「なっ!？」

二人が驚愕して目を剥いて声を上げたのとほぼ同時

甲高い警報音が部屋一杯に響き渡った。

瞬時に伊爽とジルバーンが各々の得物に手を伸ばした。

「レイラ! 罰として今日はピーマン食べること!」

伊爽がそう叫びながら剣を抜いた。黒一色と僅かの白で装飾された剣身が暗闇の中で禍々しく光る。

「えー」

「『えー』じゃないでだろう!? 返事!」

「……はあい」

「よろしい」

「良くないだろう!? 上から来るぞ!」

二人の緊張感のないやり取りに横槍を入れるように、飛び退きながらジルバーンが叫ぶ。伊爽はレイラの身体に手を回して? み、ジルバーンとは反対側に跳ぶ。

その一瞬後、伊爽たちが立っていた位置を衝撃が駆け抜ける。

三人がそれぞれ衝撃の来た方向に目を向けると、そこには二足で立った巨大な機械兵器が二つの巨大な銃口を伊爽たちに向けて立っていた。

「遺跡の守護兵器!？」
ガーディアン

「見たことない型だな。恐らく此处独自に開発されたものだろう」

伊爽が叫び、ジルバーンが冷静に対象を分析する。レイラを離れた所に立たせて伊爽は剣を構えながら舌打ちする。

「どうやら此処の番人って奴みたいですね」

「そしてお宝はアレか……あの棺を開けたものを廃除するための物のようだな」

そう呟きながらジルバーンが床を蹴って疾走する。

それに続くようにして伊爽も駆け出す。

その伊爽の横を幾つもの光の束が雨あられと守護兵器目掛けて虚空を走った。

光属性魔法階位第三位 《光の雨》レイ。

降り注ぐ光の雨が次々と守護兵器目掛けて虚空を舞う。

守護兵器がそれに即座に反応。機械仕掛けの足が伸縮し、横に飛ぶ。物凄い跳躍力を見せる守護兵器。

寸前まで立っていた位置を無数の光の雨が穿つのを見ながら、伊爽は守護兵器を追う。

伊爽より早く守護兵器に向かっていったジルバーンはすでに守護兵器の眼前にまで辿り着いており、彼は手にする槍を地に突き立てて跳躍し、守護兵器の頭上を取る。

そのまま自由落下に移行し、手にする槍を全力で振り被り、機械

の装甲で覆われた守護兵器の身体に突き刺す。

槍の穂先が装甲を突き破り、甲高い破碎音を響かせ、続いて紫電の迸る電音が連続する。

守護兵器がその場で暴れ馬のように飛び跳ね胴体を振り回し、上に乗るジイルバーンを振り落とそうともがくが、槍を手にするジイルバーンはなかなか振り落ちず、同じ動作を繰り返す。

そこに伊爽が飛び込む。

手にする剣に練り上げた魔力を注ぎ、そのまま全速力で疾走し、体重を乗せて暴れる守護兵器に剣を突き刺す。

暴れていた守護兵器の横腹を黒い剣の切っ先が穿ち、そのまま鏝近くまで突き刺さる。

そこで伊爽が剣に込めていた魔力を解き放つ。

込められていた魔力が爆ぜ、伊爽の意思に答えて魔法を発動する。剣身全体が蒼白く輝き、次の瞬間守護兵器が剣の突き刺さっている部分から凍り始めた。

「ジイルバーンさん！」

伊爽の叫び声を聞いたジイルバーンは即座に槍を引き抜いて守護兵器の上から飛び降りる。

その間も守護兵器の身体はどんどん凍りに覆われていき、やがてそれは全身に行き渡りその動きを封じる。

伊爽は剣を引き抜いて飛び退くと、即座に構えたい期中の魔素を収縮させて魔力を錬り出す。

「レイラ！」

「いつでも」

伊爽の考えを理解したレイラは即座に魔法詠唱に入る。

伊爽も時同じくして詠唱に入る。

「『深き深淵よりなお深き 深層の炎帝

我乞う汝の威光

壮絶たる御力の再現

天満の陽を暗ませる吾が怒り

忌まわしき彼の身に　その暗き魔の肅清を《》

「《闇の静寂を抜う　暁の瞬き

天に封じしその力

今一度我が手を持って地へと放とう

魔を砕く　金色の光とならんことを《》

二人の詠唱が同時に終わり、二人の魔力が同時に解放たれて爆ぜる。

闇属性魔法階位第二位下位

《シャドウフレア
スターフレア深淵の闇炎》。

光属性魔法階位第二位下位

《天聖の陽炎》。

レイラの光と伊爽の闇。相反する力が成す二つの炎が守護兵器の頭上から降り墮ちる。

白熱と黒炎の二重魔法を受けた守護兵器。その守護兵器を覆っていた蒼氷に走る無数の亀裂。それは刹那の内に守護兵器の全身を駆け巡り、二つの対色の炎が成す爆発によって木っ端微塵に砕け散った。

氷点下の氷に叩き込まれた高温の熱によってとてつもない量の水蒸気が部屋全体を包む。

それを見てジルバーンは感心したように呟いた。

「考えたな……あの守護兵器そのものを凍らせて動きを封じ、そこに高熱の炎を叩き込む。冷えたガラスコップにお湯を入れれば割れるのと同じ原理か」

ジルバーンの呟きに、伊爽は剣を鞘に納めながら苦笑しつつ頷いた。

「まあそれに近いものですよ」

言いながら歩み寄ってきたレイラの頭を「よくできました」と褒めながら伊爽は撫でる。

「つて、レイラ。包帯解けてるよ」

「ふえ？」

伊爽の何気ない呟きに、レイラは自分の右腕の包帯を掲げて見た。確かに伊爽の言う通り、そこを覆っていた包帯は解けていた。

そして、それを見て驚愕したのはその包帯の下を知らないジイルバーンだった。

「……！」

声にもならない悲鳴。ジイルバーンの瞳は、確かにレイラの包帯の下に隠されている、腐敗した皮膚を見たのだ。

「……そ、それは……」

辛うじて搾り出せた言葉に、レイラは無表情に、伊爽は苦笑して口を開いた。

「これが、子のこの旅をしている理由です。呪いの一種でして、この呪術は掛けた本人でないと解呪できないものです。だからこの子は、その呪いをかけた魔法使いを探すために旅をしているんですよ。ボクはその保護者代理です」

言いながら伊爽はレイラの包帯を付け直す。数度包帯を巻き直し、「コレで良し」と頷いて立ち上がる。

そうしてジイルバーンを振り返り、

「それじゃあ改めて、あの棺の中の女性に話を訊きますか？」

笑顔でジイルバーンを促がした。その時だった。

「ジイルバーンさん、後ろっ！？」

伊爽が目を剥きながら叫んだ。

ジイルバーンは反射的に振り返るが、レイラの包帯の事実を知ってショックを受けていたため、彼の反応は普段より半歩分遅れを取った。

振り返ったジイルバーンの目に映ったのは、先ほど斃したはずの守護兵器。その守護兵器が殆ど壊れている状態でなお動き、まだ本体と繋がっていた左の機関銃をジイルバーン目掛けて構えていた。そしてその銃口が光る。

殺られる。そうジイルバーンが死を直感した刹那だった。

伊爽たちの間を縫うようにして光速で駆け抜けた一条の光の帯。その光は、今にでも銃弾を撃ち出そうとしていた守護兵器の銃口とその守護兵器を飲み込んだ。

それを見ていた伊爽は、目を剥いてその光の正体を把握した。

「雷属性魔法階位第一位下位 《サンダーズピア天雷の槍》……！？ どうしてそんな魔法が……」

伊爽が爆発し大破する守護兵器から視線を逸らし、はっとして背後を振り返る。それにレイラとジルバーンも続く。

この部屋の中で、他にそのような芸当ができる人間がいるとすれば、彼女しかいない。先ほどまで棺の中で眠っていた、あの銀髪の女性。

左手に不釣り合いな鉄の甲爪を着けた彼女は棺から出てその棺に座り、足を組んで艶めかしい笑みを浮かべながら、片手を眼前に悠然と構えていた。

「うふふ、思わず助けちゃったけど……良かったのかしら？」

妖艶な笑みで問う、銀髪の女性。

「良かった」

レイラが女性の問いに淡々と答えた。

対する女性は良かったと言わんばかりに吐息を漏らし、おもむろに立ち上がった。

「まあ、コレから出してくれたお礼というわけじゃないんだけどねえ」

クスクスと笑いながら素足でぺたぺたと床を歩き、三人の方に歩み寄ってくる、全裸の美女。

「……レイラ」

赤面する伊爽が何を言いたいのか理解したらしく、レイラは頷いてぬいぐるみの口に入れた。

ジルバーンと女性が何をするのかと首を捻っているのを他所に、レイラはぬいぐるみの口から幾つかの服を取り出した。

結構高そうな、女物の服。しかも成人女性用のものようだ。以前知り合ったキャラバンから助けたお礼として受け取ったもの。近い内に何処かで売り払おうと思っていた伊爽だったが、思わぬ所で役に立ったと一人ごちる。

ぬいぐるみから明らかに許容量を超えた物量がでてきたことに驚愕して目を剥いている序ルバーンと女性。

その女性に、レイラは取り出した衣類を向け、

「着て」

簡潔に告げた。

「……あら、ありがとう」

女性のほうは戸惑いながらもにこりと微笑み、それを受け取って適当に自分で見繕い、渡された服を着た。

法衣ローブの幾つかを選んで、胸元が見える程度のものを着込む。下は短いスカートで、足には膝ほどまであるブーツを履いた。

そして最後に、

「はい、これ」

と言つてレイラが差し出したのは、昔から語り継がれる魔女そのものが好んで被る、唾広の三角帽だった。

「あら、良いわねコレ」

女性のほうは嬉しそうに言つてそれを受け取り、意気揚々とそれを被った。

こうして色気漂う美人魔女が一つ出来上がった。

魔女の出で立ちをしたその女性は、にこりと微笑んだ後三人を見た。

「ありがとう。そういえばまだ名前を名乗ってなかったわね。

私はルナファレフ。ルナでいいわ。五千年ほど前に創造の魔女によつて、月のカケラを材料に創られた人工生命体よ。覚えているこの記憶が正しければ、ね」

ルナファレフと名乗った女性の自己紹介ののち、伊爽たちはそれぞれ名を名乗った。

「イサくとレイナちゃん。それにジルバーンね。コレも何かの縁。覚えておくわ」

ニコニコと笑いながらルナファレフは言った。しかし不意にその表情を曇らせ、三人を見た。

「貴方たち。創造の魔女の居場所を知っているかしら？」

そんな突拍子もない問いに、三人は揃って首を傾げた。イサとレイラに至っては、此処に来て初めて創造の魔女という名を聞いたほどだ。

「いや。彼女は今から二千年ほど前の目撃情報を最後にその消息を絶っている。今では何処にいるか、誰も知らないだろう」

創造の魔女の名を知っていたジールバーンは、知りえる情報を彼女に提供した。

それを聞かされたルナファレフは、斬演奏に顔を顰めた。

「そう……分らないのか……」

起こったように顔を顰める彼女を見て、ジールバーンは暫し逡巡した後、おもむろにその口を開いた。

「もし良ければだが……何故創造の魔女の行方を知りたいのか、教えてくれないか？」

それはイサも訊きたかったことだ。何故自身の創造主を探すのか。その理由は興味があった。

するとルナファレフは躊躇することなく答えた。

「私があゝの魔女に会いたい理由は一つ。何故私を封印したのかの一点に尽きるわ。あゝの人は私を創り上げてすぐ、私に膨大な魔力と知識を与えて此処に封印したの。理由も話さず、いきなりのことだったわ。だから私は、その理由をあゝの人に訊きたいのよ。そのためにあゝの魔女に会いたい」

その話を聞いた伊爽は、なんとなくこの人は自分に似ていると思えた。

伊爽自身も、何処にいるのか分からない誰かに会うために旅をしている。この人は自分を創り上げた人物を探したいと言っている。

何処か親近感を覚えたのだ。

「まあ、仕方ないわね。あれから五千年近く経っていちゃあ、あの人だって姿を眩ますか隠居位するでしょうし……あてなく探すしかないのかしら？」

ガツクリと肩を落とすルナファレフを見て、伊爽は提案した。

「でしたら、ボクらと一緒に来ませんか？ ルナさん。ボクらも人を探して旅をしている口ですから、良かったら一緒に。特に当てもないですけど、一人で旅するよりはいいと思うんですが？」

伊爽の唐突な提案に、ルナファレフは目を剥いて言葉を返した。

「良いの？ 私なんか一緒で？」

「構いませんよ。先ほどの魔法の技量を見れば、むしろお願いしたいくらいですし。レイラもいいよね？」

不意に言葉をふられたレイラは、特に逡巡することもなく頷いた。伊爽とレイラを交互に見た後、ルナファレフは小さく微笑んで頷いた。

「じゃあ、お願いしようかしら」

「はい」

伊爽は微笑して頷いた。レイラも無言で首肯する。

「……あてがないわけでもないぞ」

唐突に、今まで黙って成り行きを見守っていたジイルバーンが口を開いた。三人が揃ってジイルバーンを見た。

「ジイルバーンさん？」

伊爽が目を剥きながら問うと、ス橋逡巡した後ジイルバーンが口を開いた。

「此処から西に、アシュミレという街があるのだが、そこに有名な占い師がいる。かなりの確率で当たるとの話でな。私も人探しをその占い師に依頼しようとその街に向かっていた途中、此処によつたのだ。で、お前らと会った」

「ジイルバーンも人探しの？」

「ああ、そうなるな」

ルナファレフの問いに答えながら、ジイルバーンは伊爽を見た。

「どうだ？ 乗ってみる気はないか？」

その問いに、伊爽は意味あり気に笑った。

「構いませんよ。どうせ当てがない旅です。なら、少しでも手がか

りになる話には乗りますよ」

伊爽のその言葉に、ジルバーンは小さく笑い、
「それと、私のことはジルでいい。一緒に旅する以上、友好関係は成り立たせなければな」

そう言つてジルバーンは手を差し出した。

「分かりました。ジルさん」

その手を伊爽は握り返した。

こうして、伊爽とレイラの旅に、ジルバーンとルナファレフが加わる事になった。

考えれば考えるほど、奇妙な一行だ。

瘦躯の剣士に子供に考古学者に魔女姿の人工生命体。

ぱつと見、楽団に見られても可笑しくないだろう。

「この世で最も奇妙な一団だね。ボクたちは」

更にそこに加わるのは、盗みに入った義賊。

あれもまた、奇妙な出会いだった気がする。

アシュミエを目指す伊爽たちは、アシュミエに向かう途中の街で組合の依頼を追え、その日は疲れを癒すべく宿に泊まっていた。

そして夜も深けた頃、人の気配に気づいて伊爽が目覚めると、部屋の隅に置いておいた荷物を物色する人影が目に見え込んだ。

伊爽はできる限り気配を消し、ベッドの横に立てかけてある剣を手に取りベッドから静かに降りる。

見れば他のベッドで眠っていたジルバーンとルナファレフも目だけ開けて、荷物を物色している人影を見ていた。

三人は悟られぬように頷き、次の瞬間荷物を物色している人影目掛け、一斉に飛び掛った。

伊爽とジルバーンが挟むようにして人影の横に立ち、各々の得

物を突きつける。

更に背後からルナファレフが飛び蹴りを決め、その人影が悲鳴を上げながら床に倒れた。悲鳴からして、どうやらこの賊は男のようだ。

伊爽が即座に束縛の呪文を唱え、魔力の束でその賊の動きを戒める。

「うわっ！ 何だコレ？ 動けねえぞ！？」

男は悲鳴を上げながらどうにかしてその束縛から逃れようとしているが、かなりの魔力で創り出した束縛はそう簡単には破ることはできない。

ジルバーンは立ち上がって部屋の明かりを着ける。

明かりの灯った部屋の中に、この部屋にいるはずのないその男の姿が浮かび上がった。

明るめの色をした髪を後ろで束ねた、伊爽とそう大差なさそうな年層の少年が、そこには寝転がっていた。

少年はばつが悪そうに顔を顰めた。

「で、どうします？ 彼」

そう誰に言うでもなく呟いた伊爽の言葉に、ジルバーンはにべもなく、

「役所に連れて行くのが道理だろう。盗みに入っただ。それが妥当と言っものだろう？」

そう言った。

当然抗議するのは、その盗みに入った彼 ジントニックと名乗った少年だった。

「ま、待ってくれよ！ 役所だけはごめんだ！ 後生だから見逃してくれ！」

必死の形相で訴える少年を見て、伊爽は型を上下させて、

「……なんて言ってますよ」

「駄目だな」

ジルバーンが即答した。するとジントニックはそれはもう必死に、哀願するように訴えてる。

「頼む！ 役所なんかに入れたら、俺は間違いなく死んじゃう！」

「何を戯けたことを……」

「嘘、違う」

盗賊少年の訴えを一蹴しようとしたジルバーンの言葉を、眠そうな表情のレイラが遮った。唐突なレイラの言葉に首を捻ったジルバーンに、レイラはジントニックの腕や首に彫られた刺青を指差して、

「これ……そういう呪い」

「呪い……だと？」

なおも疑わしげに首を傾げるジルバーン。そこにルナファレフも加わって言った。

「多分この坊やの言ってることは本当よ。それにレイラちゃんの言っていることも。この坊やの身体に描かれている紋章……私のみ間違いでなければ《見返りの紋章》よ」

ルナファレフの口から告げられた名詞を聞いて、伊爽が問う。

「《見返りの紋章》って、あの紋章が彫られている人間に何らかの力を与える代わりに、代価を求めるっていう、あの紋章のことですか？」

「そうよ伊サくん。その紋章よ。しかもこの子に彫られている紋章は、とつくの昔に滅んだといわれている術法 《血喰の紋章》よ」
ルナファレフの説明によると、《血喰の紋章》とは彫られている人間に常人を逸した力を与える代償に、定期的に魔物の血を与えないと紋章を彫られている者を殺すという凶悪な紋章だという。

その周期は大体七日。それを超えると彫られているジントニックが死ぬことになるという。

「盗みの刑期って確か最低十日ですよ。バリバリ死ねますよ」

あつけらかんと伊爽が苦笑しながら言う。当然といえば当然だが、牢屋の中で血に飢えた紋章にジントニツクは殺されることにある。それが分かっているからこそ、ジントニツクは笑う伊爽に声を荒げて訴えた。

「笑いことじゃねえ！」

「しかし自分で彫った紋章だろう？ 自業自得ではないか？」

「誰が好き好んでこんな物彫るか！」

「違うのか？」

疑わしげにジントニツクを見下すジルバーン。

「当たり前だつーの！ 俺は騙されたんだよ！」

彼曰く、数年前とある魔法使いの罠に掛かって眠らされ、気がついたらずでにこの紋章を彫られた後だったという。

そして行方を晦ました魔法使いを探し続け、先日その魔法使いの行方を？んだ時にはすでに遅く、その魔法使いは死んでいたという。「だから俺はアシュミエにいるっていう占い師に、この紋章を消す方法を占ってもらおうと旅してたんだが、運悪く路銀を落としまつて……。で、丁度その時組合でデカイ仕事を終えた連中を見つけたんだよ……」

「それが私たちだったというわけか……」

ジルバーンは呆れ果ててため息をついていた。その隣で伊爽は苦笑するしかなかった。

ジントニツク。知る人ぞ知る義賊で、悪名名高い富豪たちから金品を盗み、貧しい人たちに配ったり本来の持ち主の所に持っていくという何時代の怪盗だと言いたくなるような存在。

同時にトレジャーハンターとしても有名で、戦闘のスペシャリストとしても知られる彼。組合でも結構名の通った人物が、まさか路銀に困って盗みを働くとは……。

「そういえばこの坊や、今アシュミエの占い師の所に行くって言っていないかったかしら？」

ルナファレフの言葉に、ジルバーンの表情が引き攣った。そし

て、そこに追い討ちをかけるのは、

「言った。アシュミエの、占い師って」

レイラだった。

ジルバーンの表情は更に険しいものになる。

伊爽はため息をついてジルバーンに言う。

「どうします？ あのジントニックですよ。多分独自の情報網を持っていると思いますが？」

伊爽の呟きに、ジントニックはきよとした表情で、

「そりゃ一応盗賊だからな。そっちの連中専用の情報網はあるぞ。それがどうかしたのか？」

悪気のない一言だった。

ぐぐぐと唸るジルバーンを宥めながら、伊爽は何とか言葉を発する。

「戦闘のスペシャリストとして組合にも顔が利く。これって結構お買い得ですよ？ それに牢屋に入れば死んでしまうんですよ？ こは恩を売ると思って……だからジルさん、落ち着いてください！」

今にも自分の中に生まれた葛藤で叫びだしそうなジルバーンを必死で抑えながら、伊爽はその夜一杯を費やし、朝昼晩の三食と、村や街にいる場合は寢床を提供する。今回の件は見逃す。その代価として力を貸してくれないか？ とジントニックに交渉を申し込むと、ジントニックは意気揚々と歓喜してその提案を受け入れた。

こうして盗みに入った飢えた義賊が、伊爽たちの旅に加わるようになった。

「あの時は、本当に大変だった……」

思い出して深くため息をつく伊爽。あの時のジルバーンを説得するのは本当に手間がかかった。

昔そういった賊と何かあったのだろうか？ と今更ながら疑問に

思う伊爽。

窓の外を見る。

月はすでに頂点を通り過ぎ、傾き始めていた。どうやらかなり長い間、伊爽は過去を回想していたようだ。

手にしていた叙こと詩を閉じ、伊爽はそれを鞆にしまつて自らも床に就くことにした。

横になり、毛布を被る。

ふともう一度窓の外に目を向けると、そこにはやはり、あの白い花が一輪咲いていた。

その鼻を見つめながら、伊爽は微笑して目を閉じた。

ボクの側に立つ貴方。

貴方は一体、何者なのだろう？

03：アシュミエの占い師

ベッドから起きた伊爽は、まだ半ば眠っている意識を強引に起こして靴を履き、ベッドから降りた。

周りを見回せばすでに皆床を出た後だ。どうやら先に朝食にいったらしい。

「起こしてくれればいいのにな……」

そう呟きながら、伊爽は洗面所に向かってタオルを水で濡らし、その濡れタオルで顔を拭いた後、剣をベルトで腰に結んで部屋を出た。

長い廊下を歩き、階段を下りて下の階へ。此処の宿は一階が酒場兼食堂を兼ねているらしく、朝から結構賑わっていた。

その中の大きめのテーブル。その一角を伊爽の仲間たちは陣取っていた。伊爽はそのテーブルに歩いていき、空いている椅子を引いてその椅子に座る。

「おはようございます」

「うむ」

「おはよう」

「あらあら、おはようイサくん」

「遅ーぞ。何時まで寝てる気だったんだよ」
おせ

それぞれイサに言葉を送る。特に最後のジントニツクのは文句でしかなかった。伊爽は軽く無視してやって来た店員に軽い朝食を注文し、まだ眠い頭を無理やり回転させてジルバーンを見た。

「アシュミエに来たのはいいですけど……どうでした？ そっちで何か手がかりは？」

伊爽の言葉に、ジルバーンもルナファレフも首を横に振った。

二日前。伊爽たちはこの街アシュミエにいますという高名な占い師を尋ねるためにやって来た。しかし来たは良いものの、その占い師

の居場所は一切不明。それどころかこの街に来て分かったこととして、その占い師の占いはいわば趣味のようなもので職種として行っているわけではないらしい。

そのため殆ど手がかりがなく、伊爽たちはこの二日、手分けして組合や情報屋を歩き回っていたが、今の所目ぼしい情報はない。

運ばれてきた朝食に手を付けながら、伊爽はそれとなくジントニツクを見た。

「ニツクのほうは？ 何か手がかりがあったかい？」

するとジントニツクはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、懐から一枚のメモらしきものを取り出した。

「盗賊^{シーフ}たちのたまり場に腕のいい情報屋がいてな。そいつに調べて貰ったんだが、それらしい人物の情報を貰って来たぜ」

そう言ってジントニツクはジルバーンにメモを手渡す。ジルバーンはメガネの位置を直しながらそのメモに目を通し、感心したように肩を竦めた。

「ほう……盗人無勢と思っていたが、まともな情報を仕入れてきたみたいだな。見直したぞ」

「あんたのお眼鏡に掛かったのなら、信憑性は高いと見て良いみたいだな」

コーヒーを飲みながら、ジルバーンは渋々ながら頷き、手にしていたメモを無言で伊爽に手渡した。

まだ見ていないレイラとルナファレフのために、伊爽は手渡されたメモに書かれた内容を口にした。

「何々……東地区の薬屋……その店主である老婆のアレリア。趣味で占いをやっているか……なるほどね。行ってみる価値はありそうだ」

ハムエッグを口の中で租借し、それをコーヒーで流し込みながら伊爽は頷いた。皿の上を綺麗にし、フォークを皿の上に乗せ立ち上がる。

それに続くようにして四人が立ち上がるのを見て、伊爽は微笑し

ながら口を開いた。

「じゃあ、行きましようか。このアレリアという人に会いに」
五人は揃って頷き、荷物を取りに宿の部屋に向かった。

何処からどう見ても、それは変哲のない薬屋だった。

だが、見た目は明らかにただの薬や。それなのに何故か異様な雰囲気醸しているその店の前に、伊爽たちは立って啞然とした表情でその看板を見ていた。

そこにはこう書かれていた。

『交響想歌の末裔集う、廃坑の止まり木』

「どんな看板だよ……本当に薬屋の看板か？ コレ。意味がさっぱり分からん」

もったもな意見を、ジントニックが乾いた笑い声を上げながら言った。

ルナファレフとレイラも不思議そうに首を傾げていた。

そんな中、伊爽とジルバーンだけは違った。疑惑、そして疑問の入り混じった表情で、ただじっとその看板を見つめていた。

そしておもむろに、ジルバーンが口を開いた。

「……ファントズマゴリア……？」

「は？ 何だつて？」

ジントニックの問いかけに、ジルバーンの代わりに伊爽が答えた。

「ファントズマゴリア。一度くらい聞いたことがあるだろう？ 遙か昔に存在したという王国。未だ嘗て、誰一人見つけられなかった古代遺跡。そこには全ての願いが集い、そして叶う場所といわれている幻の古都」

「それは私も知っているわ。でも、どうして今その名前がここで出

てくるの？ イサくん」

首を傾げるルナファレフに、伊爽は苦笑気味に答えた。

「交響想歌。これは古い言葉でファンタズマゴリアという意味なんです。そしてこの看板の書かれている言葉はある種の隠語で、知っている人だけが分かるようになってるんです」

すると伊爽の外套をレイラがつまんで引っぱり、見下ろした伊爽に訊く。

「どんな意味？」

伊爽は隣に立つジルバーンを見た。彼は小さく首肯し、無言で先を促がした。伊爽も頷き返して、意味を理解できていない三人に、その意味を教える。

「単直に訳すると、

『私はファンタズマゴリアに住んでいた一族。すでに失われた故郷の変わりに、私はこの地を一時の安息の地へと選び、いずれ訪れる同胞の休息の場として居を構える』になる。

本当はもっと複雑なんですけど、それを言うと皆の頭が混乱するだろうから、そっちの意味は言わないでおくよ」

そし隣のジルバーンに「良いですよね？」と確認を取りながら、伊爽は改めて看板を見上げた。

そしてその看板を見つめた後、見せの入り口の扉を見据え、伊爽は重々しいため息をついた。まるで訪れるものを拒むように閉じられたその扉を見て、伊爽は誰に言うでもなく呟いた。

「これじゃあ、入れませんね」

「そうだな……」

伊爽の言葉に同意するように頷くジルバーン。そんな二人を見て、レイラたちは不思議そうに首を傾げた。

「何言ってるんだよ？ 普通に扉くぐれば良いじゃねえか」

「ならその扉をくぐってみろ、このド阿呆」

馬鹿にするように言うジルバーンの言葉に、ジントニクは怒りを露にして激昂した。その隣で苦笑している伊爽が、怒るジント

ニツクを宥めながらそれとなく促がす。

「まあ、そう思うのなら試してみたらどうだいニツク。そうすればジイルさんの言っている言葉の意味が分かるだろうし、説明するよりもそっちのほうが理解しやすい」

伊爽に間に入られたジントニツクは訝しげに伊爽を見た後、堂々とした態度で店の入り口に近づいていった。

そのジントニツクを見ながら、伊爽は隣のジイルバーンに小さく耳打ちする。

「もしこれで開いたら、どうします？」

「私は世界の全てを否定することになるな」

「……それはそれで、ニツクがそうであって欲しいと思ってしまっ
なあ」

「どゆこと？」

伊爽のすぐ側が定位置のレイラは、二人の会話に首を傾げる。そんなレイラに、伊爽は笑みを見せながら言った。

「すぐに分かるよ」

「おい、どうなってるんだ？ この扉、開かねえ！」

混乱したようなジントニツクの声に、伊爽たちは揃って視線を向けた。そして伊爽は、そんなジントニツクの様子を見て嘆息した。そして一人、呟く。

「やっぱり……か」

伊爽は今なお扉を強引に開けようと四苦八苦しているジントニツクから視線を逸らし、その頭上にある看板を見た。

そして、先ほど訳した言葉意外に込められている意味を読み取る。看板の回りに描かれている紋様。それは端的に見ればただの紋様であり、模様でしかない。

だが、読める人間には読める。無論伊爽はそれが読めている。だから紋様の意味を理解している。そして、そこにこう書かれていた。『故郷の血、継ぐ者のみ、自ず扉を開けること叶う』と。

予想ではあるが、伊爽はこの店の経営方法を理解した。

この店の入り口の扉は、普段は店主である老婆の手によって全開状態にされているのだろ。そしてもし、彼女が本物の占い師なら、恐らく自分を誰かが訪ねて来る者も予知できるはず。

そしてその人物が占いたくない人間なのなら、こうして人が入ることを拒むようにしてるのだろ。

しかし、もしそうでないとすれば、

「試しているのかもしれないな」

「そうですね」

ジルバーンの呟きに、伊爽は同意するように首肯した。残された理由はそれしかない。

つまり、試しているのだ。ここを訪ねる者の誰かが、自分と同じ血が流れる一族かどうかを……。

「何とも確率の低い賭けをしているんだ……此処の店主は」

憤慨と言わんばかりにジルバーンはため息をつき、今なお悪戦苦闘しているジントニクの襟首を？んで後ろに放り投げ、邪魔者のいなくなった扉のノブに手を添え、引くオスと繰り返してみせる。しかし、先のジントニクと同じように扉はうんとともすんとも反応を示さず、来客の侵入を頑なに拒絶していた。

ジルバーンはため息をついて伊爽たちに目を向け、お手上げのポーズをとった。

「私でも駄目だ。人工生命体であるルナファレフは論外。残るはイサとレイラだな」

「そうですね」

頷き、伊爽はレイラにこと情を説明して扉を開けてみてくれないかと頼むとレイラは快く引き受けて扉のノブに手をかけ、引いてみた。続いて押してもみるが、やはり扉は反応を示さなかった。

「レイラちゃんでも駄目みたいね。となると、残るはイサくん一人ね」

「たく、正確ひねくれすぎだぞ此処の主。無理に決まってるだろうが」

がっかりしたように肩を落とすレイラを見て、ルナファレフは困ったように呟き、ジントニツクは悪態を吐きながら道の真ん中で座り込んで胡坐をかいた。そのジントニツクをジルバーンが即座に叱咤し、視線で試してみると伊爽に催促する。

そんな皆の態度に苦笑しながら、伊爽は扉のノブに手をかけて押した。

ギイイイ……

瞬間、一同がギョツと目を見開いて一斉に扉を見た。

今までの拒絶が嘘のように、伊爽の触れた扉は何事もなかったかのような普通の扉と同じように簡単に開いた。

扉を開けた当の伊爽はと言うと、ノブに手をかけたまま硬直し、思考停止に陥ってその場で呆然と自分を見失っていた。

皆がそんな伊爽を見つめること数分。ようやく自分を取り戻した伊爽がゆっくりと首だけを動かして背後に立つ四人を、どうしようといわんばかりの何か哀願するような目で見た。

誰もが啞然とした表情で首を捻る中、逸早く我を取り戻したジルバーンがメガネの位置を直しながら、

「……伊爽……」

「……ええ、分かってますよ……ボクはこの旅が終わった暁にはまづ真っ先に村に帰って、あの秘密主義の祖父に己の出生の秘密を何が何でも聞き出します。それが例え……肉親に剣を向けることになるうとも……」

伊爽の祖父であるエッジと言う人物は、嘗て「漆黒」のエッジとしてその名を世界に轟かせていたほどの大剣豪。その経歴の殆どが不明で、特に組合にその名を知られるようになる前の経歴は一切不明。

伊爽は幼い頃から何度も祖父は何者なのかと訊ねた回数は十や二十ではない。どう見ても普通の街村に生まれ育った人間とは思えな

いほど祖父は気品があった。

そういったものの全てひっくるめて謎の多かった祖父。幼い頃の伊爽は気になって仕方がなく、幾度となく祖父の正体を訊ねたが、だがそのたびに祖父から返ってきた言葉は、

「秘密だ」

の一言だった。そうやって良く何百回あしらわれ続けた伊爽は、やがて訊ねるのが面倒になって保留し続けていた。

しかし昔から謎が多かったが、今日、伊爽の中でまた一つ祖父の謎が増えた。

しかも計り知れないほど凄いことが。

この扉を開けられた以上、伊爽の身体を流れる血にはファンタズマゴリアの末裔たる由緒正しい血が流れていることになる。無論父もそうだろうが、父は生まれも育ちも伊爽と同じビリゼの村だ。

となれば、疑いの目が向くのは当然伊爽の祖父だ。何処からともなく現村長のゲイルと共にビリゼの村に現れ、定住してしまった祖父。

あの田舎村でただ二人、一般の民衆とは明らかに異なる気品さと高貴さを身に纏っていた。

伊爽は断固として決意した。もしこの旅が終わったら、絶対にビリゼの村に帰ってあの祖父を殺すことになるうとも躊躇せず実力行使に走って口を割らせる。

扉のノブを碎かんばかりに握り締めながら決意した伊爽の後姿を見て、ジイルバーンはその石を押し進めるように一言。

「その時は迷わず私も呼べ。手を貸そう」

「よろしく願います」

伊爽は微塵も遠慮せずそう言った。

そしていつまでも不毛な行動で時間を食うわけにもいかない即座に思考を切り替え、未だに混乱したような表情をしたレイラたちに声を掛ける。

「ほら三人とも。いつまで呆けてるんだい？ 何にしても扉が開い

「たんだ。中に入ろう」

「あ、ああ……そうだな……」

「そうねえ……それにしても凄いのね、イサくんって」

ジントニツクとルナファレフが肩を竦めながら言葉を口にし、レイラは何も言わず伊爽に歩み寄った。

そんな三人の様子にかぶりを振りながら、ジルバーンは苦笑しながら言った。

「考えていても仕方あるまい。とっとと目的を果たそう」

「そうですね」

ジルバーンの言葉に頷き、伊爽は見せの扉をくぐった。

「……なんて言うか……あれですね。子供の頃に読んだ、御伽噺の魔女の家みたいです……」

伊爽の何気ない呟きに、ジルバーンは大きく同意の意を示すように頷いた。伊爽の言葉は的を射た表現だと言って良い。

此処はまさしく、魔女の家だった。

いや、下手をすればそれ以上に滑稽で奇妙な店だった。

薄暗い店内には幾つの蜥蜴などを始めとした爬虫類の干物や薬草類が天井から吊られ、壁の棚一面に魔法道具などが陳列し、ご丁寧に巨大な何かの煮えたぎった大鍋まである。

他にも薬屋とは思えない物品が幾つも並んでいる。薬屋と言うより、小さな闇市と表記するべきだと何気なく思いたくなる、そんな店。

「スゲーなおい。あそこに置いてある瓶のラベル……今じゃ組合の審査で発注が禁止されてる劇薬だぞ」

「アレも凄いわぁ。私の知る限り、あそこに咲いている花は今から千年以上昔に滅んだはずの絶滅種よぉ」

「こっちは四百三十七年前にたった百冊だけ出版されたクライアスIIレンレッツオ氏の幻の作品と呼ばれている小説ですよ。今なら時

価七億は下らない品です……」

「この剣の銘は……エルウィン・ヴァーンだと！？生涯で七本しか剣を鍛えなかったあの名工の作品が何故こんな店に……」

レイラはなにやら興奮している大人たちを見て小さくため息を漏らし、伊爽に歩み寄って彼の首に巻かれている襟巻きを思いつきり引っ張った。当然伊爽の首が絞まり、伊爽は「グエツ」とうめき声を上げながらレイラを見た。

「分かってるよ……ただちょっと、珍しかったからね」

自嘲するようにレイラに言いながら、伊爽はレイラの手から離れた襟巻きを戻しながら店の奥に目を向けた。

そして伊爽が店員を呼ぶより早く、その人物は暖簾の向こうから姿を現した。

小柄でこれ見よがしにローブに身を包んだ老女だ。濃い紫色のローブに身を包み、かぶるフードから覗く白髪と藍色の瞳が印象的であり、手に握られている櫛の木の杖もまるで違和感がない。つまりは型に嵌っているのだ。

そしてその老女は、その老いた姿であってもまた美しいという印象を受ける。伊爽だけではなく、周りの四人もまた同じように現われた老女を見て、その絶妙な美しさに息を吞んでいた。

五人が呆然とその場に突っ立ったまま老女を見つめていると、その老女は無言で五人を一人ひとり見据え、最後に伊爽を見てから、ゆっくりとした動作で一步踏み出し、その口を開いた。

「お前さん方……何処から入ってきた」

見た目に相応した声音で告げられたその言葉は、それは問い掛けというよりも、確認に近い言葉だった。

一瞬だが、そこにいた誰もが老女の言葉に威圧感を覚え、本能的に半歩後退した。だが、伊爽はすぐに気を取り直して一歩前に出て、自分の中に生まれた緊張感を吐き出すように息を吐き、老女に一礼してから口を開いた。

「お初にお目にかかります。ボクはイサと言います。貴女の問い対

する答えは明確で、その扉からです。開けたのは……ボクです」最後の一言はしばし躊躇いがちに、だがその上ではっきりと告げた。

老女はしげしげと伊爽を見据えた。まるで何かを品定めするかのように、じつくりと時間をかけて……。

やがて老女の目は、伊爽の腰に下げられた剣に向けられた。そしてその細められていた瞳が、驚愕の色と共に見開かれた。

「……この剣……」

老女の口から零れた言葉に、伊爽は首を傾げながら自分の腰に下がる剣に目を向けた。皆の視線も、自然と伊爽の剣に向けられた。

伊爽の腰に下げられた剣は、はっきり言って何処にでもありそうな直剣だ。特徴があるとすれば、それはその剣身全体が黒一色で仕上られているということ。

元々伊爽の持つ剣は伊爽の祖父が持っていた代物で、伊爽が旅立つ朝に祖父が手渡したものだ。

『お前に必要なものだろう?』

そう言って手渡された物。剣身の長さといい、握りの長さといい、そして重さといい、全てが伊爽の手にしっくりと馴染んだ。まるでずっと昔から伊爽が使っていた剣のように、本当にしっくりと馴染んだのだ。

刃毀れることもなければ欠けることも錆びることもないこの剣の強固さには驚いていたが、それが、それ以外は特に変哲もない剣だ。この剣がどうしたというのだろうか?

そう伊爽が思っていると、老女は伊爽をゆっくりと見上げ、問いた。

「お主……この剣を抜けるのか?」

「え? ああ……それは、抜けますよ」

伊爽は言いながら剣の柄を?み、それをそのまま鞘から引き抜いた。黒塗りの剣身が薄暗い部屋の中にわずかに存在する光を浴びて、鈍い光を放つ。

その抜き放たれた剣を見て、老女は感嘆したように呻き声を上げた。そんな老女の様子に、五人は不思議そうに首を傾げて老女を見た。

暫しの間、老女は無言で伊爽の剣を見つめていたが、やがて何ともなかったかのようにかぶりを振り、伊爽たちを見た。

「して、お前さん方は何用で此処に参った？」

「決まってるんだろう、婆さん。あんたが高名な占い師だって言うからわざわざ訪ねてきたんだよ」

老女を小馬鹿にするようにジントニツクが苛立った様子で言うと、ルナファレフが問答無用でその後頭部を殴った。痛そうだ。

ジントニツクの呟きを老女は軽く無視し、ため息をつきながら頷いた。

「まあ、私を訪ねる人間なんてそんな者だね。だが、無料で占つてはやらん」

「お金、いるの？」

老女の呟きにレイラが首を傾げると、老女は首を横に振って見せた。

「そんなモノはいらん。ただ、私の頼みを聞いてくれればいいのさ」
老女は不吉な冷笑を浮かべながら言った。

「この街から南に行った所に、古い遺跡がある。その奥に行つて、水晶を取ってきて欲しいんだよ」

「水晶……ですか？」

伊爽の当然の疑問の声に、老女は静かに頷いて言葉を続けた。

「そう、水晶だ。わたしの占いにはそれが必要不可欠だ。特に、お前さん方の占つて欲しいことについては……な」

意味深げで意味あり気なその言葉と共に、老女は不適に嗤って見せた。

「あそこの遺跡には強力な守護者ガーディアンもいる。下手したら死んでしまうがね。命の補償は一切しないよ。命が惜しいのなら」
「行きます」

老女の言葉を遮るように、伊爽は老女の言葉が終わるより早く意思を口にした。老女の視線が細くなり、射抜くように伊爽を見た。

「……良いのかい？」

「もとより手がかりが殆んどないんです。なら僅かな手がかりが手に入るのなら、命の危険くらい気にしてられない」

「……そうだね。私は、遅かれ早かれ、見つけれないと、どつちにしても死ぬし」

伊爽の言葉に逸早くレイラが同意の言葉を呟いた。そして、それに続くように皆の口から次々と言葉が紡がれる。

「私とて、此処で後戻りするつもりはない。もとより旅をする以上死は隣り合わせだ。いまさら臆するものでもあるまい」

「私はあの魔女を何としても見つけるの。その為なら、命の一つや二つ惜しくないわあ」

「この紋章を消せないと結局死ぬ。行って死ぬかもしれない程度で済むなら、行くほうを取るさ」

ジルバーン、ルナファレフ、ジントニクも、行くことを拒む者はいなかった。伊爽はそんな彼らに頷いて見せて老女を見た。

「というわけで、少し待っていてください。必ず水晶を取ってきますから」

老女の言葉を待つことなく、扉を開けて出て行く皆を追って、伊爽も扉を出て行った。

その後ろ姿を、細めた視線で見据えた老女と、一輪の白い花だけが、静かに見送った。

伊爽たちが出て行ったのを見届けた老女は、静かに扉を閉めて、そして酷くゆっくりとした動作で振り返り、恭しくこうべを垂れた。「御久しゅうございます。永遠様」

そこに立つ、儚げな少女は酷く狼狽した様子で老女を見た。白銀の長い髪と白い法衣に身を包んだ、首から懐中時計を下げた少女

永遠は、見ていて可哀想なほど困惑と狼狽を露にしていた。

そんな少女に、老女は伊奘たちには一度たりとも見せなかった微笑を浮かべ、永遠をまるでわが子を愛するように見つめながら、
「約五千年ぶりでございますようか？ いや、永遠様からすればほんの刹那に等しい時間でありましょう。しかし……まさか再び永遠様にお会いできる日が訪れるとは、このアレリア、思ってもみませんでしたよ」

優しい笑みを浮かべ、目尻に涙を溜めた老女　アレリアは、その場で狼狽する永遠にやんわりと、そして哀しげに告げる。

「分かっております。永遠様の声は、どうやら私にも聞こえないようです。ただ私は永遠様を知っている故、姿が見えているだけなのでしょう。本当の永遠様は、今なおあの？時の狭間？に囚われているのでしょうか……」

そう言ってアレリアは数歩永遠に歩み寄り、永遠に触れようと手を伸ばしてみる。しかしそのしわだらけの手は永遠の身体を捉えることなくすり抜けてしまう。

それを見て、先ほどまで狼狽していた永遠の表情に浮かんできたのは、誰が見ても分かるほどの絶望と悲嘆だった。

そして、それはアレリアも同様だった。

空を切った自らの手を見て、アレリアは哀しげに呟く。

「コレだけ近くにおられるのに、私は永遠様に触れることも叶わないのですね。王も……酷なことをされる……」

一人、誰に言うでもなくアレリアは呟いた。最早この世に存在せぬ、嘗て自らが仕え、そして目の前の少女の父へと向けて……。

しかしすぐにアレリアはかぶりを振り、涙を拭って永遠を見た。

「永遠様……あの童わらわと共におられましたね……」

あの伊奘という少年の傍に、永遠はずっと寄り添うように立っていたを、アレリアは見ていた。だから問いたのだ。どうしてあの少年といえるのかを。

すると、先ほどとはまったく異なる意味で永遠は狼狽し、見る見

るうちにその頬を朱に染め、顔を真っ赤にさせた。

それを見て、アレリアは苦笑気味に笑んだ。そういった部分は、やはりこの少女も歳相応だと言うことなのだろう。

永遠はそんなアレリアの心情を読んだのか、何かを必死に訴えるように両手を眼前で翳してブンブンと振っている。更に口を一杯に開けて、必死に何かを叫んでいるようだった。

その様子に、アレリアは思わず苦笑してしまった。

それでは肯定と同じでしょうに……いくら高貴な血を継ぐ方でも、やはり女は女ですな。

だからちよつとだけ意地悪を試してみたくなるのが人間だ。アレリアは嘲笑するような笑みを浮かべ、今な何か言おうとしている永遠の言葉を遮るように、その口を開いた。

「^{よわい}齡五千を超える私の、女の目を……まさか十数歳の娘が誤魔化せるとお思いですか？ 永遠様」

それだけで、少女は諦めたように慄いて、ガックリと肩を落とした。先ほどとは百八十度正反対の絶望的表情をしている。

昔からこの人は面白い反応をしてくれると思っていたが、まさかコレほどまで露骨に反応を示すとは……と、さすがのアレリアも予想外だったらしく、楽しそうに小さく笑い声を上げた。

笑いながら、アレリアはあの伊爽という名の少年を思い出してみた。

腰に下げたあの剣といい、あの出で立ちといい、醸す雰囲気といい、嘗てあの剣を携えていた黒い騎士のことを思い出させるような少年だった。

だから、試したくなつたのだ。

この永遠が選んだ少年だから。

あの剣を携える少年だから。

あの忠義に篤き黒き騎士に、とてもよく似た少年だから……。

永遠様に会う資格が……そして救える資格があるか……試させておくれ。

アレリアは永遠を見上げ、口を開いた。

「永遠様。此処から水鏡を用いて彼らの様子が見れます。よろしければ、ご覧になりませんか？」

その言葉に、永遠はまだ何処か恥ずかしげな態度で、ゆっくりと頷いた。

アレリアは静かに頷き、永遠を部屋の奥へと促がした。

さあ、永遠様に選ばれた童よ。

お主に資格があるか、しかと私たちの目に見せておくれ。

04：千剣の試し

遺跡に足を踏み入れてから、伊爽は何度目か分からない違和感を覚えた。

古代遺跡と言うのは大抵が今現代の技術力をもってしては創り上げることが不可能とされている超金属を始めとした高度な機械技術の結晶のような場所だった。

しかし此処の遺跡には、伊爽の知りえる限りの古代遺跡とは大きくかけ離れた建造物だ。機械でできた遺跡ではなく、本当に石を積み上げて創り上げた、現代の建築技術に近い代物でできているように見える。

それと同時に、この遺跡にはもう一つの大きな特徴があった。遺跡を形成する壁や柱全てに、魔法に用いられる呪文言語が彫られているのだ。それら全て、魔法を発動させる呪文式として構築されている。それらは途方もない膨大な量の呪文言語で、入り口からかなり進んできたが、未だにその呪文の終わりが見当たらない。

横部屋や分かれ道。そういった通路には幾度もぶつかった。しかしそれでも呪文は綴られ続けていて、その呪文構成を見る限り、この遺跡の最深部まで続いているのではないかとまで思えてくる。

そして、そのことに気づいているのは何故か伊爽だけだった。

魔法を習得していないジントニツクや、魔法の技術力が低いジイルバーンならともかく、伊爽よりも遥かに魔法技術に卓越しているレイラやルナファレフさえ気づいていないというのは可笑しいことだった。

そしてふと気づく。

壁に刻み彫られ綴られている呪文言語。それらの一部が、今現在に用いられている呪文言語と異なるものがあるのだ。その微細に異なる言語があるが故か、二人の知りえる呪文言語と微妙な違いが生じ、

二人の目にはそれが呪文言語として成り立っていないのだろう。
（じゃあ……どうしてボクは読めるんだ……いや……それよりも……）

どうして自分は、この呪文言語を知っているのか？

伊爽自身、目に映る呪文言語は生まれてから一度だって見たことがない物だ。それは間違いない。

だが、どういう理由か伊爽にはその文字が読めた。

理由も理屈も一切不明。

昔祖父に教わったわけでもなく、ましてや伊爽自身、何かの本で見たことがあるわけでもない。

それなのに、伊爽にはその文字が読めていた。

どういうことだ……どうしてボクは、この文字を知っているんだ！？
自分の中に生まれた疑問。それは驚愕と同時に伊爽自身に恐怖を植え付けた。

知りえぬ呪文言語を自身でさえ知らぬ間に知ってしまったている。

その現実に、伊爽は何とも言い難い悪寒を感じ、身震いした。

この遺跡は、明らかにおかしい。

そう、伊爽は直感した。

右手が自然と腰に帯びている剣の柄を握る。しかし、それは何が起きてもすぐに対処できるようにではない。

身に覚えのない言語を知り、そしてその言語が用いられているこの遺跡全体に恐怖したが故だった。

今、伊爽自身その得体の知れない遺跡の中にいるのだ。異常なまでに警戒心が強まり、神経が以上に研ぎ澄まされていく感覚が、伊爽自身感じ取った。

だが、それでもなお伊爽は剣の柄を握った。身に襲い掛かる正体の知れない恐怖感を押さえ込むように強く握り締める。

「イサイサ」

不意に自分と呼ぶ声が耳朵を叩く。伊爽は一瞬我を忘れて、やがて自分が呼ばれたことに気づいて声の主を見た。

伊爽のすぐ側を歩くレイラは、心配そうに伊爽を見上げていた。

「どうか、した？ 怖い顔、してるよ」

一瞬少女が何を言ったのか理解できず、伊爽は啞然とした表情で首を傾げたが、やがて言葉の意味を理解して慌てた様子でレイラに問い返した。

「そんな……怖い顔してた？」

「してた。ココにしわ寄せて、ううーって」

ココと言いながらレイラは自分の眉間に指を当て、思いっきり険しい表情をして見せた。恐らく、伊爽がこんな顔をしていたと教えないのだろう。

レイラに指摘されて、伊爽は自分が随分と酷い表情をしていたのだということを理解した。握っていた柄から手を外し、伊爽は狼狽しながらレイラに言う。

「な、何でもない！ 何でもないから。ちょっと考えことしていただけだから」

「ホント？」

「本当だよ」

「ホントにホント？」

「本当に本当」

レイラはまだ疑わしげな表情で伊爽を見上げていたが、それを伊爽が「この話はもう終わりだよ」と言って強引に会話を終わらせた。レイラはまだ不満げに目を細めていたが、やがて諦めたのか小さく嘆息した後、「分かった」と言って再び皆に並んで歩き出した。伊爽もそのレイラに続いて周囲に気を配りながら歩みを進める。

「ありがとう……」

レイラに聞こえないように注意しながら、前を歩く幼い少女にそう言いながら。

「どうやらあの童……遺跡の文字が読めたようですね」

水鏡を覗き込みながら、アレリアはほくそ笑みながらそう呟いた。
「コレでまた一つ、確証が得られました」

誰に言うでもなく呟いたアレリアの言葉に、側で同じように水鏡を覗いていた永遠が不思議そうに首を傾げた。

その瞳には「どういう意味なの？」と問いかけているように見えた。

しかしその視線を受けながら、アレリアは答えることはせず水鏡を見据える。

「まだ……核心の確認には至れません。至るには、いま一つ足りないの……」

視線を水鏡から微塵も逸らさず、アレリアは首を傾げた永遠にそう言った。

二人は伊爽たちが遺跡に辿り着いた頃からずっとこうやって水鏡を覗き、彼らの行動を監視していた。

と言つても、監視しているのはアレリアに過ぎない。永遠の場合、単純に伊爽が心配なだけだった。

彼に危険はないのか。彼が怪我をしないのか。

彼が……死なないのか。

そんな永遠の心情を察したのか、それともただ単純にそう思ったのか、アレリアは淡々とした口調で言う。

「死にはしますまい。あの童が私の予想通りの存在なら、そして永遠様が選ばれた存在のなら、このような場所で死ぬことはありますまい」

口元に嘲笑とも冷笑とも取れる微笑を浮かべながらアレリアは言った。

しかし視線はあくまで水鏡と、そこに映る少年へ。

水鏡に映る伊爽を見ながら、アレリアは永遠に聞こえないほど小さな声で呟いた。

「見せておくれ、お前さんのその剣を持つ意味を。そして私に認めさせておくれ。私の 私たち皆の想いに、応えられる存在だと……」

…
その老女の呟きは、水鏡に映る少年　伊爽へと向けられた言葉
だった。

一瞬の閃光。

それと同時に轟音が轟き、高温の炎が渦を巻いて通路を駆けた。
ルナファレフの放った火炎呪文が、今にも向かってこようとする
狼に似た魔物を飲み込み、その体毛を、肉を、骨を焼き払う。

それを合図としたかのように、魔法を発動したルナファレフの隣
で伊爽もまた呪文を詠唱して練り上げた魔力を開放し、呪文を発動
させる。

無風の遺跡内に突如陣風が吹き荒れ、研ぎ澄まされた風は鋭利な
刃と化して荒れ狂い、炎に巻かれながらもなお疾走する魔物を的確
に捉えてその身体を切り刻む。

炎と風が乱舞する魔物の群れ目掛け、魔法を放った二人の横をジ
イルバーンとジントニックが駆け抜けた。

それぞれ自分の武器を手にし、火炎と風刃の猛威を逃れた魔物に
狙いを定める。

ジイルバーンの槍が魔物の身体を穿ち、肉を貫いて骨を砕く。
ジントニックもまた高速回転する小剣を投擲し、群れを成す魔物
を斬る。

同瞬、伊爽たちの魔法を逃れ、二人の攻撃からも逃れた魔物が二
人にその鋭い牙と鋭利な爪をもってして襲い掛かる。

二人に無数の魔物が触れようとした刹那、二人の身体を光の幕が
覆い、不可視の壁となって魔物の攻撃を弾き返す。

伊爽とルナファレフの後方で待機していたレイラの防御呪文が、
二人を守ったのだ。

怯んで後退る魔物目掛け、ジイルバーンとジントニックが追撃す
る。

それを見て撤退を決め、振り返って駆け出そうとする魔物たち目掛け、伊爽とルナファレフ、そしてレイラが同時に攻撃呪文を放つ。伊爽の風刃と氷槍が、ルナファレフの火炎の渦と紫電の波が、レイラの水の濁流と光弾の雨が、背を向けた魔物の群れ目掛けて一斉に急襲する。

無数の呪文が魔物を飲み込み爆発する。爆発の余波が衝撃を生み、粉塵を巻き上げ、衝撃が周囲の大気を揺らした。

粉塵が晴れた時、すでにそこには魔物の姿は微塵たりとも残っていないかった。そしてそれらを確認した伊爽たちは誰ともなく大きく息を吐き、警戒の構えを解いて身体から緊張と言う力を抜いた。肩に手を当てて首を回しながら、ジントニックは誰にともなく言う。

「これで何回目だよ、奴らと出くわしたの？」

「数えておらんのかこの盗人が。すでに十六回だ」

ジントニックの言葉に即座に言葉を返すジルバーン。数えていたらしい。随分律義なことだ。

「もうそんなに魔物と戦ってたかしら？ 凄いわねえ」

にこやかに呟くルナファレフの言葉を聞きながら、レイラはうんざりしたようにうな垂れて小さく呟いた。

「……疲れる」

「同感」

そんなレイラの言葉に伊爽は苦笑で答えながら手にする剣を鞘に収め、あらためて周囲の壁や床を見た。

やはりと言うべきか、当然と言うべきか。此処にもそれが刻まれていて当然と訴えるように呪文言語が刻み記されていた。それらの量はおくに進むにつれて少しずつ多くなっていき、すでにこの辺り一帯の床や壁、天井全てが、無数の呪文言語で埋め尽くされている。無意識に伊爽の双眸が鋭くなり、それらの呪文言語を見据えていた。

伊爽の目に映るそれらの呪文言語の配列は、かなりの高位魔法を

発動させる物と見て間違いない。

しかもこれは儀式型。普通の魔法を発動させるための呪文とは異なる、広範囲に渡って影響を及ぼすように設定されているもの。呪文言語の配列が異常なまでに緻密でそれでいって無駄がない。

何故それほどの呪文が、この遺跡に刻み込まれているのか。伊爽にはそれが不思議でなかった。

……朽ちることなく我らは詠う。謡う。謳う。栄えしあの頃忘れまいと。

誘^{いよせ}われるは颯々^{しやうしやう}の声。導かれるは血を継ぐ者たち。迷い込むのは非道の愚者たち。

全ては我らが王の意のままに。王の意に従うが従者の務め。しかして時の屈辱、失う悲しみ、奪われ嘆く苦痛は拭い難し。綴られる詩は叙事であり、失われたのは我らの故郷。

彼の白き騎士は許すまじ。

あの黒き騎士は今何処に。

此処は彼の黒き騎士を向かえる場所。

血を継ぐ者は奥に、奥に、奥に進む。道はおのずと開かれて、奥にあるのは千の剣。

千の剣は貴方を待ち望む。

千の剣を討てし時、皆々貴方を黒き騎士と認める。

待ち望む。待ち望む。待ち望む。

貴方が参られるのを待ち望む。

我らは血を継ぐ者たち。貴方を慕い参られるのを待ち焦がれる、同じ郷の忘れられ人……

そんな一文が目に残り、伊爽は思わず立ち止まる。

呪文言語で刻み記されている、詠唱とはまた一つ異なる、何かの歌がそこにはあった。

彼の白き騎士。

あの黒き騎士。

伊爽は首を傾いでその言葉を思い起こそうと記憶を探る。そしてはたと気づいて腰の鞆から一冊の本を取り出した。

かなり古そう本。その表紙に記されている題は『交響想歌』。著者はエンドリスム・イヴ・ノクターナルス。約三千年以上昔に、その著者が書いた作品だ。

伊爽はその本の項を開き、ある項に辿り着いてそこに記されている章節に目を通した。

ファンタズマゴリア

それは遙か古の時代に存在したとされる悠久の王国。
しかしてその栄光、一夜にて絶える。

双子の騎士　私欲に走る白き騎士は、暴徒を従え白き魔剣を掲げた。

双子の騎士　忠義に篤き黒き騎士は、国兵を従え黒き神剣を振るう。

己の国の、秘められし力を鑑みし国主は、
愛姫を贄として、御国を現世から幽世へと封ずる。

その国の名はファンタズマゴリア。

永劫の時を彷徨い続ける、幻の都なり

その文面を読んで、伊爽は沈痛な面持ちで思考を廻らせた。

白き騎士と、黒き騎士。

失われたのは我らの故郷。

同じ郷の忘れられ人。

一夜にして絶えた王国。

そして……ファンタズマゴリア。

全ては偶然なのだろうか。それとも何者の作為的行為によって成り立った現状なのか。それとも、運命とやらがそう定めたのか。

「イサ、どうかしたのか？」

呼び掛けられて我に返り、伊爽は声を掛けてきたジイルバーンに目を向けた。険しい表情で考えている伊爽を不審に思ったのか、彼は振り返って伊爽を見ていた。

伊爽は慌てた様子でかぶりを振り、

「何でもないです。ちよつと、私用の考えごとで……」

「……そうか……なら、いい」

何処か腑に落ちない様子のジイルバーンだが、すぐに気を取り直して前を歩き始めた。

伊爽はその様子を見ながら手にしていた本を鞆にしまい、その後に行く。

外套を引っ張られ、伊爽側にいるレイラに目を向けた。彼女はまたもや心配するように首を傾げた。伊爽はレイラに「大丈夫」と小声で伝えながら、拭いきれない不安と疑問を胸中に抱いたまま、遺跡の奥へと向かって歩みを続けた。

その後も幾度が魔物たちと交戦し、幾度目かの休息を終えて歩いた先に存在したのは、今まで訪れた遺跡の中でも一際大きい広さを誇る広間だった。

いや、広間というよりも、広場とか闘技場とか、そういつた言葉で表現するのが適していると思えるほど、その広間は広大だった。天井もかなり高く、下手すれば小さな山程度の標高と渡り合えるのではないかという錯覚さえ覚えてしまう。

そんな想定外の広さを持った広間に足を踏み入れた伊爽たちは、暫しその場でそのあまりの広さに驚いて言葉を失ったように広間を見回していた。

そんな中で、伊爽の目を一際引いたのが、この広大な広さを持つ広間の壁だった。床に描かれている無数の呪文言語も気にはなかったが、伊爽の危機本能を刺激したのは、その呪文言語よりも壁に存在

する人一人くらいが入れそうな窪み　その中に佇んでいる、無数の人形だった。

成人男性程度の全長を持つ、人型の人形。

騎士か兵士を模したように鎧に身を包んだ人形は、皆一様に剣を両手で持ち、胸の前で切っ先を天目掛けて悠然と携えていた。

一見ただの騎士を模した人形にも見えるが、伊爽にはその人形が妙な不信感を抱いた。

騎士や兵士の鎧とは基本的に鉄で造られるため、銀灰色に近い色をしているのが主だ。

だが、この人形が着込んでいる鎧は、兜から具足まで全てが黒一色で統一されていた。

（黒き騎士……か……。）

本に記されている忠義に篤い黒き騎士。それをモデルとしているのかどうかは不明だが、その黒き騎士という言葉が妙に引く掛かりを覚える。

あの文面に記されている黒き騎士が、騎士団か何かなのなら此処に並ぶ人形にも特に不信感を覚えることもなかっただろう。

だが、あの叙事詩に記されている黒き騎士は双子の騎士の片割れを意味している。

断じて此処に存在する無数の騎士兵を意味する言葉ではない。

なら、この無数の黒い鎧を着込んだ人形は何か。

そこでふと思ひ出す。

血を継ぐ者は奥に、奥に、奥に、奥に進む。道はおのずと開かれて、奥にあるのは千の剣。

千の剣は貴方を待ち望む。

千の剣を討てし時、皆々貴方を黒き騎士と認める。

そんな言葉が、伊爽しか知らない呪文言語で先ほど歩いた通路に刻まれていたはずだ。

あれは果たしてどういう意味か。

伊爽の思考は刹那の内に解答を見出そうとしたが、自分を呼ぶ声でその思考は中断を余儀なくされた。

「おーらイサ、何ボーっとしてんだよ？」

広間の中央目掛けて歩き出す四人の中で、ジントニックが歩みを止めて振り返り、イサに声を掛けたのだ。

「……ああ、ゴメン」

伊爽はすぐに謝って彼の後を駆け足で追い、すぐに四人に追いついて彼らに続く。

目指しているのは、どうやら広間の中央に鎮座している台座のようだ。

此処からすでに、その台座の上に乗る水晶が見て取れた。

後はあれを持ってこの遺跡から出て、アシュミエの街に帰ればいい。

それだけのことはずなのに、伊爽はどうも簡単に帰れる気がしなく、先程よりなおも強くなった不信感に押し潰されないように自分を奮い立たせた。

水鏡に映る伊爽たちを見て、アレリアは不敵な笑みを浮かべた。

「来おったな、童」

傍らに立つ永遠は、その呟きの意味が分からず首を傾げた。

それと同時に、アレリアの口が細く何かを呟いた。彼女は己の握り締めている手の人差し指と中指だけを立て、虚空をその指で切る。

この老女は何をしようとしているのだろう。永遠はその老女の変に嫌なものを覚えた。

険しい表情がその顔には浮かんでおり、真剣な表情で水鏡を見る彼女の瞳は、永遠に一瞬だが畏怖を覚えさせた。

水鏡の向こうで、伊爽たちが台座に辿り着いてあれこれ話し合っ

ているのが見える。

暫しの話し合いの後、ジルバーンが水晶に手を伸ばしたのが映る。だが、一瞬の困惑の後彼はすぐに水晶から手を離し、伊爽たちに何かを話している。

どうやら水晶が台座から取れないらしい。彼らはしばらくその場で首を捻った後、順番に水晶へと手を伸ばしていった。

ジントニク、ルナファレフ、レイラと水晶に手を伸ばして引つ張ってみるが、水晶はびくともせず台座の上に鎮座したままだった。次いで伊爽の番が訪れた。彼は水晶をしばらく凝視した後、おもむろに、そして慎重に水晶へと手を伸ばし、その手を水晶へ触れた。その時だった。アレリアが冷淡と取れるほど低い声音で言葉を発したのは。

だが、それは永遠の知りえる言語ではまずありえない言葉だった。一体何を言っているのか理解できず、永遠はそんな何処の言葉とも知れない言語を口ずさむアレリアに恐怖した。

アレリアはその間も言葉を紡ぎ続け、指を連続で動かし続ける。

やがて言葉が紡がれるのが終わり、アレリアの組まれた二本の指が眼前で構えられる。

そして彼女は、永遠は恐怖に震えているのを横目で一瞬見、先ほどまでの優しい笑みをほんの僅かの間表情に浮かべた。

しかしそれはすぐに一変し、またも険しい表情を作り上げた。

そしてその口が動く。

開かれた口から紡がれた言葉は、永遠の知る言語だった。その言語で、アレリアは告げた。

「《眠れし千の剣。

目覚めその剣を掲げよ。

千の剣を振るえ。

そして彼の騎士の血を継ぐ者に、千剣の試練を与えよ》」

紡がれた言葉は、嘗て永遠とアレリアの故郷の人間が用いた魔法を凌駕する術法　魔術に用いられた言葉だった。

同瞬

水鏡の向こうで、何かが起きた。

伊爽が水晶に手を触れたのと、水晶から発せられた光が伊爽の身体を駆け抜けたのは同時だった。

刹那の内に光が伊爽の全身を駆け抜け掻き消える。

皆の驚愕の視線を受けながら、伊爽は目を剥いて思わず自分の身体を見回して確かめる。だが何処にも異常は見られない。

異常は伊爽ではなく、遺跡全体に起きたのだ。

一瞬の静寂の後、遺跡全体が震え出す。同時に水晶が禍々しい光を発し、その光は水晶を中心に床を駆け抜け、壁を天井をとその光が侵蝕していく。

皆が突如変化を起こした遺跡の様子に警戒の体制を取る中、伊爽は床に描かれた呪文言語羅列が生み出す方陣を見て、驚愕の声を発した。

「魔術方陣！？ まさか……でも、間違いない」

伊爽の誰に言うでもなく叫んだ声に、ジルバーンとレイラが目を剥き、ルナファレフが思わず怒号した。

「あり得ないわ！ 魔術は私の生まれた時代に滅んだ最古の秘術！？ そんなもの扱える人間なんているわけない！ この方陣は術者がいて始めて発動するものよ！」

その通りだ。魔術方陣は術者なくして発動するような代物ではない。だが、現に足元に存在しているのは魔術方陣だ。

じゃあ……誰がこの術を発動させた？

疑問が脳裏を過ぎり、すぐに思い当たる人物が脳裏に描かれる。

「アレリア……あの占い師だ！ あの人はファンタズマゴリアの民！ だったら説明もつく。五千年前に失われたとされている王国の民なら、魔術を知っていても可笑しくない。魔術は元々ファンタズマゴリアで生まれた技術だし……」

「だがそれは五千年前の話だろう？　それほど昔の術を、現代に生きる人間が完璧に継承しているとは思えんぞ！」

ジルバーンの言う事もっともだった。

だが、あの老女は自分の持つ剣を見て何かを知っているような反応を見せた。

それに何より、この遺跡はファンタズマゴリアと関係がありすぎる。

遺跡に刻まれている言葉の一部。

そこに標されていた黒き騎士と白き騎士。

失われた王国と言う言葉。

そしてファンタズマゴリアで生み出された魔術が用いられている遺跡。

あの老女は、恐らくこうなることを知っていたのだ。自分が水晶に触ればこうなるということ。もしかすれば、この魔術方陣を發動させたのはあの老女なのかもしれない。

だが所詮は推測の域。それを立証する証拠は何処にもない。

「イサ……」

緊張した面持ちでレイラが伊爽を呼ぶ。伊爽は無言で頷きルナファレフを見た。

ルナファレフも気づいている。それが見て分かるほど、ルナファレフの表情は険しいものだった。

「おいおい……　なんか可笑しくないか、この部屋……」

ジントニツクが二本の小剣を手に警戒している。魔素を感じるこのできない彼でさえ、この部屋の異常性に気付いたのだ。

「イサ……　まさか……」

ジルバーンが槍を構えながら、伊爽に目を向け確認するように言葉を濁した。伊爽は冷や汗を一筋流しながら剣の柄を？み頷いて口を開いた。

「はい……この部屋全体に……急速に魔素が集まっています……考えたくないほど莫大な量が……」

魔法使いであるものが視認できる大気中の魔素。

その濃度が異常ともいえる勢いでこの部屋全体に満ち始めている。その量は、一般の魔法使いが見れば恐怖のあまりその場で失神するのではないか思えるほどであり、普通の魔法使いなどより遙かに膨大な量の魔素を練り上げて魔力を生み出せる、この一行の魔法使い三人でさえ畏怖の念を覚えてしまうほど、強大で莫大な量だ。

それは、国一つ滅ぼすのさえ容易いと思えるほどに多い。

その集められた魔素は水晶に集まり、その水晶は集めた魔素を魔力へと還元する。

収縮する魔力は渦を巻き、それは普通の人間でさえ視認できるほど強大な力を生み、幾つもの色彩を纏い光の奔流となって空気を震わせ、見るもの全てを威圧する。

そうして生まれた光の渦もまた、少しずつ水晶の中に納まっていく。集めた魔力を逃すまいと、水晶はその存在を禍々しく主張しながらそのうちに魔力を収め

目を覆いたくなるほどの強烈な真紅の光が辺りを飲み込んだ。

「レイラっ!!」

とつさに伊爽は自身の最も信頼する少女の名を叫んだ。発せられた光に本能を感じた生命の危機。解き放たれた魔力はそれこそ国を容易く滅ぼすことができる量。

なら、それが開放された時の余波は一体どれほどの衝撃波を生み出すのか予想がつかない。

伊爽の叫び声にレイラは即座に反応を見せた。伊爽が瞬間的に魔力を練り上げるのとはほぼ同時に、レイラも魔力を練り上げる。

一瞬の内に魔力を練り、同時に展開する魔法障壁。

不可視の壁が二重に展開され、襲い掛かる衝撃波から全員を守るように衝撃波を阻む。

そこに更なる障壁が展開される。

見ればルナファレフが不敵且つ妖艶な笑みを浮かべながら、伊爽とレイラを交互に見ていた。

「練った魔力は二人よりも遥かに多いから、安心して」

どうやらルナファレフもまた、伊爽の叫び声の意味を理解したのだろう。伊爽とレイラが同時に魔力を練ったのに合わせて、彼女自身も魔力を練り、伊爽たちよりもより多く魔力を練り上げて一寸遅れで障壁を展開したらしい。

（さすがは魔女……といったところかな？）

ルナファレフの笑みに伊爽はそう思いながら微笑を返した。だがその表情に安堵の色は微塵もない。

伊爽の中に生じた不安は微塵も掻き消えることがない。例えこの衝撃波を凌ぎ切っても、まだ何かあるのだと伊爽の中の何かが訴えるのだ。

そして、それはすぐに現実のものとなった。

魔力の衝撃波が止んですぐ伊爽たちを襲ったのは、遺跡全体を揺るがす震動だった。

そして、それが地震か何かだったら一体伊爽たちにとってどれほど幸福なことだっただろうか。

伊爽たちを襲った震動は地震ではない。水晶から開放された魔力に反応・共鳴し、遺跡内の何かが起動したことによって生じたもの。伊爽は反射的に周囲の壁に目を向けながら、先ほど魔法障壁を発動した際に手を放した、腰に帯びる剣へと再び手を伸ばした。

違和感は先程より遥かに大きい。
否。

違和感などで済まされるものではない。自分の中に生まれた感情。それは間違いなく『恐怖』であり、『畏怖』だった。

柄を握る手に力がこもる。

全員がそれを感じ取ったのかは分からない。だが、伊爽だけではなく、他の皆もその視線をおのずと周囲の壁に向けていた。

そこに存在する圧倒的威圧感。

そして、それらは存在を主張するかのように、その壁の奥に存在する威圧感は動き出した。

漆黒に染め上げられた騎士兵の鎧を纏った人形。それらは一体一体壁から飛び降りて床に華麗に着地を決め、手にする剣を天井に翳すように突き上げる。

それにくるように一体、また一体と、壁に存在する窪みに納められていた騎士兵は次々と動き出し、この広い広間にその存在を出現させる。

一が二となり、二が四となり、四が八になり、八が十六になり、十六が三十二となり、三十二が六十四へと、六十四が百二十八へと倍々ゲームの果てに、その黒い鎧に身を包んだ人形騎士は、その数を千へと至らせた。

血を継ぐ者は奥に、奥に、奥に、奥に進む。道はおのずと開かれて、奥にあるのは千の剣。

千の剣は貴方を待ち望む。

千の剣を討てし時、皆々貴方を黒き騎士と認める。

あの言葉を思い出し、伊爽は独りごちる。

「千の剣は貴方を待ち望む……か。こっちは望んでもいないのに」「何を言っている？ イサ」

地震の何気ない呟きに耳を傾けていたらしいジイルバーンの問いかけに、伊爽はかぶりを振って見せる。

「いえ、何でもありません。こっちの話ですよ」

答え、伊爽は剣を鞘から抜き放って正眼に構える。

「恐らく千体います……突破は恐らく無理です」

「じゃあ何か？ こいつら全部蹴散らさないと俺らはお陀仏かよ！」

「そうなるわねえ。さ・い・あ・く」

ジントニクの怒りの声に、ルナファレフはおどけたように呟いた。だが、その表情には一片の余裕もなく、ただただ眼前に佇む無

数の敵をその蒼氷色の瞳で見据えていた。

鉄爪をつけていない右腕にはいつでも魔法が放てるように魔力が練り上げられている。頼もしいことだ。

ちらりとレイラに視線を向けると、少女は毅然とした態度で目を瞑り、両手を天目掛けて突き上げている。その先はすでに強大な量の魔力が練り上げられている。

「仕方あるまい……どちらにしろ、この水晶を得て帰らねば何の意味もなさん。こいつらを片付けてからゆつくりと……」

「ゆつくりと頂くか？ おっさん結構盗人ばい台詞吐くんだな」

「たわけたことを抜かすなこの盗人が！ 『持ち帰る』だ『持ち帰る』！」

ギイルバーンとジントニックはこんな状況でも変わらない。だが、二人が古代遺産の魔法やりと魔法小剣を手にしているということは、やる気十分ということだ。

そんな仲間の様子を見て、伊爽は小さく微笑した。

（皆やる気だね。ならボクだってここで臆し逃げの選択をして何てられないな）

目を閉じて覚悟を決める。

構えていた正眼を正し、空いている左手の平に収縮した魔素を練り上げ魔力を生み出す。

静かに詠唱を唱え、伊爽は皆に合図を伝えるかのように魔力を開放し、魔法を放つ。

翳された手の平の先に描かれる魔法円。そこから解き放たれる凍結呪文。

渦を巻きながら疾る蒼い氷風。無数の氷塊を携えながら轟風が吹き荒れ、伊爽の正面に立つ十数の騎士人形が一瞬で凍りに飲み込まれて凍りつく。

同瞬、レイラとルナファレフも魔力を解き放ち、雷撃の嵐と光の雨を騎士人形目掛けて叩き込む。

ギイルバーンも槍を構え、ジントニックも高速回転させた小剣を

投擲する。

たかが千。守護者ガーディアン気取りの人形を、千体蹴散らせばいいだけだ。

伊爽は新たに魔力を練り上げながら、黒い剣を手に千の騎士人形の中に飛び込んだ。

その時、伊爽の握る剣の塚にはめ込まれている真紅の石が、一瞬だけ光を放った。

お前は真に我の意思を継ぐに相応しいか。
全てはお前の心次第。我を手にする者よ。

05：ネ口を継ぐ者

05 ネ口を継ぐ者

水鏡の向こうで繰り広げられる、五対千の乱戦。

とても善戦とはいえない戦いがそこでは繰り広げられていた。

伊爽が、レイラが、ジイルバーンが、ルナファレフが、ジントニツクが、自身の全力を持って戦いに挑んでいる。

身体のあちらこちらに怪我を負いながら、人海戦術で迫ってくる騎士姿の人形を相手に各々がそれぞれ最善の行動を選択して動く。

レイラを水晶のすぐ側に立たせ、そこを中心としたように伊爽たちが四方に散り、向かい来る騎士人形を一体一体確実に倒していく。レイラの魔力が解き放たれ、四方目掛けて光弾が雨の如く荒れ狂い、それを受けて騎士人形が体制を崩す。

そしてそこに各自がそれぞれ攻撃を仕掛ける。

伊爽が剣に魔力を込め、それを走りながら右脇に構え、飛び上がるように剣を振り上げる。

伊爽独自の剣に魔力を込めて魔法と剣技を組み合わせた技法

魔法剣。

その魔法剣のうちの一つ

凍氷剣・凍波^{いてなみ}。

剣全体に込められていた魔力が開放され、氷塊を纏わせた冷風を生み出し、振り上げられた時に生じた闘気の刃と共に虚空を駆ける。

冷風を浴び、全身を凍りつかせる騎士人形が闘気の刃を受けて次々と大破する。

そこに伊爽は追い討ちするように左手の平に練り上げていた魔力を解き放ち、新たな魔法を上空から打ち放つ。

生まれたのは暴風雨にも匹敵する突風。無数の風塵を纏った嵐が冷気と斬撃波で斃し損ねた騎士人形を襲い、その身体に無数の斬傷を刻む。

ジルバーンは愛用の槍を頭上で高速回転させ、その回転からなる遠心力を上乗せして大振りに槍を薙いだ。

光弾の雨を受けて動きを止めていた騎士人形がその一撃だけで胴体を両断され、無造作に床に受け止められてその場で動きを止める。

一撃を終えたジルバーンに対して打って出る無数の人形。ジルバーンはそれに即座に反応し、手にする槍を振り翳す。

槍の穂先から突如水の濁流が生まれ、ジルバーンに刃を向けた騎士人形を飲み込む。それを見てジルバーンは突き出していた槍を今度は床に突きつける。

すると槍が突き刺された場所から前方目掛けて無数の土槍が地面から姿を現し、水に飲まれていた騎士人形の身体を貫いたのだ。

ルナファレフは手に備えている鉄爪で空を薙ぐ。

大気を切り裂いた五指の斬撃が空間を歪ませ、意思のない人形さえその異常性を忌避し一步後退る。

それを見て、魔女は口元ににやりと嫌な笑みを浮かべる。

鉄爪を装備した左手が一瞬怪しく光る。

同瞬 切り裂かれた虚空が紫電を迸らせる。そして広がる空間の歪み。

そしてそれに危機感を覚えたのか、騎士人形が剣を振り被ってルナファレフに迫る。

「残念」

何処か緊張感の抜けた魔女の呟き。

瞬間 五つに裂かれた空間から生じた衝撃波が、緋色の雷を纏い斬撃を生み出し、眼前に無数に立ちはだかる騎士人形を五等分に切り裂く。

これがもし人間だったら、世にも恐ろしい地獄絵図が完成していたと見るものに知らしめるかのように、そこには五つに切り裂かれたのち、放たれた斬撃の余波で生じた衝撃で原形を留めていない。

それは正に地獄絵図。

しかしその情景を生み出したルナファレフはその有様に目をくれ

ているいとまはない。

その蒼氷色の双眸は、その積み上げられた破碎人形の上を踏み越えて迫ってくる新たな人形へと向けられている。

「モテるつても、ホント辛いわねえ」

あくまでやんわりと、でも臆することも怯むことも、そしてあくまで手を抜く気はないと明確に意思表示するように、彼女の両手には新たな魔力が練られる。

「うおおおお……らっ！」

そのすぐ横で、ジントニツクが迫る無数の騎士人形を投擲する小剣で討ち取りながら得意の徒手空拳で次々と地に伏させ、そこに投擲し高速で回転している小剣とはまた異なる小剣でこういった魔力で動く人形系の弱点である核を的確に破壊する。

もう何体目かしない人形の核を破壊したジントニツクの背後に迫る、騎士人形の剣。

ジントニツクはそれに目を向けることなくその場にしゃがみ込み、逆上がりする要領でその剣を弾き飛ばす。

そうして一瞬動きを止める騎士人形目掛け、腕を軸に回転して連続で蹴りを入れ、そして止めと言わんばかりに腕のバネで飛び上がり、両足で体重の乗った蹴りを打ち出し、その騎士人形を蹴り飛ばしてその背後で群れる無数の人形へと叩き込んだ。

仲間の人形に押し倒され、まるで将棋倒しのように騎士人形が次々とその場に倒れる。

その倒れた人形目掛け、ジントニツクは戻ってきた二本の小剣をキャッチ。そしてそれをすぐさま回転させて倒れている人形目掛けで無造作に叩き込む。

高速で回転する二つに刃が空気を切り裂きながら人形を襲い、それぞれの核を刈り取っていく。

見ている者を唖然とさせるには十分すぎる連携だ。それぞれが自身の役割を完全に熟知している。

レイラの魔法を合図にそれぞれはそれぞれの最善の行動を取って

向かい来る騎士人形を撃激する。それらの動きには無駄がなく、それでいって効率的。どれだけの時を共にすればこれほどの動きが出来るのだろうか？と永遠は思わず首を傾げたくなる。

だが、それで後どれだけ持つだろうか。

口にしたわけでもないその問いに、アレリアはかぶりを振りながら答えた。

「あれではそう長くは持ちますまい……やはり期待ハズレ……というところか」

現在の状況を生み出した当人でありながら、まったく悪びれた様子のない老女の言葉に、永遠は激昂して怒号を上げかけ、それを寸でのところで飲み込んだ。

叫んだところで彼女に自分の声が聞こえないことくらい、永遠はすでに知っている。

だから諦めて水鏡に目を向ける。

彼ら五人の戦況は少しずつ不利な方向に傾いていく。

このままでは、間違いなく彼らは死ぬだろう。

それは即ち、伊爽が死ぬという事。

それを考えただけで、まるで魂を悪魔の手に？まれたかのように、心臓を何者かに握られたような底知れぬ恐怖を覚えた。

その時永遠は、頭で考えるよりも早く、自らの意思で？時の狭間？に歩みを向ける。

此処にいてはいけない。

自分のいなければいけない場所はここではない。

ただ彼の元へ。

そう自身に言葉を掛け、永遠は？時の狭間？にその身を投じた。

「はあっ！」

呼吸と共に伊爽は手にする件を振るった。上段から振り下ろされた剣の纏う魔力が爆ぜ、同時に剣身から開放されるのは闇色の炎。

剣を覆うように放たれる炎が伊爽の斬撃と共に打ち出される。

放たれる衝撃波と共に闇の炎が騎士人形を飲み込む。

騎士兵鎧を焼き払い、その中に存在する本体をも焼き払う炎が唸り、剣と鎧を溶解して無に還す。

眼前に立ちはだかっていた騎士人形を一掃し、伊爽はその場で膝を折ってその場にしゃがみ込む。

肩を上下させ、荒いと息を吐き出す。

全身を蝕む疲労という名の枷。それが腕や足の動きを、そして身体全体の動きを阻害し、戦い始めた時と比べれば明確なほど伊爽の動きは鈍っている。

剣を支えにしながら大きく息を吐き出し、自分の身体に叱咤という鞭を打って立ち上がる。

だが身体が思うようにゆうことを聞かず、その事に対して伊爽は苛立ちを覚えずにはいられなかった。

そんな一瞬の隙を見せた伊爽に対して、騎士人形が容赦ない襲撃を見舞う。

手にする盾を眼前に構え、そのまま床を蹴って伊爽目掛けて疾走。空を切って失踪した騎士人形の一体が伊爽を突き飛ばし、不意を疲れた伊爽は防御も回避も出来ずがままに吹き飛ばされる。

「ぐあっ」

体を襲った衝撃に小さな呻き声を上げながら、伊爽は空中で回転し、体勢を立て直しながら左手に魔力を練り上げ開放する。

伊爽の手の平から打ち出される疾風の乱刃が追撃しようと剣を構えていた騎士人形を襲い、その身体を千々に切り刻む。

それを見据えながら伊爽は床に着地するが、疲労が溜まる身体は思うように動いてくれず、着地の際にバランスを崩し、その場で膝を突いた。

（くそっ……）

百は切った。百は吹き飛ばした。少なくとも二〇〇の敵は剣と魔力を行使して退けただろう。

仲間たちも紛争し、少なくとも二〇〇は斃している筈。

だが、それでもまだ四〇〇。

残りはおよそ六〇〇。

単純に計算して出した数字。その数字はあまりにも大きく感じた。

「万事休す……かな……？」

自嘲にも程遠い、諦めに近い呟きが口から零れた。

今、伊爽は敵の真っ只中にいる。

他の皆はというと、すでに限界がきたしていた。

ジルバーンとジントニツクは深手を負い、今現在レイラの治癒魔法で傷を塞いでいる。ルナファレフはその三人を護るように決壊を張り、無数の騎士人形を必死に抑えている状態だ。

その結界とてあとどれだけの時間保てるだろうか？

レイラもルナファレフもすでに魔力がつきかけていて、いつあの結界が破られるかも分からない。

大層なことを吐いてこの体たらく。自嘲なんてとづくに通り越している。

自身の不甲斐なさと思かさ。そして無力さを思い知らされた今、襲い来るのは抗い難い絶望か。

握る剣に力が籠もる。残り七〇〇も存在する騎士人形。黒い鎧を身に纏い、感情を持たず疲れを知らず、ただ目の前にいる自分たち（敵）を排除しようと隊列を組んでザッザッザと足並みをそろえて歩み、剣を構えて襲い来る質も量も半端ではない強敵。

一体一体ならそれほど脅威でもないが、その数が千にも上るとあまりにも凶悪な存在へと変化する。

「ホント、人海戦術は怖いな」

吐き捨てながら伊爽は剣を手に立ち上がり、無数の騎士人形の波目掛けて飛び込む。魔力を攻撃ではなく自身の身体能力の強化に回す。

そうして身体の疲労を誤魔化し、眼前の敵目掛けて剣を薙ぎ払う。闘気を纏った刃から放たれる斬撃波が最前列で隊列を組む騎士人

形を襲い、その身体を闘気の刃で押し潰す。

衝撃波による爆発が騎士人形を巻き込んで床を砕き、大量の粉塵を吹き上げる。

一瞬の静止。伊爽は余念なく剣を構える。

粉塵の間隙を縫って粉塵を突き抜けてくる四体の騎士人形。

伊爽は地を蹴って飛び出し、その騎士人形を瞬時に切り裂く。

振り上げられた剣を紙一重で躲し、その横を抜ける間に横一字に剣を薙ぎ、その背後から飛び出してきた人形を蹴りで受け止め、構えられた盾ごと一刀の下に両断し、左右から挟み撃ちするように刺突を放ってくる人形に対し、闘気を纏わせた剣を左右に振りその衝撃で吹き飛ばす。

ほんの刹那の内に繰り広げられた戦闘。一瞬の安堵感が伊爽を包む。

そしてそれが隙となり、代償が伊爽に襲い掛かる。

まだ晴れぬ粉塵の間から姿を現す無数の騎士人形が一斉に伊爽を襲う。

驚愕に顔を歪めながら剣を振り、最初に襲い掛かってきた人形を迎撃するが、津波のように襲い掛かる騎士人形を受け止めきれず、伊爽はその波に飲まれた。

「くっ！」

一瞬の出来事だった。

人形の波に飲まれた伊爽を襲う、無数の騎士人形の攻撃。とつさの判断で魔力を行使し風の防壁を展開したが、それらは容易く突破されて盾と錆びた剣の打撃が四方八方から伊爽を襲った。

全身を激痛が駆け巡り、一刹那の内にして意識は混濁する。

悲鳴を上げることなく、伊爽はその場に崩れ落ちた。

「イサっ！」

崩れ落ちた伊爽を見て、ジントニツクは傷の痛みも忘れて叫んだ。
ジントニツクの叫びに反応し、レイラが驚愕の表情で治癒魔法を
かけていたジイルバーンから視線を伊爽のいる方向に向ける。

痛みのせいで脂汗の伝う顔に渋面な表情を浮かべながら、ジイル
バーンも二人の視線を追って視線を向けた。

「やはり……あいつでもこの数は無理か……」

「それは当然ねえ。だって千はくだらない数よ？ それを一人で相
手にするなんて、それこそ一騎当千という言葉を実行するに等しい。
それだけの實力を持つ人間なんて、この世界に果たしてどれ程いる
かしら？」

ジイルバーンの呟きに対し、ルナファレフは結界を張ることに専
念しながらそんなことを呟いた。その表情は陰しく、今も結界を維
持し続けていることがどれ程困難なことなのかを明確に示している。
その表情を見て、ジイルバーンは歯をかみ締める。

（こいつもかなりの間結界を維持している……その前にかかなりの魔
力を使っているんだ。疲労しないわけがないか……）

現状は最悪としか言いようがなかった。このメンバーの中で最強
である伊爽でさえついに膝をつき、力なく床に伏したのだ。

ジイルバーンの中で際限なく渦巻く感情は後悔と自身に対する憤
怒と自責の念だった。

（私があのおい師のことをイサ（あいつ）に教えなければ、少なく
ともこんな状況に陥ることはなかったはずだ！）

単なる好奇心だった。あらゆる意味で優れた才能を持つ少年。武
術、魔法、学問、どれをとっても一流といえる才気を持ち、それで
いてその持ちえる才能に過信することなく謙遜し、影で努力を重ね
常に自分を高めようと志す若い少年。

（この少年が何処まで伸びるのか見てみたい）

それがジイルバーンの伊爽に対する第一印象と言ってよかった。
そして見てみたかったが故に、彼にあのおい師のことを教え、旅
に同行するように仕向けたのだ。

だが、そんな事がいつの間にかどうでもよくなっていた自分に気付いたのはここ最近のこと。

気付いた時には彼と行動を共にし、旅をすることに心地良さを覚えていた。

恐らく、それは自分以外の皆もそうなのだろう。伊爽とすでに行動を共にしていたレイラに至っては、彼と行動を共にするのが当たり前といわんばかりに彼のすぐ後ろを歩いてついていていた。

ルナファレフも、ジントニックにしても同じだろう。

彼らを見ていれば分かる。この二人は誰かと行動を共にするという事が向いていない性質の人間だ。自分がそういった性分だからこそ、同じ性分の人間は自然と分かるのだ。

そんな二人でさえ、伊爽と行動を共にする。それは彼と旅をしたという明確な意思表示のようなものだった。

この少年について行くことで、何か手がかりが得られるのではないか？

そう思わせる謎めいた雰囲気。それでいて自分たちの道行きを示してくれるような行動力と何気ない言葉。

興味深い人間だった。あの剣聖とまで謳われる『漆黒』のエッジの孫にして、その相棒である『疾風迅雷』のゲイルの弟子でもある。血筋といい、その人間性といい、歳不相応な落ち着き方といい、全てにおいて伊爽という少年は別核の存在だった。

一見しただけでは何処か自己主張の乏しい錯覚を覚えるような痩躯の少年が備える、異常ともいえる才気とカリスマ。

しかしそれを分かっているなあ、ジルバーンは彼に対して畏怖や恐れといった感情を覚えることはなかった。

あるのは友愛と畏敬。

歳の少し離れた頼れる友人。

それがジルバーンにとっての伊爽だった。

彼の成長を見届けたい。どれほどのことを成し遂げる人間なのかこの目で見極め確かめたい。そう自分に初めて思わせた少年。

それほどの少年を、今こんなことで失いたくはない。
ジルバーンは彼の名を叫ぶ。

脇腹に走る、焼けるような痛みをも無視し、ただ友人の名を叫ぶ。

「イサっ！！」

「イサくんっ！」

「イサアアアア！」

「イサ」

ルナファレフが、ジントニツクが、レイラが叫ぶ。

皆に共通の意思が生まれたのかは分からない。誰もが同じ瞬間に
同じ事を思ったとは思えない。

だが、その時確かに、全員が叫んだのだ。

あの不思議な雰囲気醸す、頼りになる仲間の名を。
失いたくない、大切な仲間の名を。

だからもう一度、全員が叫んだ。

『イサ

っ！！』

全員の声が、その広い広間全体で響き木霊する。

その時だった。

先ほど伊爽が倒れた辺り。

その場所から、突如信じられないほど巨大な量の魔力が立ち上つ
たのは。

全員が叫んでいたのさえ忘れ、突如現われた視認できるほど濃い
魔力の柱に目を見張る。

騎士人形たちさえ、その場にただ棒立ちになり、突如姿を現した
魔力の柱に目を向けた。

そしてそこには

黒色に染まる剣を悠然と構え、自分を囲むように立ちはだかる無

数の騎士人形を、黒と白に輝く鋭利な刃物のように細めた双眸でそれらを見据える伊爽が立っていた。

遠退く意識の中、伊爽は倒れ伏したまま霞む視界で何気なく探してみた。あの自分のすぐ側に咲く、不思議な一輪の白い花を。

（……さすがに……こんな状況下では……ないかな？）

見つからない花に対してそんな感想を覚えつつ、伊爽は自分の状況を整理する。

全身が思うように動かず、身体に力が入らなかった。どうやら先ほどの集団襲撃は思いのほか自分に痛手を負わせたらしい。やはり錆びていたといってもれっきとした剣だ。頑丈に作られているだろうから、切ることはできなくとも殴ることはできたようだ。

行進を止めた、数えるのが嫌になるほどの騎士人形。それが一樣に伊爽を見下ろす姿は、ある種壯観とも思える光景だった。

それぞれが手にする剣を一齐に構える。その切っ先は皆伊爽に向けられており、止めをさす気であるのが明確だった。

それを見て、伊爽は漠然とした思考で改めて思った。

……ああ、死ぬんだ。

まるで人事であるかのような自分の内心の呟きに、伊爽は声にならない苦笑を漏らした。

死を覚悟し、伊爽は静かに目を伏せ、振り下ろされる刃の痛みを待つ。

その時だった。

人の気配がした。

レイラでもジルバーンでもルナファレフでもジントニックでもない、此処に存在するはずの人間以外の気配。

淡く儚い、まるで夢幻のような危うさを醸す独奏の雰囲気。

それは伊爽にとって覚えのある気配。覚えのありすぎる、姿形も

声も知らぬ、それでも自分がいつも求めているあの気配だ。

伏せた瞼を持ち上げ、伊爽はその気配のする方向に視線を向ける。そこにある気配を求め、そこに咲くはずの花を求め、伊爽の視線は気配を追い

見知らぬ少女と目が合った。

灰銀色の長い髪と、白い法衣に身を包んだ少女。首から下げられている懐中時計。

纏う雰囲気はあまりにも希薄で脆くおぼろげで、あまりにも儚く今にでも消えてしまいそうな錯覚さえ覚えてしまいそんな印象のある少女。

その少女が髪の色よりも少し濃い色の瞳の目尻に涙を浮かべ、倒れ伏す自分目掛けて何かを叫ぶように、訴えているかのように、そんな風に伊爽には見えた。

靄のかかったような自分の意識が晴れ、伊爽はその少女をただ見つめる。

「……君なのか？」

その言葉が声となって口から出たのかは伊爽自身分からない。分かるのはただ一つ。

伊爽の発したその言葉に、少女が一瞬だけ目を剥いたかのように驚いた後、今にもないてしまいそうな表情でただ一度頷いたという事だけ。

君が……そうなのか。

纏う雰囲気。

そして感じるあの気配。

それは間違いなく少女から発されているものだ。

その少女を見つめたまま、伊爽は小さく微笑んだ。

やっと見つけた。

やっと出会えた。

捜し求めていた気配の正体。

それが今、自分の目の先にいるという現実。

そのことに喜びを覚え、そしてなんとも言い難い感情が胸の内に溢れた。

同時に心中に渦巻いた、自分に対する情けなさ、悔恨、無様さ、恰好悪さ。

自分の体たらくを見下げ、伊爽は激しく自分を罵倒した。
情けない。

探し続けていた存在が今、こうして目の前にいるというのに、どうして自分はこんな無様な姿を晒しているのだろうか？

情けない情けない情けない情けない！

無様な姿を晒し、拳句その捜し求め続けた存在に涙を流させ、そしてそれでもなお立ち上がることでできない自分は、一体どれほど愚かで惨めなのだろうか？

伊爽は力の入らない身体をなお叱咤し、無理やりにでも力を込めて動かそうとする。それでも動いてくれない身体に怒りを覚え、屈辱を覚え、奥歯が砕けんばかりに噛み締める。

手に力を込める。

手の先にある黒塗りの剣の柄を強く握り締める。

泣いて欲しくない。涙を零して欲しくない。そんな悲しい顔をしないで欲しくなど、ない。

ただ会いたいという理由ではない。何かがあった。自分の中に、その気配の存在に何かを感じた。

だからこそ、目の前にいるのがあの気配の主だというのなら、それがあの少女だというのなら、泣いて欲しくなど、悲しんで欲しくなどない。

「あ…… ああ…… ああああああああああああああああ
ああああ！？」

自身に対する怒り。自身に対する悔恨。自身に対する激昂。自身に対する殺意。

それら全てをぶちまけるように、伊爽は声の限り叫んだ。

吼えるな、ガキ。

その声がしたのと伊爽が吼えたのは同時。そして刹那、世界が白一色に包まれた。

突然の世界の変化。

そのあまりの突拍子のなさに、伊爽は先ほどまで胸中に抱えていた自身に対する負の感情さえも忘れて、その魔菜食の世界に目を見張った。

コツツ

ブーツが床を叩く音が背後から聞こえ、伊爽は即座に振り返る。

敵かと思って即座に攻撃できる姿勢をとった伊爽だったが、その目の前に現れた存在を見て再び驚愕で目を見開いた。

最早何が何だか分からない。

伊爽の目の前に悠然と立つその存在。その男は、まるで鏡に映った伊爽そのものだった。

だが、同時に全てが異なるといってもよい出で立ちをしていた。

伊爽よりその黒髪は長く、その身に纏うのは黒一色とささやかな銀色で装飾された外套に近い戦闘衣。その外套の下から覗く皮製の軽装鎧と両腕に備えられている黒銀の手甲。膝より下は同じように黒銀の脚甲が備えられている。

伊爽と同じ顔をしていながら、その全身から溢れる英気は万人を魅入らせるのではないかとさえ伊爽が思うほど、その男は自信に溢れている。

黒き騎士。

その言葉が、伊爽の口から自然と零れ落ちた。

それに返されたのは、嘲笑のようにも感じられる矛盾に満ちた柔和な微笑。

「懐かしい名だな。本当に懐かしい。かれこれ五千の年月も前に呼ばれていた名だよ」

伊爽は警戒することも忘れ、その男を呆然と見上げ続ける。

あまりにも壮大で寛大。威風堂々としたその立ち振る舞い。まるでこの世の君臨者なのではないかと勘違いさせられてしまうような威厳と威光。

立っているだけのはずなのに見せ付けるかのような存在感。

その男は、正に異端だった。

ただし、それは決して畏怖の念を覚えるものではなく、絶対ともいえる畏敬の念を覚える異端さだった。

呆然と、そして啞然としたまま頼桁表情をする伊爽を見て、彼は不敵な微笑を浮かべて伊爽を見下す。

「似ているな。ああ似ている。我の若かりし頃そのままのような風貌。まさしく我の血統」

何か言葉を発することはできなかった。何を言っているのか当事者でもない。

いや違う。自然と理解したのだ。

この人の言葉の間に割って入ることは許されない……と。

そんな伊爽を他所に、男は更に言葉をその口で綴る。

しかし今度は今までただ自身を納得させる言葉ではなく、伊爽の目を見てしっかりと伊爽に向かって告げられた。

「我の名を名乗るのを忘れていたな。我が名はネ口。お前の持つ剣だ」

「剣……だって？」

思わず伊爽が聞き返すと、寝ろと名乗った男はまるで芝居をする

かのように片手を伊爽に突き出し、言う。

「然り。我はお前の持つ剣。『交響想歌の鍵^{けん}』の一振り、黒^{ネロ}に宿る意思。それが我だ」

あまりにも突拍子のない話だった。

剣に宿る意思？ そんな事をいわれた所ではいそうですかと納得できるものではない。

いぶかしむように表情を顰める伊爽。しかし、次の瞬間伊爽は何となくその言葉を信じていた。

ネロが見せた寂しげな哀愁を帯びた微笑。

何故かそれが全てを物語っているかのような錯覚を覚え、伊爽は無言でネロの言葉を理解した。

その微笑が意味するものはただ一つ。否定されることを知り、それでもなお言わねばならないという自分の存在と、それでも認めてもらおうと願う自分に対する諦め。

そんなものが宿っているような、寂しそうな微笑。

それを垣間見たから、だから伊爽は何も言わず、ただ静かに一度だけ頷いて見せた。

「なるほど……ただ抜ける、という存在でないだけの事はある」

伊爽の反応にネロは面食らったように一瞬だけ目を剥いたが、すぐに表情を元のものに戻し、一度だけ頷いていた。

「鍵^{けん}にして剣^{けん}、それが『交響想歌の鍵』。我はそれを嘗て所持していた存在。お前のいう黒き騎士だ。だが、今はそんな事はどうでもいい」

ネロはかぶりを振り、見下ろす伊爽に向けて聞いた。

「お前はあの方が見えたのだろう」

それは問い掛けではなく確認。

伊爽は一瞬『あの方』とは誰か分からず首を捻ったが、このタイミングで問われ、思う存在は唯一人しかない。

「あの女の子のことか？」

するとネロは伊爽の言葉に満足したように大様に頷いて見せ、更

に言葉を続ける。

「我はすでに死んでいる存在。故この黒き剣の中に魂だけを宿している。

嘗て我はお前の見た少女に仕えていた。だからこそ、今もなお孤独の世界に囚われるあの方を助けたい。

だが肉体もなく、そして助ける方法をも知らぬ我にはどうしようもない。

だからこそ、お前に頼みたい」

ネロは一步前に出、伊爽に歩み寄る。手が届くであろうその距離に来て、ネロはゆつくりと膝をつき、伊爽に手を差し出し、言った。
「我が血、我が剣を継ぐお前に頼む。我が想い、我が願いをも継ぎ、あの孤独なる方を救う意思を明確にせよ」

一瞬の静寂。

すべての流れが止まり、呼吸も時間さえも止まり、その世界は静まった。

指し伸ばされた手を見て、次いでその手の主であるネロの双眸をじっと見据え、伊爽は口を開く。

「もし、ボクがその意思を継いだら、君は何をする？」

「力を貸してやろう。まだ全てはくれてはやれない。だが、今の状況を打破する力、そしてこの先お前と、お前の仲間たちが生き延びるための力を、我はお前に貸してやる」

まさかここまで明確に答えが返されるとは思わなかった。

継がないつもりなどない。

継がないという意味も答えもない。

問われた当初からあるのは最初から、継いでやるという明確な答えのみ。

あの少女を救え。

一体何から？ とは問わない。

自分はそうしなければいけない。そういう意思が、伊爽の中にはすでに生まれていたのだから。

「ネロ」

目の前に君臨する黒き騎士の名を呼び、伊爽は確固たる意思の宿る瞳をその騎士に向け、刺し伸ばされた手を握り返し、

「継いでやる」

宣告した。

ネロがその答えに一瞬だけ微笑んだ。

転瞬　その世界が爆ぜた。

覗く水鏡の水が大きな波紋を生んだ。

刹那、その水鏡の台座が大きく揺れ動き、次の瞬間には無数の亀裂をその器に走らせた。

「なっ!?!」

驚愕の声を上げるアレリアを他所に、彼女の目の前でその器が甲高い音を響かせその場で破砕した。

器がなくては水鏡は覗けない。

しかし、彼女にとってそれは最早どうでもいいことだった。

今なお眼前で起きた奇劇に驚き、アレリアはその場にしりもちをつくようにして崩れ落ちた。

そして呆然とした表情のまま部屋の天井を見上げ、誰に言うてもなく一人呟く。

「まさか……継いだというのか……黒き騎士様　ネロ様を」

アレリアは信じられないといった表情で呆然とし、諦めたようにかばりを振り、「まいったのお……」と一人呟いた。

「永遠様のほうが、正しかったという事が……」

意識が瞬時に覚醒し、伊爽はあの不可解な世界からこの現実
に意識を戻す。

騎士人形の剣が今にも振り下ろされようとしている。

覚醒した意識が即座にそれに反応し、伊爽は握る剣を振り上げてそれらを弾き飛ばしながら立ち上がり、手にする黒い剣を大振りに薙ぐ。

一瞬の停滞。その一瞬、確かに世界は時を止めた。

『魔力を剣に注げ』

その刹那に木霊した誰かの声。伊爽は即座に自分の手にする剣に目を向ける。

「ネロ？」

『確認はいい。それよりも早く剣に魔力を注げ』

剣から脳に直接響く声に伊爽は小さく首肯し、残りの魔力を全て手にする黒の剣に注ぎ込む。

手を通し、柄から剣身全体へと魔力が走る。

『随分と少量。かなりの魔力を消費しているようだな』

「仕方ないだろう。状況が状況なんだから」

自身の今の様子が他者から見れば極めて滑稽だということを自覚しつつ、伊爽は愚痴を零す。

すると脳裏に響く小さな苦笑。

『まあいい。この魔力、倍にしてお前に送る。お前はあの送られた魔力を更に倍にし、我に送れ』

一瞬言われたことの意味が分からず首を捻る伊爽だが、即座に彼の言葉の意味を理解し、「大丈夫かな？」と小さくぼやきつつ、送られてきた魔力を倍にし、剣に注ぐ。

『上々だ。あとはコレを繰り返せ。この戦いが終わるまでやめるな。常にこの累乗循環を絶やすな』

「分かったよ！」

言われるがままに、伊爽は自身の魔力を送り込み、そして倍にな

って返ってくる魔力を更に倍にして送り返す。

一瞬のうちにして、その行為はいく何十も繰り返される。

気がつけば伊爽の身体には今まで収めたことのないほど膨大な量の魔力が満ちていた。

全身から溢れ出る魔力は伊爽の疲労を奪い、外傷の全てを瞬く間に消し去る。自分の体から漏れ溢れる魔力は視認できるほどその濃度が濃く、周囲を拒むように渦を巻いて小さな嵐と化している。

確信する。今なら勝てる。この眼前の騎士人形が千になろうと二千になろうと五千になろうと万になろうと億になろうとも。今の自分なら決して負けることはない。

今なおその量を増し続ける魔力を特に練り上げることもせず、魔法として確立させることもなく、ただその魔力を解き放つ。

剣を天目掛け突き上げる。刹那、自周囲で渦を巻いていた魔力の密度が増し、転瞬光の本流と化して立ち上り、光の柱と化して衝撃波を生み出す。

ただ単純に魔法として打ち出すよりも強力な、魔力を開放したただけによって生じる余波が生む衝撃。

それが伊爽を取り囲み、今にも襲い掛かろうと構えていた騎士人形を吹き飛ばし、その鎧を砕き粉塵へと変える。

立ち上る光柱。その光は星光よりも煌々と、月影よりも鮮麗に。

魔力の立ち上りで髪が、襟巻きが、外套がはためく。

剣身に目を向け、そこに写る自分の顔を伊爽は何気なく覗き込み、その双眸をしばたかせた。

瞳の色が……右が黒く……左が白く……光っている？

剣身を鏡面にし映し出された自分の双眸が、普段の色とは明確に色を変えていた。左右の色彩が変化し、右目は黒い輝きを、左目は白い輝きを纏い、その異様な存在を主張している。

「この有り余ってしまう魔力のせいか……」

おそらくそうなのだろうと自己完結する伊爽。深くは考えない。そうでも考えない限り、この目の異常性の理由が分からない。だ

が、目の色が変わっているからなんだという。今更氣にすることでもない。自分の周囲で渦を巻く魔力を鑑みれば、この程度気にするだけ無駄な気さえするのだから。

そんな事を気にしている暇があるのなら、他にすべきことをするべきだ。

突き上げた剣をそのまま水平に、腕を伸ばして剣を突きつけるように構える。

「まずは、お前らを倒すこと。それが今のボクのすべきこと」

先頭の意味を明確にし、伊爽は宣言する。

刹那反応する数百体の騎士人形。

だが、今の伊爽はそんなものに微塵の恐れも抱かない。先ほどまで感じていた負がうそであるかのように、今の伊爽はとても落ち着いている。

剣を構え、伊爽は意識を集中する。

騎士人形が動いた。正面の一体が床を蹴り、剣を構えて伊爽に進ずる。それに続くように周囲を取り巻いていた騎士人形が一斉に動き出す。

足と床の間に魔力が集中し、魔力が爆発する。たった一歩で普段の最大速度を遥かに凌駕する速度で伊爽は駆け、眼前の騎士人形目掛け剣を突く。そのまま騎士人形の壁を突き破るように、全身に魔力を纏わせ突進する。

魔力が剣先に集中し、渦を巻き、巨大な突撃槍と化したかのように渦を巻く。

魔力の穂先が全てを射抜く。

全てを吹き飛ばすように魔力の剣槍が疾走し、全てを穿ち貫く。たったそれだけの行為で、伊爽目掛けて剣を振るった騎士人形は大破する。

突きの姿勢から今度は身体をこまのように一回転し、漏れ溢れる魔力を剣の軌跡に乗せる。

自周囲で弧を描く斬撃の軌跡。纏う魔力は軌跡を追うようにして

走り、周囲にいた騎士人形を一刀の下に破壊する。

周囲を覆う騎士人形の数、その二動作で消し飛ぶ。数はその寸劇の間でかなりの数が掻き消えた。残される鎧の破片。折れた剣。元々騎士人形であったはずのそれらは、一瞬のうちにして姿を消した。

伊爽の鬼神の如き戦いぶりに、意思のない騎士人形たちさえ慄きその動きを止める。その隙を伊爽は見逃さない。

剣を床に突き立て、自分の周りで更に溢れ踊り狂う魔力を練り上げる。

そして魔法を行使するために必要な詠唱を唱えることもなく、伊爽はただ一動作。一瞬のうちに想造構築を終え、腕を頭上に突き上げてその術を解き放つ。

水属性魔法階位第一上位 《絶対零度の氷魔》
アブソリュート・ゼロ

伊爽がその魔法を発動させたのとほぼ同時、虚空の空間に亀裂が走る。そしてそれは次の瞬間ガラスが割れるような破碎音を立てて砕け、その空間を異空間と締結させる。

そして次に起きたのは一際響き渡る咆哮。人の可聴域を超えた獣の遠吠え。

割れた空間から現われる、蒼氷色の毛並みを持つ、巨大で雄々しいと気高き赤眼の狼。

階位第一上位の魔法は魔法の中でも最強のもの。それは自然現象を異常発生させるなどと言う生易しいものではなく、異界に存在する強力な力を持つ力の化身を召喚し、彼らの力の片鱗をもつてして敵を殲滅する魔法。

伊爽の呼び出したのは水属性内でも最強クラスの霊獣。氷毛の魔狼 《神ヲモ喰ラウ狼》
フェンリル

伊爽の魔力によって召喚された狼は、その爛々と輝く双眸で眼窩に蔓延る騎士人形を見据える。

そして忌々しげにその表情を歪ませ、その生え揃う鋭利な牙の備えられる口を開き、そして吼えた。

咆哮は衝撃波と化して広間を襲う。轟々と響く獣の咆哮。それは魂さえも凍てつかせる氷冷の息吹。

召喚主が敵と認識する全ての騎士人形が、《神ヲモ喰ラウ狼》の咆哮を浴びて極寒たる絶対零度の氷枢に閉じ込められる。

やがて咆哮が収まり静寂が来たる。

すべての騎士人形が凍りつき、《神ヲモ食ラウ狼》は満足げに一度頷いて見せ、開かれた空間へとその姿を消す。

成り行きを傍観していた四人が、終わったのだと安堵の吐息を漏らす。

伊爽も方から力を抜き、循環を続けていた魔力を収めようとした。
『まだだ！』

剣の中に眠るネロが叫ぶ。同瞬、台座に安置されていた水晶が、最初の時を遥かに凌ぐ禍々しいきらめきを放つ。

砕け屠られたはずの騎士人形たち。正確には壊され砕かれた騎士人形たちの残骸が、一斉に虚空へと浮き上がる。そしてそれは中に舞い上がり、黒砂の竜巻と化して虚空を踊る。

砂塵の旋風が轟音と共に収縮し、一つの形を成す。

轟音が静寂に変わり、そこに現われたのは巨大な黒い鎧を纏う人形。

それを見た誰もが、その巨大さに目を剥き、思考を停止させて見入った。

巨大な姿と、その姿が醸す異様なまでの禍々しさ。まるで恐怖が具現したかのような圧倒的な存在感。空気さえも凍りついたように、全てを威圧する殺気が広間を満たす。

『傀儡無勢が調子に乗るな！』

そんな凍りついた空気の中でネロが叫び、それに発起されたように伊爽が床を蹴ってその騎士姿の巨像目掛けて疾駆する。

魔力によって肉体を強化した伊爽の速度は人域をはるかに凌駕す

るものだった。

瞬く間に巨像との間の距離を詰め、飛ぶ。

向かって来た伊爽目掛け、騎士の巨像はその図体に不釣り合いな敏捷な速度で伊爽目掛けて手にする巨剣を一閃させる。

「かあっ！」

怒気と魔力を孕んだ伊爽の咆哮。呼気とともに繰り出された魔力は物質を分子レベルで破壊する超振動と化して剣を受け止め押し返す。

その伊爽目掛け、剣を握らぬ左の腕かいなを唸らせて振るう巨像の一撃。その一撃を伊爽は纏う魔力の壁で受け止めながら後退する。

『ガキ。今ある全ての魔力を剣に込める』

ネ口の声に伊爽は即応するように纏う魔力全てを剣に練り込めた。先ほどまで空気を震わせていた魔力の余波が刹那にて掻き消える。渦が止み、まるで風が訪れたかのような静寂が訪れる。

それに反比例するかのように、伊爽の手にする剣から圧迫してくる、その存在を世界にまで知らしめようとするかのように存在を主張する黒塗りの剣。そしてそれに呼応するかのように輝きを増す伊爽の双眸。

件を通して脳裏に浮かび上がる呪文言語による構築式。それを伊爽は疑問視するでもなくただ本能でそれを放つべきだと判断し、練り上げた魔力をその構築式そのままに発動させる。

剣が纏っていた魔力が、淡い無数の色彩を纏い輝きだす。

同時に刹那の疾走。

誰にも気づかれることなく、伊爽はその姿をたった一步で巨像の足元に移り、跳躍。

剣を振り上げ、剣を手にする巨像の右腕を両断する。ズシッと重いものが地面に落ちる音がはるか眼窩から伊爽の耳朵を叩く。跳躍の勢いをそのまま殺すことなく、伊爽は巨像よりはるかに高い位置まで飛び上がる。

剣が纏っていた光が輝きを増し、その県全体が封じていたあの膨

大な量の魔力が輝きと共に解放たれる。

そして現われたのは、騎士の巨像を囲むように逃さぬように展開される、伊爽の手に握られる剣より二周りほど大きな剣。

その数は一体どれほどか。無数に虚空に佇む黒塗りの長剣が、圧倒的存在感を支持する騎士巨像を逃さぬよう縦横無尽に取り囲んでいる。

それをはるか上空で見下す伊爽が、手にする剣を頭上に突き上げ、ネ口と共に怒号する。

「『貫け！』」

その声は虚空に存在する全ての件へと告げられる伝言指令^{コマンド}。

そしてそれに即応する全ての剣。

空を漂っていた剣が全て同時に動き、一斉に騎士の巨像を襲撃する。存在する無数の 千本の剣が、全て同時にその騎士を捉え、全てがその鎧を貫通し、まるでその空間に縫い付けるかのように騎士の巨像を拘束する。

そして騎士の頭上で渦を巻く、剣に封じられていた魔力。開封されたあの人の知りえる領域を超えた量の魔力が開放され、伊爽の翳す手の先に滞空する黒き剣の力を具現する。

魔力の開放が起こす剣の変化。

伊爽の伸ばす手の先に姿を現す、禍々しくも神々しい異形の巨長剣。伊爽の身長をはるかに凌駕する長さで巨大さを持つ剣が、伊爽の魔力を纏い力を、威力を、威光を増す。

ファンタズマゴリアナイトアーツ^{シュヴァルツ・エンデ}
交響想歌騎士式魔剣技《黒剣の断罪者》。

手に翳す巨大な剣を、伊爽は臂力の限りで振り下ろす。槍を投げるかのような姿勢で振り下ろされる巨大で禍々しく、そして神々しくもあるその剣が、眼窩の騎士巨像の頭頂を目指して真空を切り裂き、空間を穿つ。

魔力を纏った巨剣の一撃。

それは狙いを一寸たりともずらさず騎士の巨像を穿ち貫いた。
魔力が一撃の威力を更に強固なものとし、断罪の如き凄まじさをもつてして騎士を砕く。

標的を逃さない必殺の一撃。

空気を唸らせ、真空を穿ち、全てを貫く剣の断罪者。千の従者と共に巨悪の存在を正義の鉄槌をもつてして、その存在を畏怖する存在の代理として、その剣は騎士を穿ち、破壊する。

串刺しになった剣から魔力が爆ぜる。

あの過大な魔力が瞬間的大解放され、無色の爆炎と共に衝撃波を放ち、貫いていた騎士人形をその一撃の下に完砕する。

騎士巨像の残骸と、砕かれた床が衝撃波の余波で巻き上がり、粉塵となってレイラたちの視界を妨げた。

そしてその粉塵が晴れた時、まず飛び込んだのは床に降り立ち悠然と構える伊爽と

その足元に転がるあの水晶だった

四人が伊爽の様子に呆然とした表情で見守っていると、伊爽が不意に膝を折り、次の瞬間背中から大の字に床に倒れた。

『イサっ！？』

四人が声をあげ、倒れた伊爽に即座に駆け寄る。

やって来た仲間たちを、伊爽は不思議そうな表情で迎えた。四人が揃って心配そうに伊爽を見下ろす。だというのに、伊爽はまったく立ち上がる気配がない。

「イサ？」

そんなイサの様子に不安を覚え、レイラが首を傾げながら声をかけると、伊爽は何処か気まずげな表情を浮かべ、しばらくあられない方向に視線を彷徨わせ、そして更に少し逡巡して見せた後、躊躇いがちに言葉を口にした。

「……あゝ、その……身体が動かなくて……起き上がれなくて……」

…」

その伊爽の言葉に誰もが首を傾げる中、ルナファレフはしばらく頤に指を添えて考え、やがて答えに至ってその症状を口にした。

「もしかして……魔力の拒絶反応^{リバウンド}……かしら？」

そう問われた伊爽の顔が、瞬く間に紅潮する。拒絶反応とは、魔法使いが自身の操りきれぬ魔力より多くの魔力を扱った際に起こす疲労症状で、訓練をつんで部を弁えている魔法使いならまず起こすはずのないもの。

魔法使いとして十分鍛錬を積んでいる伊爽からして見れば、そのような初歩的失敗をしてしまったことは羞恥以外の何ものでもない。そんな伊爽の心情が分かったレイラたちは揃って顔を見合わせ、次の瞬間腹を抱えて大爆笑した。

それもそのはず。ほんの一瞬前まであれほど凄まじい戦いぶりを繰り広げた伊爽が、その反動で身動きが取れないとなれば、それもその原因が魔法使いの初歩的失敗ともなれば、さすがに笑いを堪えきれない。

だから彼らは笑った。あれほどすさまじいことを繰り広げる奴も、やはりれっきとした人間なのだと。他の犬歯や魔法使いと大差ないのだと。自分たちと何も変わらない、仲間の手を借りねばならない、仲間なのだと。

そして笑われる伊爽は、泣きそうになりながら失笑と自嘲の入り混じった苦笑を浮かべ、仰ぐようにして背後を見る。

そこにはあの時診た白い花が一輪、寂しそうに咲いていた。

一瞬だけ垣間見たあの少女は誰なのだろうか？ あの子が、あの花の主なのだろうか？

そんな疑問を抱きながらも、伊爽はその花と、そして一瞬垣間見えた少女に向けて、心の中で礼を述べた。

姿なき何処かの誰かさん。

アナタに一言だけ、言わせてください。

ありがとう。

06：永遠

疲労困憊、満身創痍のぼろぼろな状態ではあったが、伊爽たちは何とか依頼の水晶を手にアシユミエの町に舞い戻ってきた。

そして遺跡探査の疲れも癒えぬまま店を訪れた伊爽たちに、アレリアは冷ややかな目で五人を見た後、呆れたように一言。

「なんじゃ、生きていたのかい、お前ら？」

その言葉にジントニツクは当然のようにキレ、さすがのジルバーンも怒りを抑えきれずに震えていた。レイラやルナファレフの同様で、それが故に起こるタイミングを逃した伊爽が彼らを宥めたのが今から数十分前のこと。

宥めたのち、伊爽はアレリアに水晶を手渡した。すると彼女は、

「この童以外、奥に入れ」

そう言っただけを引連れ、アレリアは奥の部屋に入っていた。

理由もよく分からないまま一人蚊帳の外となった伊爽は、仕方なく一人椅子に座り、店の中で一人静かに時が過ぎるのを待った。

魔力の異常使用による肉体の疲労もあったため、休むには丁度いい。伊爽はその暇な時間を全て瞑想に使い、精神の休息を行っていた。

改めて意識を集中して顧みると、自分でも驚きが隠せぬほど精神的疲労が生じていた。

魔力の異常使用によって生じる拒絶反応はその証拠。肉体ではなく精神的疲労が肉体を強制的に休息させることで起きる一種の金縛りだと昔教わったのを思い出す。

（魔力の操量には自信あったけど……さすがにあの量はさすがに厳しいか……）

魔力の維持には限界がある。操れる総量を超えれば気づかぬうちに肉体にも精神にも負担がかかることになる。

それが分かっているからこそ、伊爽は考える。

この先、もしかしたら今回のような状況に陥る可能性はゼロではない。そうなれば、自分は必然的にあの力を引き出す必要がある。引き出している間はいいが、その後に必ず訪れるあの言い表したい虚脱感万人に理解できるものではない。分かることがあるとすれば一つ。拒絶反応で動けない状態は、完全なまでに無防備だということだけ。

いつ如何なる状況でもあの力が引き出せ、その上で発動後の拒絶反応に耐えられる精神と魔力操量を身に着けない限り、このままでは諸刃の剣にしかない。

「やっぱり……もっと修行が必要だな……」

小さくため息をつき、伊爽は瞑想を止めて天井を仰いだ。

「イサイサ」

その時、不意に誰かに声をかけられ、伊爽は椅子に凭れ掛かった状態のまま声のした方向を向いた。

「レイラ？ それに皆も」

「人のことを気に掛ける前に、お前はまず姿勢を正せ」

凭れ掛かったまま首を傾げると、予想通りジルバーンが叱咤してきた。伊爽は「はい」と言いながら姿勢を正し、椅子にしっかりと座っておくから出てきた皆を見る。

レイラ、ジルバーン、ルナファレフ、ジントニク。全員が揃って伊爽を真剣な眼差しで見据えている。

その視線に疑問を感じ、伊爽は半歩引いた姿勢で声をかける。

「あの……皆どうしたの？ そんな真剣にボクなんか見て」

『なんでもない』

四人が揃って声を発し、揃って首を振る様子は結構滑稽なのだが、あえて何も言わず伊爽は納得しておくことにした。

伊爽は諦めたように嘆息しながら立ち上がり、方を上下させてから四人の誰に言うでもなく問う。

「皆はもう終わったんですか？」

伊爽の問いに、ジイルバーンは答えるように肩を竦めて見せ、顎で背後のドアを指した。

「ああ、私たちは終わった。次はお前の番だそうだ」

「イサだけ、別、って言われた」

レイラの言葉に伊爽は首を傾げる。

何故自分だけは別なのか？ その理由がまったく分からず、伊爽は少々困惑気味になる。

「いいから行けよ。婆さん待つてるからよ」

「女性を待たせるのは、男性としてマイナスよお。イサくん」

「分かりました。行きますよ」

ジントニックやルナファレフにまで急かされ、伊爽は自身の中にある疑問を解くこともできぬままドアを開け、部屋の奥へと入っていった。

その背を四人が見送り、ドアが閉まったのを確認して揃って方の力を抜いた。

そしてジイルバーンがメガネの位置を直しながら、何処か気抜けした様子の三人に問う。

「……あの老女の言っていたこと、本当だと思うか？」

「私は、信じる。違っていても、私は、イサと行くから」

ジイルバーンの問いに即座に答えたのはレイラだった。誰を見るでもなく、レイラはいさの入っていったドアのほうに視線を向けている。

「あいつがもし、あの婆さんの言った通りあの場所に行くというのなら、俺は行くぞ」

「そうね。何よりあの子の見せたあの時の力。あのお婆さんの話通りなら納得できる。その上でもし、彼があのだ地に行くというのなら、私も一緒に行くわ」

ジントニックもルナファレフも、ジイルバーンの問いに正確な答えを返してきた。その返答を聞き、ジイルバーンは腕を組んで顔を顰める。

「全ての願いが集い……そしてその願いが叶うと云われる、幻の遺跡……か」

ジルバーンは先ほど老女に占ってもらったのは、友人の仇の行方だった。

その問いに返された言葉は、

『お前さんは今とある遺跡を探している。そしてその遺跡はお前さんのその嘗ての友人が捜し求めていたもの。ならおのずとその遺跡は向こうから姿を現す。それも恐らく、近いうちに』

レイラは自分に呪いをかけた人間の居場所。

その問いに返された言葉は、

『求めるものはすでになく、しかしてその継承はいずれかにいる。そして知るのは得られぬ望み。しかし諦めるでない。悠久の古都。そこに至れば願いは叶うだろう』

ルナファレフは創造の魔女の所在。

その問いに返された言葉は、

『彼の魔女の願い、この世のいずれにも存在しない。だが、同時に何処にでも彼の魔女の願いは存在する。願いが集う幻の地に、魔女は居座っている』

ジントニツクは自分の身体に彫られた刺青の消す方法。

その問いに返された言葉は、

『ぬしの求めるものは、あの童の求めるであろう地にある。それは皆が目指す地に同意。望むものが叶うと謳われる今はなき楽園に、その蝕みを消す御力が眠るはず』

誰もがあの老女の言葉に反論する言葉を失っていた。あの老女に、自分たちは探し物があるとだけ告げたのだ。すると老女は自分たちの告げていない部分まで読み解き、それに対する返答を口にした。

狐につままれた気分だった。

そして皆に返された話の内容に、一つ共通するものがあつた。

誰もが一度は耳にしたことがある名であり、冒険者やトレジャーハンター、それに遺跡探査者を始めとし、多くの国々がこぞって探す誰も見つけられない伝承の都の名が。

「これでもし、イサがその地の名を口にするのなら……」

全てが偶然かは分からない。だが何処か確証があつた。

全ての答えは、あの幻の地にあるのだと……。

そこに立つ四人誰もが、同じ名を心の中で思ったのだろう。

ファンタズマゴリア……と。

部屋の中に入り、伊爽は水晶を乗せたテーブルを隔てた向こうに立つ老女に目を向けた。その老女と目が合う。

「来たか童。さあ、そこに立て」

「あ……はい」

伊爽は素直に老女言葉に従い、老女と対峙するようにテーブルの手前に立った。

すると老女は、伊爽が何かを言うよりも先に口を開き、言葉を發した。

「お前さんの願いは分かつておる。白い花の正体であろう？」

伊爽は老女の問いに何も答えなかった。この手の占いというのは相手の反応を見て言葉を選ぶものがあると知っている。

だからあえて何も答えず、何も言わず、伊爽は老女の言葉だけを待つ。

「お前さんは気づいているだろうが、私はね、今の人間がずっと探し求めている王国の人間さ。すでに齡五千はいつている、彼の地ファンタズマゴリアの魔術師だ」

やはり、と伊爽は心の中で呟いた。そうでなければ、あの遺跡で起動した魔術のつじつまが合わない。あの魔術はファンタズマゴリアの人間しか知らない、特殊な術法だと昔祖父に教わっている。

そんな伊爽の内心を読み取ってか、アレリアは伊爽を見上げて苦笑した。

「すまないね。お前さんを試したんだよ。お前さんが、本当にその剣を持つに相応しい人間なのか。そしてあの御方を託していい存在なのかを……ね」

「あの御方？」

そこで初めて伊爽は口を開いた。彼女の問いにはすでに占いとは関係ない、謝罪であり、同時に納得したような言葉が混じっていたからだ。

伊爽の問いに、アレリアは静かに頷いて見せた。

「そう、あの御方。お前さんの探し人だよ。白い花の咲くところ、必ずあの方はおられる。私には見えているがね。普通の人間には見えないんだよ」

その声音は哀愁に似た何か宿っていた。その見えざる存在に対して敬意を持ち、それ故にその存在の運命を嘆くように、哀しさと寂しさ、そして不憫さが籠もる声音。

アレリアの瞳が伊爽を見る。

「だがお前さんは感じる事ができる。そして何より、お前さんは選ばれた。あの御方に、そしてその剣に。我らの総意を継ぐ者。それが主だと私は確信した」

それはどういう意味か？　そう伊爽が問うより早く、アレリアは微笑み、言葉を発した。

「だからこそ、私はこの命を費やしてでも、お前をあの御方に合わせると決めた」

アレリアがそういった刹那、伊爽の足元が淡い光を発して魔方陣を浮き上がらせる。魔方陣に標されている呪言配列は間違いなく魔術の呪文言語。即ち、ファンタズマゴリアの魔術によって創り上げられた魔方陣。

考えるよりも先に、伊爽はその魔方陣の危険性を察知し叫んだ。

「アレリア！？」

ただし、危険性があるのは伊爽ではなく、この魔術を行使しているアレリアのほう。

伊爽の言いたいことを見透かしたのか、予想していたのかは分からない。

叫ぶ伊爽に対し、アレリアは満面の笑みを浮かべ、恭しく伊爽にこうべを垂れた。

「我らの総意を継ぐ者、伊爽よ。あの御方を、おぬしに託す。だから、頼んだよ」

アレリアがそう言った刹那、伊爽の視界はまばゆい光に遮られ何も見えなくなり、その幻想的光に飲み込まれ、そして

寸前まで眼前至っていたはずの伊爽の姿はすでにない。
それを見てアレリアはほっとしたように肩の力を抜いて　その場に膝をついた。

「……永遠様のことを……頼んだよ……ネ口を継ぐ者……伊爽よ

「
その言葉を最後に、アレリアはその場に崩れ、目を閉じた。
その表情は微笑み、安らかなものだった。

その空間を表現する言葉は何か？ 伊爽は視界の先に広がうその空間を見て、知りえる限りの言葉を模索した。

無であり有。

無限にして有限。

何もなく、同時に何もかも存在しているそんな不可解な空間。

上下の概念もなく、立っているのか浮いているのかも分からない、無重力のようで重力を感じる空間。

矛盾の世界。そして同時にその矛盾こそが正しいとを感じる世界。時間という概念さえも存在せず、体感する時間が一秒とも一年とも差異がないとさえ思ってしまう世界。

何処までも続き、果ての見えない彼方。それとも果てはすぐそこにあり、ただ単に気づけないだけなのか。

その不可解な世界を見渡し、伊爽は誰にともなく呟いた。

「此処は……一体……」

「？時の狭間？です……」

声が出た。誰のいかなかったこの世界で、突如背後から誰かの声が。伊爽は反射的に振り返り、その声の主を見て 驚いた。

そこに立っているのは、あの遺跡でほんの一瞬だけ邂逅したあの儂げな少女。

腰まで伸びる灰銀色の髪と白い法衣。感じ間違えることのないこの気配。

あの花の気配と同じ気配。それは間違いなくこの少女のものだった。

た。

「……君……は……」

なんと言葉を掛けていいのか分からず、伊爽は告げるべき言葉を捜して視線を彷徨わせる。

それと同瞬、少女が動いた。数歩伊爽に歩み寄り、伊爽の胸に飛び込む。

突然の出来事に困惑する伊爽を他所に、少女は伊爽の外套をぎゅつと？み、顔を伊爽の胸に押し当てた。

辛うじて飛びついてきた少女を抱き留める伊爽。

「あ、あの」

「……つと……えた」

伊爽が問うよりも早く、少女が何かを呟いたため、伊爽は啞然とした表情のまま抱き留めた少女を見下ろした。

「……つと……やつと会えた……」

震える少女の肩。その震えは何からくるものか？ 哀しみか、喜びか、それは伊爽には分からない。

ただ今の伊爽に出来るのは、ただその少女を抱き締めるだけ。その震えが収まるまで、かすかに聞こえる嗚咽が収まるまで、腕の中にいる少女を抱き締めるだけだと、自然と悟った。

「ごめんなさい……その……取り乱してしまつて」

しばらくのち、冷静さを取り戻した少女は赤面したままそう告げて伊爽に謝罪した。

そのあまりの恐縮ぶりを見ると、逆に伊爽のほうに申し訳なく感じてしまい、伊爽は両手を振って見せた。

「いや、別に気にしないから。だからそんな畏まらなくていいよ」

「そ、そうですか……」

そういつて、少女はまたも申し訳なさそうに小さくなる。そんな少女の様子を見て、伊爽はどうしたものかと首を傾げて考えようと

した。

「永遠……」

「え？」

不意に呟かれた少女の声に、伊爽は首を傾げて少女を見た。その少女は、真剣な眼差しで伊爽を見上げ、もう一度搾り出すようにその言葉を口にした。

「永遠……といいます。私の名前」

しばし目を瞬かせた後、伊爽は彼女の言った言葉の意味を理解して頷いた。

「ああ、と、永遠ね。そうなんだ。あ、ボクの名前は」

伊爽が自分の名を口にするよりも早く、少女は伊爽の言葉を遮って、

「知っています」

そう言った。

「え？」

「知っています。貴方の名前。伊爽という名前」

「あ、そうなんだ……でも、何で？」

当然の疑問だった。どうしてあったこともない少女が、自分の名を知っているのか。そんな伊爽の問いに、少女　永遠は意地の悪い笑みを浮かべながら言った。

「ずっと、見ていましたから……貴方のことを」

いたずらを告白するような少女の笑み。だが、そこには何故か、小さな寂しさがあった。

その意味がすぐに理解できず伊爽は首を傾げたが、すぐに答えに至り、永遠に問う。

「じゃあ……あの花は……」

問い掛けではなく、それはやはり、確認だった。

一言が欲しかった。その少女の口から立った一言。伊爽が望む一言を、紡いで欲しかった。

そして、そんな伊爽の想いに答えるかのように、永遠は少しだけ

逡巡したあと、その一言を継げた。

「はい……私です」

その一言だけでよかった。その一言が、明確な答えだった。たった一つの、答えだった。

伊爽は言葉を失い、呼吸することさえ忘れて視線をあちらこちらに彷徨わせた。

そしてその彷徨っていた視線は、やがて眼前の永遠に向けられる。永遠の目は一心に伊爽を見つめ、伊爽の視線はその永遠の視線とぶつかる。

その少女の瞳を見て、伊爽は吐息を漏らした。

そして思う。

ああ、そうだ。

ボクはずっと探していた。

ずっとこの人を探していた。

この人に会いたくて、その声が聞きたくて、ボクはこの半年間、旅をし続けてきたのだ。

その想いが心に浸透する。

そして浸透した想いが、自然と伊爽に言葉を口にさせる。

「君に、会いたかった」

その一言。その一言だけでよかった。

伊爽の口から紡がれたその一言に、永遠は目を剥いて驚き表情を強張らせ、少しだけこうべを垂れて伊爽から顔を隠す。

肩が小刻みに震え、無音の空間に小さな嗚咽が木霊する。

そして、不意に永遠が、嗚咽の間隙を縫うように、小さく言葉を紡いだ。

「……ありがとう」

伏せていた頭を上げて、視線をしっかりと伊爽の目線に合わせて。その灰銀色の双眸を涙でにじませながら、永遠は笑う。

「貴方が……私に気づいて……くれたから、私は、独りではなくな

りました……」

頬を涙の筋が幾つも零れ伝い最中、永遠は嬉しそうに、幸せそうに笑んだ。

「だから……ら、ありがとうございます」

「……永遠……」

そんな永遠に、伊爽は彼女の名を呟きながら何か伝えるべき言葉を探す。

その時だった。

足元から湧き上がる淡い光の奔流。その光の強さ、大きさが、少しずつ大きくなりながら伊爽を飲み込みだしたのは。

「時間……みたいですね」

「時間？」

永遠の呟きに、伊爽は首を傾げて問う。

永遠は伊爽の問いに頷き、言う。

「この空間　？時の狭間？は数多ある世界を隔てるために存在する空間です。そこは本来人間の至れる場所ではない。私はずっと昔にある理由で此処に放逐されていますが、それでもない限りこの世界に人間はこれないのです。」

それをアレリアが強力な魔術で貴方をほんの少しの間だけ送還した。そうすることで、私とあなたを一時的にめぐり合わせてくれたんです。自分の命を代償にしてまで……」

予想はしていたが、とわから告げられた現実はかなり厳しいものだった。

あの時発動した魔術方陣の魔法構築式。かすかにだが読み取れたその術法には、確かに自身の命を代償にする代償魔法の術式が組み込まれていた。

「どうして……そこまでして？」

アレリアの心情が理解できず、伊爽は困惑するように頭を抱えた。そんな伊爽に、永遠は寂しそうな表情で言う。

「アレリアが言っていました。貴方は、全てを託せる人だと……」

伊爽は何と言っているかわからず、かぶりを振ることしかできなかった。しかし光の奔流の強さが増し続けている事に気づき、慌てて伊爽は正面に立つ永遠を見た。

永遠は伊爽から数歩離れるように下がり、寂しさと哀しさの混じった、哀愁を纏ったまま伊爽に微笑んだ。

「……さようなら。そして、ありがとう……貴方と一時、こうして話せて、嬉しかった」

その頬を、涙が一筋伝った。

それを見て伊爽は手を伸ばす。

「永遠っ！」

その瞬間、立ち上る光の奔流の輝きが最高潮に達し、伊爽の視界を、そして伊爽を飲み込んだ。

「永遠っ！」

彼の 伊爽の声が耳朶を叩いた。

そしてそれはいつまでも木霊し、永遠の心の奥底にある琴線まで触れる。

再び訪れた静寂。

永劫の無。

刹那であり永遠である時が、再び訪れた？時の狭間で、永遠は独りその場に泣き崩れる。

会えてよかった。

本当に良かった。

それなのに、心の奥から湧き上がるこの感情は何か？

「伊爽……伊爽……伊……爽……」

心の奥から湧き上がる感情を何とか抑えようと、永遠は彼の名を

幾度も口にした。

愛しい人の名を、幾度も、幾度も……。

誰にも知られることなく、その孤独な少女は静かに涙を流し続けた。

伸ばした手が虚しく空を切った。

伸ばした手では何も？めず、自分の無力さに打ちのめされながら理不尽に目の前のテーブルを叩いた。

「クソッ！！」

吐き出される怒号は誰に対してのものか。伊爽はただ自分の無力さを嘆き、苦渋を吐き出すように吼えた。

あれほど近くまで辿り着けて、それなのに何もできなかった自分。その自分が恨めしく、無力な自分を殺したくなる。

自分の無力さを改めて痛感し、伊爽はテーブルに凭れ掛かるように膝をついた。

口から吐き出されるのは呪詛のような自分への罵り。意味のないことだと分かっているにも、それを止めることができない。

こみ上げてくる衝動を抑えるように、伊爽は自分への罵声を繰り返す。

そんな事を繰り返し、どれほどの時間が過ぎただろう。一分だったかもしれないし、一時間だったのかもしれない。時間というもの忘れ、伊爽は自分を罵り続けていた。

その伊爽の視界に飛び込んだ、一枚のメモ。それはもう命が費え、

冷たくなり動かなくなったアレリアの手に握られていた。
そしてその握られた手から辛うじて覗いた、「イサヘ」という文字。

伊爽は慌ててアレリアに歩み寄り、その手に握られているメモを取った。

そこには伊爽にあてた伝言^{メッセージ}が標されていた。

ファンタズマゴリアを探せ。そこに全てがある。

？時の狭間？に囚われしあの御方を解放してあげておくれ。

そなたに、全てを託す。

永遠様を、救ってあげておくれ。

アレリア

「ウィガーハイツより

親愛

なる伊爽「オーディネルへ

ファンタズマゴリアの魔術でのみ使われる呪文言語で記された、自身にあてられたメモ。

伊爽はメモから視線をアレリアに移す。すでに命の灯が消え、静かに永眠についている老女。その老女から託された想い。

自身の命を用いてまで、永遠と自分を廻り合わせた恩人の遺言。伊爽は今なお胸の中で荒れ狂うものを吐き出すように息を吐き、そしてアレリアに一人、黙祷を捧げた。

「必ず……やり遂げてみせる……だから、安心して眠ってくれ。アレリア「ウィガーハイツ」

別れの言葉を告げ、伊爽は一人部屋を退出した。

残されたのは、安心したように、そして眠るような表情で椅子に腰掛ける老女だけが残された。

「イサ！」

アレリアの見せの外に出た刹那、レイラが伊爽を見てすぐさま飛びついてきたのに驚きつつ、伊爽はレイラを受け止めながら首を捻った。

「どうしたんだいレイラ？ そんなに慌てて」

「そんなに慌てて？ じゃねぞコラっ！」

返答する代わりにジントニツクが伊爽の頭を殴った。軽く殴った程度の力だったが、伊爽は顔を顰めながら咎めるようにジントニツクを見据える。

「なんで殴るんだよ？ ボク、なんか悪いことでもしたのかい？」

「心配をかけたのよお」

「は？」

ルナファレフの本当に心配そうな表情と声音に伊爽は分けが分らず首を傾げた。そのルナファレフの背後では、安堵と呆れの入り混じった表情のジルバーンが立っていて、伊爽に歩み寄りながら口を開いた。

「疑問に思ったのなら背後を見る。全てが分かる」

ジルバーンの言葉に更に首を傾げながら、伊爽は言われた通り振り返って、そして絶句した。

今し方出てきたアレリアの店は、入った時とはまったく別の、完全な廃屋と化していた。

その有様に驚愕し、呆然としたままの伊爽に向けて、ジルバーンが更に言葉を続けた。

「お前が奥の部屋にいった後、我々はこの店を出たわけだが、それ

とほぼ同時に見せの奥から光が漏れてな。収まったらこうなっていた」

その説明だけで十分だった。この店は恐らく、アレリアの魔力であの姿を維持していたのだろう。そのアレリアの命が費えた今、店を保っていた魔力もなくなり、本来の時間によって風化した姿となったのだろう。

彼女と共にその命を終えた、一族の止まり木たる店。

止まり木の主は自分に全てを託したのだ。そう思うからこそ、伊爽は尚の事彼女の意思に報いられなければならない。

そして何より、あの少女を　永遠を助けたい。その意思は明確なものとなり、伊爽を動かした。

伊爽は抱きついたレイラを下ろし、皆を振り返って静かに口を開いた。

「ボクはこれから、ファンタズマゴリアを探します。ボクの求めるものはそこにある。だからボクは行きます」

刹那、四人が揃って目を剥いた。

伊爽はそんな皆の表情に疑問を覚えた。

ファンタズマゴリアといえば、多くの冒険者が捜し求め、そして誰一人とて見つけることのできない幻の地であり、今ではそんなところを表立って探そうとする人間はいない。そんなことを人前で明言すれば、笑い者になるのが落ちだ。

実際伊爽は、皆に笑われることを覚悟の上でそのことを告げたといいのに、彼らの表情に浮かんだものはそういった人を馬鹿にするものではなく、純粹な驚きだったのだ。

思わず首を傾げようとした時、すぐ側に立っていたレイラが手を挙げ、伊爽を見上げて口を開いた。

「行く。伊爽と一緒に。ファンタズマゴリアに」

「レイラ？」

眼窩の少女の発現に目を剥く伊爽の横で、ジントニツクは唇の端を吊り上げながら笑い、片手を伊爽の肩に乗せ、もう片方の手を上げて見せた。

「俺もだな。この刺青消すには、もうそこを頼りにするしかないし」「ニツクも？」

それに続くように、ルナファレフが妖艶な笑みとは異なる素の微笑を浮かべながら右手を上げる。

「私も行くわ。あのお婆さんの言っていたことも気になるし、元々当てなんてないんだから。いっそ皆と行くわよ」

「ルナさんですか？」

皆の予想外の発現に困惑する伊爽を見て肩を竦めながら、ジイルバーンは苦笑と共に一步前に出て伊爽に言う。

「元々私はファンタズマゴリアを探しているのだ。だから……丁度いい。お前とはもうしばらく一緒にさせてもらおうでしょう」

「ジ、ジイルさんまで……」

レイラの進言から次々と皆が便乗し、伊爽を囲むように笑みを浮かべている。

伊爽は皆の顔を順に見て、そして大きく安堵の息を吐いて笑った。「そうですね。行く場所、目指す場所が一緒なら、皆で行ったほうがいいですよ」

伊爽の言葉に、四人が揃って頷いた。

伊爽はそれにもう一度笑みを返し、

「これからよろしく。皆」

そう言った。

『こちらこそ』

四人が揃って言葉を返した。

伊爽が、レイラが、ジイルバーンが、ルナファレフが、ジントニツクが揃って笑う。

楽しそうに、嬉しそうに笑いあう。

同じ旅路を歩む仲間と共に、その仲間が此処に集えたことに、誰にともなく感謝して。

そんな彼らの様子を、淡く光る白い一輪の花だけが見ていた。

エピソード

星と月が夜色の空をかすかに彩る。

そんな空を宿のベランダから見上げる伊爽。

レイラはすでに眠り、大人二人は宿の一階で経営する酒場で酒を飲み、ジントニクは何処かにくり出して行った。

そんな中、一人物思いにふけていた伊爽の足は、自然とこのベランダへと向いたのだ。

襟巻きも外套も脱ぎ、一時の休息を感じながら、伊爽は今日という日を思い返していた。

とてもとても、多くの出来事があつた気がする。

アレリア。

ネロ。

ファンタズマゴリア。

そして永遠。

今日一日で出会い、そして死に別れた人。

戦いの最中継承した、剣の中に眠る謎大存在。

自分たちの周りで僅かながらその存在を垣間見せる、未だ誰も知らない伝説の王都にして遺跡。

そして？時の狭間？という、この世界を含めた数多ある世界を隔てる狭間の空間であつた、自分が捜し求め続けた人との初めての邂逅。

色々な出来事がありすぎて、未だに困惑を隠せない伊爽だった。

だから空を見上げ、その夜空に散りばむ星々を見上げてみたのだ。何も考えず、ただ無心に星を見上げていれば、特に何も考えずにすむからだつた。

トンッ

まるで誰かがベランダに降り立ったような音と共に感じた気配。それはいつもと同じ、儚げでおぼろげな、今にも消えてしまいそうな希薄な気配。

それを感じ取り、伊爽は考えるよりも早く振り返り、その場所を見た。

いつもならそこには白い花が一輪咲いているだけ。だから攻めてその花だけでも見たいと思っていた。

そこに花が咲くということは、永遠がそこにいることを意味しているのだと思って。

だけで今回は違った。

そこには確かに白い花があった。

だが、それだけではなかった。

まるで幻のように幽かではあるが、そこには確かに、永遠が立っていた。

「永遠っ！」

思わず声を上げて、伊爽は永遠に歩み寄った。

手を伸ばし、その存在を？もうと思った以上に歩む速度が速くなる。

手が触れるか否かの刹那、伊爽は躓いてしまいそのまま永遠に倒れ掛かり

その身体をすり抜けて、伊爽は顔からベランダの手すりにゴツツとぶつかった。

「痛ぁ　！？」

思わず声に出してしまう伊爽。

そんな伊爽に、幻のような永遠が駆け寄って心配そうな表情で伊爽を見る。

「大丈夫、大丈夫だから……」

苦笑しながら伊爽は永遠にそう言う。

そしてすぐに二人は目を合わせて、次に首を傾げ、そしてやっとそのことに気付いた。

「永遠！ 何で？ どうして君の姿が見えるんだ！？」

伊爽は驚愕のあまり声を張り上げて永遠を見た。永遠のほうも困惑しているらしく、両手を口に当てて所在なさに視線を彷徨わせた。

今まで見えなかった存在の姿が、幽かとはいえ確かに見える。以前はまったくと言って良いほど見えなかった永遠の姿が、今は何故か見えるのだから、混乱せずにはいられない。

それは永遠も同様のようだった。

慌てたそぶりで伊爽を見つめ、何かを叫ぶように口を開閉させている。

どうやら何かを喋っているようだが、どうやら声までは聞こえないらしい。

そのことに気づき、伊爽は慌てて永遠にそのことを告げると、永遠は何処かがっかりしたように肩を落とし、ため息をついて見せた。しばらくの間呆然としていた二人だが、ようやく冷静さを取り戻し、伊爽は立ち上がって正面に立つ永遠を見た。

おぼろげだが、確かにそこには永遠がいる。

伊爽はその理由を考えあぐ抜き、仮説を立ててみた。

「もしかして……一度ボクが永遠と会っているからかな？ その人の存在を知っているかいないかでは差があるとか」

その伊爽の仮説を聞いた永遠は思い当たる節があるらしい。伊爽はその永遠の反応を見て、一つだけ質問した。

「もしかして……アレリアには、君の姿は見えていたのかな？」

伊爽のその問いに、永遠は大きく首を振って頷いて見せた。そうになると、伊爽の仮説の信憑性が増す。

嘗ての伊爽は、花が咲いている場所に永遠がいるとは知っていなかった。

知らない＝存在しない、存在を認めないのと同義。存在しないという事はその存在自体無視され確立しない。だからこそ、誰の視界に入ってもその存在を知られていない永遠は気づかれるはずがない。

だが、永遠という存在を知った今の伊爽は、永遠を知っている。即ち永遠という存在を認めている。なればこそ、今の伊爽に永遠の姿が見えても可笑しくはない。

そう理論づければ、今の自分に永遠の姿見えるのも納得がいく。以前見えなかった人の姿が、今は見える。

それがどれほど自分にとって喜ばしいことか。そして何より、自分の存在を認めてもらえる永遠にとって、どれほど嬉しいことか。

二人はどちらともなく見つめあい、どちらともなく微笑んだ。

夜の静寂が二人を包む。

その静寂は嫌なものではない。心の静まる、優しい静けさ。

その静寂の中、伊爽は永遠に問う。

「永遠。ボクの声は、聞こえるよね？」

伊爽のその問いに、永遠はゆつくりと頷いた。伊爽の声をしっかりと感じ取るかのように、少女は静かに、大きく頷いてみせる。

「残念だけど、君の声はボクには聞こえない。でも、姿は見える。君が此処にいるのは分かる」

ゆつくりとゆつくりと、彼女が確認できるように伊爽は言葉を紡ぐ。

永遠は目を潤ませながら、何度も頷いて伊爽を見つめる。

そんな永遠を見て、伊爽はネロの、そしてアレリアの言葉を思い出す。託された想いを思い出す。

それは気がつけば自分自身の願いとなっていたことに、今伊爽は気付いた。

悪い気分はしない。

二人の願いは、自分の願いとも化していることに不快はない。

伊爽は触れることのできない永遠の手を、両手で包むようにした。触れた官職はないけれど、その存在は確かに感じ取れるその手を取りながら、伊爽は永遠の目をしっかりと見つめる。

そして静かにゆつくりと、言葉を選んで紡ぐ。

「永遠。ボクは君に、約束する」

今は触れられないその手を、いつかしっかりと触れるために。

今は聞こえない彼女の声を、いつかしっかりと自分の耳で聞きために。

今は自分にしか見えない少女の姿を、いつか皆に見せるために。

そのために自分がすべきこと。そしてしてあげられることを考え、考え抜いて、自分の望みと託された想いに応えるために。

今この時、この少女にしてあげられることは一つだけ。

約束の言葉を、この少女に

「必ず君を見つけ出す。必ず、？時の狭間？から君を助けてみせる」

今出来るのはこれだけ。

自分自身に誓いを立て、そしてこの少女を救うことを約束するにと。

「だから、待っていてくれ。永遠」

手を離し、伊爽は黙って永遠を見つめた。

濡れていた双眸から次々と零れ落ちる涙の雫。

両手を口に当て、漏れる嗚咽を必死に堪え、永遠は一心に伊爽を見つめた。

何度もしゃくり上げ、何度も嗚咽を零しながら、永遠は伊爽を見つめて、聞こえないと分かっているながらも言葉を口にした。

誰よりも優しく、誰よりも愛しいと思う、目の前に立つ少年へ。歡喜と感謝を。

そして伊爽に会えて幸せだという想いを少しでも伝えたくて。

聞こえなくても、永遠は伊爽に泣きながら笑んで、全ての想いを込めて口にした。

「ありがとう」

」

そう言って、永遠は伊爽に微笑んだ。

夜空に浮かぶ月と星だけが、その二人の間で交わされた約束の邂逅を見つめていた。

エピソード（後書き）

一応この話はこれにて完結ってことになってます。続きとか考えてはあるけど、現状では書く予定がないので、此处で一区切り。何かのきっかけで続きを書くことも無きにしも非ず程度でよしなに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5480v/>

ファンタズマゴリア 交響想歌

2011年8月9日03時38分発行